

転生特典が使い辛い件 について『完結』

サルスベリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

演目、神様ミスし過ぎでしょう?! 主演、巻き込まれ系シヨタ主人公。助役、神様に仕事を押し付けられた過労死寸前の女神様、転生特典の方々、舞台はりりかるなのは、ほのぼの日常系だと思おうと死ぬかも知れない、そんな理不尽痛快コメディ開幕。

目次

転生特典なんて言われても	1
戦力かたつて言われても、かたつて何？	
ラキシスさくくん	13
能力を教えてもらつています？	28
炎が出せる刀つて寒い時に便利ですよ	
ねつて、違うの？	44
地上最強と史上最強つて意味が違うらしいです。あれ、リーナさん、頭を抱えてどうしたの？	61
説明するしかなかったんだよ、深雪さん	
75	
転生者いるつてイオナさん、どうします	
か？	94
眼を貰いましたよ、リーナさん	108
原作開始ですよ、ラキシスさん	126
頑張つて考えたんですよ、リーナさん	146
頑張っている親友のためなんですよ、深雪さん	165
呼び出しがあるつてさ、イオナさん	183
どうしてそんなことしたのさ、ラキシスさん？	200
困っている子は放っておけないよ、リーナさん	217

言ってる意味が解らなかつたんだよ、深

雪さん

235

止めないでイオナさん、王様が教えてく

れたから

254

転生特典なんて言われても

痛いなあ、と思つて体を起こすと、そこは見知らぬ廊下の真ん中で。

ええくくなにここ？

なんでこんなところになるのか解らないけど、とりあえず冷静になろう。よくお父さんが言つていた、『人間、混乱したら負けだ』つて。

よし冷静になろう、冷静になろう、冷静に。

れいせいってなんだっけ？ 習つたような、習わなかつたような。

うくくさん、とりあえず。

「マスター」

頑張つて歩こう！ ジツとしていても解らないものは解らないんだ！

「マスター」

お父さんもよく言つていた！ 人間、止まったら負けだつて。よし動くぞ。

「マスター？」

「え、僕のこと？」

立ち上がって振り返ると、そこにはすごい綺麗なお姉さんがいた。

「初めまして、『ファティマ』の『ラキシス』です」

「え、お姉さんだれ？」

「え？」

「え？」

え、誰なんだろう、ふあていまってなんだろう？

「誠にすみませんでした!!!」

それにあの土下座しているお姉さんって何？

世界つてとんでもないと思うのは、裏側を知っているから。

「だからさ、俺は思うわけよ。俺みたいな一般人がいざ戦闘になって戦えるってさ、それなりの能力を貰っていないとだめだつて。だからさ、ギルガメツシユいいよね、ああいう能力なら頑張れそうじゃん？」

「はあ」

長々と語る相手の話を最後まで聞きながら、手元の端末を操作する。

ギルガメツシユと。『王の財宝』と『乖離剣エア』は不味いのではと感じるのだが、相手がそう望むなら仕方ないか。

創造神からも『全部オツケーで』と泣きながら言われているし。

「次の人々々」

「技術チートで。自分の手で兵器を作れるのは素晴らしい、技術系知識と技術、それを形にできる資材が溢れる基地を望む」

「は、はい」

ではガンダム系の基地でいいかなと検索をかけて。

「機械ならばすべていい。ガンダム以外も望んでもいいかな？」

「だ、大丈夫です」

機械アニメの知識と技術も含めて。これもかなり不味い部類の能力ではないだろう

か。

「基地は移動式がいいな。何か浮遊大陸のようなものがあればなおいい」

「了解」

浮遊大陸とは大きく出たものだ。人の望みは無量大とはいうが、まさか基地を望んで浮遊大陸なんてものを言われるとは思わなかった。

「次の人〜」

「AKDが欲しいです！ ファティマ欲しいです！ MHを動かしたいです！」

「あ、はい」

勢いそのまま言われて、頭痛がしてくる。いったい、何処の世界に突撃するつもりなのだろうか。

後は任せたと去って行った清々しさは、とても好感が持てるけど。

「斬魄刀ってかっこいいよね?! 流刃若火を使いたいです！ 後はお任せ！」

「ええ〜」

なんか、言っただけだけど。これはいいか。

「第四真祖。ただそれだけを望む。他はいらん」

最近の子は人の話を聞かないっていうけど、本当らしい。

「魔法科高校の劣等生ってあるじゃん？ あれでさ、深雪とリーナといちゃいちゃした

い

「ええ、その特典でいいんですか？」

「もちろん、分解と再生は二人が使えるようになって。俺は普通でいいよ」

「はあ」

不思議なこと言う人だな、普通は自分に欲しいって言わないのかな。

「アルペジオがいい。イオナとムサシとヤマトが欲しい。戦艦を操って世界の海を旅したい。次元世界とか宇宙も行ってみたい」

眩しい、凄く純粋な想いを感じます。なるほど、人間は面白いものですね。

「はあ、今の人で最後つと」

後はこの特典をそれぞれの魂に入れて、補正もかけてと。あ、補正だけ先に設定したほうが、後は振り分けただけだから。

間違えないようにしないと、間違えると後の処理が大変だから。

よっし、これで。

「次の追加あるよ！」

ポチ！

「ええええ?! 神様やめてくださいよ! もうやめましょうよ!」

「まだまだ頑張れ女神!」

「創造神様ああ!!」

まったくもう、あの人は神様転生にはまってから、仕事が多くなって大変なんだから。はあ、また残業かな。

「女神様!! 何してんですか?!」

「へ?」

「なんであんな多い特典を『普通に生きている少年』につけたんですか?!」

「え、あれ?」

あ、設定が間違っている。現代に適した補正じゃなくて、現代に生きている人についているになっている。

決定ボタン、押した後?! え、嘘、補正とか修正とかしてないそのままがついちやっているの?!

「あ、後付け設定を」

「無理ですよ、それももう実行済みじゃないですか。できるとしても弱体化とかできないようにって、かなり強固なプロテクト組んだの誰ですか。それに魂に付加したら、剥がすのは殺すしかなくなりませんよ」

「ふえええ、よっし、謝ってこよう、大丈夫、人間への謝罪は神の必須スキルだから」

「うわあ〜うちの神様たち、人間への失敗が多すぎ」

よっし、行くぞ、まずは土下座だ。

「と、言うわけです」

「へへへへ」

うん、解らない！ 小学生には解らない単語ばかりです、もう頭が痛くて逃げ出したいです。

「あの、それって本当なんですか？」

「はい」

「ああ、それで。マスター、解りましたか？」

「解らない！ え、マスターって本当に僕のこと？」

「はい、そうですよ」

そっか、そうなんだ、ラキシスさんが言うにはそうなだろうけど、なんで僕なんだか。

「あ、それと、特典が入ったので少し知識とか精神が育つ可能性が」

「精神の成長を促す、身体能力はどれほどですか？」

「たぶん、英霊クラスまで上がるかと」

「ギルガメツシユ王の能力と斬魄刀が入れば確かに」

よっし、二人の言っている意味は解らないけど、とにかく家に戻らないと。お母さんとお父さんは心配、してないかな。

あ、そっか、死んだって言われたんだ。事故って言われたけど、どうして事故にあったのか知らないし。

そもそも、二人の仕事が何かも知らないんだよな。

おじさんは教えてくれなかったし、『魔導師だからな』といわれても意味が解らないよ。

よっし、泣くのも叫ぶのもやった。後はとにかく家に戻ろう、もうないかもしれないけど、家に戻ろう。なんか、『あいつらは根こそぎ持っていくな』とか言っていたから、もしかしたら親戚の人たちが持って行ったってことかな。

いさんそうぞく？　っていうの、欲しがっていたって言っていたし。

「マスター、どちらに？」

「え？ 家に帰るよ」

「ここ『も』マスターの家ですよ？」

「え？ え？」

あれ、なんで二人とも頷いているの。え、ここって何処、だって見たことないくらいに綺麗なところだから、きつと王様が住んでいるような場所なんだよね。

「ここは『フロート・テンプル』の朱塔玉座です」

「え？」

どこそこって僕が思っていると、ラキシスさんがきつと手を振って、そしてモニターみたいなものが何かを映した。

「空?! 街がたたくさん?! 何処ここ?!」

「……女神様、あのここって『デルタ・ベルン』ですよね？」

「あ、修正されてない。なんで最大レベルで固定してあるの？」

「え？ まさか、ですよね？」

「ごめん、その通り」

あれ、ラキシスさんが驚いた顔しているけど、何があつたの？

女神様が顔面蒼白だけど、どうしたの？

「まさか惑星一個分ですか?!」

「AKDって惑星を領地にする天照の国家だから、そのままじゃまずいから修正しようとしてそのまま。テヘ」

「うわあ、マジだよ、この女神、なんたる駄女神」

「お願いだからそんな眼で見ないで！ で、でもね、いいこともあるよ」

「なんですか？」

「ほら！ 星すべてを支配しているから『王の財宝』の中身が凄いいい！」

「喜ぶところじゃない」

あ、ラキシスさんが女神様の顔を握った。あれって確か、アイアンクローって奴だよ。プロレスで見たことある、あれ柔道だったかな？

「で、具体的に転生特典はどうなっているんですか、女神様？」

「あ、はい」

その後、女神さまは無事？ に天界に戻りました。

「というわけです」

「解った、把握」

「まあ、そのようなことが？」

「なにそれ、不味いんじゃないの？」

僕は思う。女神様は困っているし、本当に反省しているから許してあげようと思う。

でもね、なんでこんなにお姉さんばっかりの中に置き去りにされたのかな？
「がんばりましょう！」

ラキシスさんに。

「了承」

イオナさんに。

「ではしっかりと補佐しますね」

深雪さんに。

「やってやろうじゃない」

リーナさんに。

遠くから見ているお姉さんたちと、ロボットたちと。

「よっし、僕は帰る！」

「いえ、ですからここがマスターの家ですから」

「海鳴に帰る！」

よく解らないから帰ろうと思います！

「あれ、こーすけ君、どうしたの？」

「なのはちゃん、年上のお姉さんってきれいだけど、怖いよ」

「ふえ？」

やっと戻れた海鳴の小学校で、クラスメートのなのはちゃんに僕はそんなことを言ったのでした。

うん、なのはちゃんはそのまま育ってほしいな。

そんなことを思う『佐藤・浩介』十歳の春でした！

戦力かたつて言われても、かたつて何？　ラキシスさく
くん

こんにちは！　佐藤・浩介です！

僕は解った気がします。十歳ですけど、さとつたと言つていい気がします。

これは夢です！

『雑種といつてやろうか？』

『子供相手にムキになるなよ』

『小童、苦勞しておるのう』

　　なんだか金髪の男の人と、だるそうなお兄さんと、すつごい長い白ひげのおじいさんが目の前にいます。

『あゝ〜チュートリアルって奴だ』

『我が教えるだと？　ふざけた神もいたものだな』

怖いです、体中が震えています。

な、なんでこんな目に合うんだらう？ あれ、僕って寝たのかな、学校に行つたはずなのに、夢の中ってどうして？

『ふむ、どうやら間違えたようだな』

おじいさんが不思議そうに髭を撫でています。間違えてなんだろ？

「すみません、ごめんなさい」

「あ、女神様だ」

「ごめんなさい、チュートリアル・モードの誤作動です、ごめんなさい、本当にすみませ
ん」

土下座している人って初めて見たよ。

「佐藤、寝ているのか？」

あ、先生だ。あれ、ここは教室で隣でなのはちゃんがかつちを見ている。

「先生！ 金髪のお兄さんとだるそうなお兄さんと白ひげのおじいさんに会いました
！」

「そっか、大変だったな。おまえは今日は早退してもいいぞ、大変だろうからな」

「大丈夫です！」

帰ったら怖いことになりそうだから。

「佐藤く～くん、保護者の方が御迎えに来てますよ」

え、誰？

僕の今の保護者って、誰だろう。あ、ラキシスさんだ。

こうして僕は、体調不良って理由でラキシスさんに手を引かれ、早退することになりました。

ズシンともものすごい音がしました。

「ロボットだあ」

「MHといいます。出力とか武装とかは、言わなくてもいいですよね？」

「はい覚えられません！」

「マスターの手足となって動いてくれるので、覚えておいたほうが・・・私が頑張りますね」

うん、なんだかラキシスさんが両手を握ってる。あれってガッツポーズだよね、なんだか気合とか入れる時にするらしいけど。

「あれ、これをどうするの?」

「これで帰ります」

え、何それ?

「つまり、自家用車でのお出迎えではなく、自家用MHでお出迎えです」

「なにその凄い話?!!」

車でお出迎えってアリサちゃんとかすずかちゃんがしてもらっているけど、僕も送ってもらったことあるけど。

ロボットでお出迎えって、そんな凄いことになるの、なんで。

「実は、マスターの家とこの世界は繋がっていなくて。どうにか座標だけ確認したのですが、車でお出迎えしようにも車での転移はまだ難しくくて。どうせならレポートできる機体ってことで、MHにしてみました」

「そうなんだ」

うん、難しい話は解らない。もっと簡単に優しく言ってくれとありがたいなあ。

「MHって言うんだ」

「機体名は『レッド・ミラージュ』です」

その時は僕はそうなんだと頷いていた。僕は知らなかった。これが『最強の幻影』と呼ばれる機体で、とある世界では見ただけで恐怖にかられるほどに強い機体だつてことを。

「てれぽーと?」

「瞬間移動です」

「ふへえ〜」

「ちなみに、ミラージュ系はもつと凄いのあるんですけど、これが無難かなあつて結論になりました」

「すごいのは何?」

「百メートルくらいの大きさとか、マスターは好きですか?」

「なのその大きさ?!」

「正確には二百メートルなのですが」

「ロボットつていうより山?」

「そうですね」

なんか、遠くを見ているラキシスさんがいて、僕は子供だけど空気を読みました。きつと、これは聞いちゃいけないことなんだよ。

でもでも、きつと僕はこれは質問していいと思う。

ロボットのコクピット？ はかっこいい。操作しているラキシスさんもかっこいい。初めて見た、朱塔玉座もかっこいいし、大陸が浮いているのも驚いた。フロート・テンプルって言うのかな、それもかっこいい。

でも、到着した場所からずらりとロボットが並んでお出迎えは、ちよつと僕は困ってしまいます。

「お帰りなさい、我らが主」

「………帰る」

「ですからここがマスターの家ですから」

「帰る！」

「マスター、ここがマスターの家なんです」

「だってラキシスさん！ あんなの城じゃないの！ 城が家って僕は王様じゃないから！」

「え、でも英雄王の技能を持っていますよね？」

「誰それ？」

「金髪の男の人ですよ」

う、会ったことあるような、ないような。

「世界のすべてを手に入れた王様ですよ」

「……僕には関係ない気がします！」

「マスターの転生特典ですから」

「転生してません！」

「あ、そこはあの女神様が間違えたので」

うん、解ってる。知っている、話は聞いたけど、信じたくないって思うんだよ。

諦めるってこんな気持ちなんだよね。あ、そっか、僕の家つてもうないんだ。あの家も全部、親戚の人が持って行っちゃったから。

「あ、ちなみにマスターの生まれた家ならあそこにありますよ」

「本当だ!! ありがと、ラキシスさん!!」

「はい、あそこを博物館にして『我がマスターの歴史』としますので」

なにを言っているんだろう、この人？

佐藤・浩介は思う。

「眠れるわけないじゃないの！」

彼は叫ぶ。見た目も巨大、中身は豪華、テレビでも見たことない城の内部の自室は、昔の家が入るほどの広さを持っていたりして。

寝室だけで二十五畳とか、必要ない気がするのだが、ラキシス曰く『これが一番、狭い部屋でした』とのこと。

「普通って尊いものだなあ」

佐藤・浩介、十歳にして心理を悟る。

その一方で、ラキシスは難しい顔でモニターを見ていた。

「マスターの護衛役が必要じゃないの。私たちの誰かがついてないとだめじゃないの？」

アンジェリーナ・クドウ・シールズ、通称はリーナの言葉に誰もが頷いている。最もな意見だと誰もが同意を示せるのだが。

「しかし、マスターはまだ小学生。その中を護衛として入るとなると、教員か事務員しかありません」

司波・深雪の言葉に、確かにと誰もが頷いた。

「光学迷彩」

イオナが救いのようにアイディアを出すと、今度は反対側から別の意見が挟まれる。「光学迷彩の技術は開発中です」

ラキシスが困った顔でちよつと視線を泳がせる。確実に何かした後の彼女の仕草に、他の三人が半眼になって睨む。

「正直に話せば、処罰は見送るわよ?」

「何をしたのですか?」

「白状しろ」

リーナ、深雪、イオナに問い詰められ、ラキシスは白旗を上げた。もちろん、実際に小さな白旗を右手で振りながら。

「さ、先に歩兵戦力かなって重火器を含めた歩兵火力の開発とか、装甲服の開発を命令していました」

「え、待つて、それでも生産ラインと開発ラインは残るわよね?」

うる覚えのように呟くりーナに、深雪が肯定を示す。

「フロート・テンプルではなく、デルタ・ベルンの地上開発施設のラインは全部で八十二、その内の三つだけでも一日で十個師団の装備生産が可能なはずですよ」

「開発ラインは二十八、どれも量子コンピュータも使っている。全部、使うことはない」
イオナも口を挟む。

女神から与えられた転生特典の技術チートは伊達ではない。本来なら持ち主が開発にかかわるところなのだが、AKDが欲しいといった転生特典が混ざり合って、独自の技術を生み出し、開発を行って、生産して現場に配備できるようになっている。

これにフアティマも加わり、ガンダム系チートのGジェネの基地機能も合わさると、技術チートが頭脳集団を形成して次々に新技術を開発、あるいは新装備を開発して生産しているような、そんな凄まじいことを可能としている。

「技術検証は必要なので」

「なので何よ？ 何したの？」

小さくなっていくラキシスを、さらに問い詰めるリーナ。

深雪とイオナは小さくため息をついて、端末を操作する。彼女が言うより確認したほうが早いから。

そして知る。ラキシスが何をしているか、を。

「リーナ、ちよつとその馬鹿を捕まえておいて」

「これは許せない、ギルティ」

「は？ 何したのよ、ラキシス？」

「……私じゃないんです」

仕方ないか、と彼女は真実を語る。

もう気づいた時には、システムは動きだしていた、と。

ガンダム系、マクロス系、ゾイド系、そんな種類ごとに開発をしているとか、新型技術を使っているとか、それらを複合しているとか、そう言ったものではない。

師団規模での生産を開始されているラインを見つめ、ラキシスは遠い眼をしながら語った。

「あの女神」

「今度は何したの、あの駄女神」

「最終戦争を想定した戦力を生産していききました」

溜息と共に出された答えに、誰もが小さくため息をついたのでした。りりかるなのはってほのぼの世界なのに。

眠れない、落ち着かない、こんな広い部屋なんて嫌だって言ってたら、部屋が片付けられて、部屋の片隅に畳を敷いてもらえました。

壁もすぐに作ってくれて、六畳間ができました。

凄いなあ、うんうん、こういう部屋がいいよ。広い部屋って落ち着かないから。よつし、後は机を貰って、僕は勉強しないと。宿題は貰っているから。

あれ、携帯電話に着信、なのはちゃん？

『コーすけ君、お家がなくなっちゃったよ?!』

あ、そっか、なのはちゃんに何も言っていない。幼馴染に何も言っていないって僕は酷い奴だなあ。

「ごめん、引越した。ほら、僕のお父さんとお母さんが亡くなって、親戚の人に引き取られたから」

『そうなんだ。ごめんね。あのね、プリントを届けようと思ったの』

「ありがとう、じゃあ『あの公園』で待っていて、取りに行くよ」

『え？ 家の場所を教えてくださいたら届けるよ』

待って、それは駄目。僕が辛い、なのはちゃんにこの家を見られたくない。うん、かつ

こわるいとか嫌だつてことじゃなくて、こうなんだかキラキラした眼で言われそうだから。

『王様になったの』つて。

「僕が取りに行くから大丈夫だよ」

『解つたの、じゃ公園で待っているね』

「お願いね」

通話を切つて、と。さてどうしよう、あそこまでどうやって行けばいいんだろう。ラキスさんをお願いして、またロボットで行くとか。

目の前にロボットがいきなり出たら、なのはちゃんは驚くかな。うん、驚いて凄いつて言つて解体しそうだな。

機械好きなどころあるからなあ〜さあどうしよう。

あ、なんか目の前に金色の御船が浮かんでいる。羽根があるし、きつとこれなら『大丈夫』だよ。

なんだか、金髪の男の人が『私の財宝だが、今は貴様のものだ。特別に許してやろう』つて言っている気がするけど、いいよね。

「よっし、お願い」

乗つて手で叩くと御舟はすっごい速さで城から飛び立て。

あれ、部屋の中から外に出たのに、壁が壊れてない。どういう原理なんだろう？

『お前は少しは考えろよ』って、だるそうなお兄さんに言われた気がしたけど、まあいいよね。

後ろでなんか、白いおつきなザリガニみたいなものがいたような気がしたけど、気のせいだよね。

よっし、なのはちやんがいた。

「お待たせ、なのはちやん」

「………こーすけ君?! その御船どうしたの?!」

「どうしたんだらうね?」

あ、この船のこと隠すの忘れてた。

一方、フロート・テンプルでは。

「マスターがいない?!」

「全騎士団は緊急警戒！ マスターが拉致された可能性があるわ！」

「全師団は全装備使用可能、情報部門は近隣の調査を行いなさい」

「全艦艇、緊急出港。艦載機、すべてを起動、緊急索敵を」

「マスター不在のために権限を代行します！ 非常事態宣言を発令！ 全ユニットは決戦準備を！」

ガチで世界を滅ぼせる戦力が、大混乱でした。

その後、普通に戻った浩介の無事な姿に、ラキリス、リーナ、深雪、イオナが腰を抜かして泣きだしたとか、お説教をしたとか。

能力を教えてもらっています？

「びいまーな？」

『たわけ、『ヴイマーナ』だ』

「ヴいまーな？」

『小僧、本気でやっているのか？』

「がんばってます！」

「こんにちは、佐藤・浩介です。」

また悟りました。これは夢です、絶対に夢です。なんか昔のエジプトみたいな宮殿の上で、金髪の男の人と発声練習しています。前に出した金色の御船って『ヴいまあな』って言うらしいです。

この人が言うには、きちんと名前を呼べば出てくるってお話なので、きちんとお名前を呼べるように頑張って発声練習しています。

『初歩の初歩だが、貴様に扱えるのか？』

「がんばります」

『努力は認めてやろう。私の宝物庫を扱うには十分と、認めてやらなくもないが。しかし、このような小僧とは』

好きで貰ったんじゃないんですけど、そんなことを言ったら怒られそうなので黙っています。

後、この人の名前ですが、ぎるがめつしゅ？ というそうです。難しい名前に何度か舌を噛みました。

『ギルでいい』

半泣きしたらギルって簡単に呼んでいいと、認めてくれました。見た目は怖いけど、優しい人だと思います。

きつと。

『見る、あれが貴様の宝物庫だ。私の宝物庫はこの世のすべての財が入っていたが、貴様のは多次元世界のものも入っているようだな』

「え？」

たじげんせかいつて何なのか、聞いちやダメかな。ダメだろうな、ダメって感じだな。『いや待て、おい待て。なんだその顔は？ まさか貴様、自分の蔵の中身を知らぬのか？』

「知りません。くらつてなんですか？」

『そこからか。まったくあの女神も……いや待て、まさか『また』か？』

あ、ギルさんが頭を抑えています。頭痛でしょうか、あれは痛いのですぐに治るといいなあと願っています。

『あの駄女神め。宝物庫の設定に細工をしたな。この世界ではなく、『人が関わったすべて』に変えるとは』

よく解りませんが、ギルさんが調子が悪そうなので、今日はここままでと思います。

『さて貴様！ ええい！ この『空間の支配権』は貴様にあるのだぞ！ 貴様が終わると。待てといっているのが聞こえんのか?!』

「大丈夫です！ 『ヴィマーナ』！ 言えました！」

『たわけが！ それだけではなく』

あ、朝だ。

朝です、起きました。起きたけど、なんだか体中がダルイ。もう少し寝ていたいけど、学校に遅刻できないし。

「よっしピンポイント！」

「さすがリーナ！ 後は座標を固定して転移地点を確保して」

「なんだか、朝からリーナさんとラキシスさんが騒いでいます。朝ごはんってまだ食べてないんじゃないかな。」

「はい、どうぞマスター」

「あ、はい」

深雪さんにマスターって言われると、なんだかくすぐったい気持になるんだけど、止めてくれないよね。

ラキシスさんが最初にマスターって言うから、皆がマスターって呼んできて困るんだけど。

「今日は何で学校に行きましようか？」

「艦艇で」

イオナさんがぐいぐい来ます。もう止めてください、『かantee』で行ったら僕はクラ

スメートに何を言われるか。

『かanteeい』ってなんだっけ？

「マスターは戦艦と空母、巡洋艦と潜水艦、どれがいい？」

「え、あのそれってなんですか？」

「船の種類」

御船かあ、御船ならもうあるからいいや。

「最大で一キロの船もある。ロマンが素晴らしい、乗ってみると病みつきになる」

うん、止めておこう。

「大丈夫です、僕はギルさんの訓練で御船を呼べるようになりましたので」

「え？」

「はい？」

あ、イオナさんと深雪さんが固まった。ふっふっふ、僕だって何時までも子供じやなのですよ。頑張って一人でやれることはやらないと。

「ごちそうさまでした。じゃ」

身支度を整えて、歯磨きして、制服を着て、鞆を持って。

「『ヴィマーナ』！」

あ、本当に出た。うわ、ギルさんって凄い人なんだ。

『貴様、信じていなかったな?』なんて、脳内でギルさんの声が聞こえた気がするけど、気にしたら負けだつて僕の何かが叫んでいる。

「じゃ行つてきまあああす」

「マスター?!」

止めたつて駄目です、僕は振り返らない男。涙を流さずにくーるにさるのがいい男だつて誰かが言つていたから。

くーるつてどういう意味だつて?

辞典で調べてみようつと。

あれ、学校が見えて通り過ぎた。『ヴィマーナ』つて速いな、これなら車に乗らなくてもすぐに目的地に着ける、便利だな、見た目が派手で降りる場所を選ぶけど、便利だな。さてと、あの公園の茂みに降りて、『ヴィマーナ』を宝物庫に入れて。

「くーすけ君?」

「あれ、なのはちゃん」

なんでここにいるの?! あれ、なのはちゃんの通学路だった! なのはちゃん、バスじゃないの、なんで徒歩で学校に行つているの?!

「くーすけ君、あの御船とその金色の輪っかは何なの?」

「なのはちゃん、学校に遅れるよ」

「教えてくれないの？」

語尾がなのなのになっっている、ちよつと怖い。見た目はいつもと変わらないのに、なんか背負っているみたいで怖い。

「教えて教えて教えて」

ぽかぽかと叩いてくるので痛い、ような気がする。なんだろう、昔なら痛かったのに今はちよつと触れたような感じではない。

『そりゃ、第四真祖だからな』、『死神にあの程度ではのう』とかお兄さんとおじいさんが言っているけど、どういう意味なんだろう。

僕はそのままなのはちゃんに叩かれるままに学校に行きました。

そして、授業を受けている僕に突き刺さる視線がいくつか。

なんでアリサちゃんとすずかちゃんにも見られているの？

僕、何もしてないよ。

浩介不在のフロート・テンプルでは。

「へえ〜中々いいじゃない」

「え？　なんでリーナさんがMHを操縦できるんですか?!」

ラキシス絶叫。まさかまさかで、リーナがレッド・ミラージュを操っている。本来なら騎士とフェアティマが揃っていないと動かない機体が、たった一人のコントロールで縦横無尽に駆け抜けていく。

さすが、脳内に演算を積んでいるとか、CADの補佐があるとはいえ科学的な魔法を使う魔法師。

一方、深雪は動かせない。純粹な身体能力の差か、あるいは『転生特典』関連で身体データが改ざんされているか。どちらかは誰も答えを出せないでいるが、リーナは動かして深雪は動かせない。それが事実。

一通り訓練場を動かしたリーナは、ハンガーにレッド・ミラージュを戻し、コクピツ

トから出て歩いてきた。

「今度、私がマスターを迎えに行くわよ？」

「いいですよ。私が行きますから」

「遠慮しないでラキシス。ほら、私は対人戦もできるから、適任じゃない？」

「それなら私もできます」

「へえ〜そう、なら強いほうが迎えに行くって言うのは？」

「望むところですよ」

バチバチと二人の間に火花が散る。ゆっくりと二人はそれぞれの右手に、自分の武器を取り出す。

リーナは銃の形のCADを、ラキシスは光剣を。

隙を窺うことなく体を動かし始め、そしてどちらともなくぶつかりかけて、両者の足元が凍りついた。

「お二人とも、ここが『どこか』忘れましたか？」

冷たく見つめる深雪の言葉で、二人は武器をしまう。

ここは朱塔玉座、マスターの居城。敵の侵入以外で、この場にて武器の使用は認められず。暗黙の了解が二人の脳裏を駆け抜ける。疑問を挟まず、それが当たり前だと確信して、二人は両手を上げた。

「悪かったわよ、深雪」

「すみません」

「二度はありませんよ?」

にっこりと微笑む深雪はとても綺麗で可憐のだが、その気配は冷たい極寒の空のようで、二人は震えるように頷いたのでした。

「とにかく、MHの製造はこれで終了ですね」

話題を切り替えるように深雪がモニターを展開した。次々のデータを流し画像を映し出すモニターは、次に別の人型兵器を浮かべる。

「ガンダム系ねえ。本当に必要なの? 二十メートル以下の人型兵器なら、MHのほうが速度、攻撃力共に高いじゃない」

リーナが反論を口にした。確かにMHの反応速度はスバ抜けている。銃弾を回避する人型兵器なんて、何処の世界を探してもないだろう。あるいはあったとしても残像攻撃が可能とすれば、大抵の敵が直接対決はしないで回避していくだろう。

MHに対抗できるのはMHのみ。その中でも最高レベルの機体が、『レッド・ミラージユ』だ。動力炉の見直し、装甲材質の再構築、武装のアップグレード、間接や機体フレームの新規製造と、知り得た知識と技術を使って見た目はそのまま中は別物にした機体は、作ったラキシス達にとっても思わずに引いてしまうほどの機体になってしまっ

た。

「強すぎます。この機体を市街地で使ったら、恐らく十万人の都市くらいなら一日の戦闘で灰燼になります。そうなったら、マスターは悲しみます。だから市街地戦になったとしても、周辺を『ある程度、壊さないように戦える』戦力が必要ですから」

ラキシスは説明しながらも、画像を切り替えていく。

基本設計で弾いたもの、戦術を考慮した時に不採用にしたものを除外していき、最後に残った機体はまっ白い機体だ。

「RX-0『ユニコーン』、これを製造します」

「ガンダムではなく?」

深雪が挟んだ疑問に、ラキシスは首を振る。

「ガンダムはすでに製造完了しています。後は技術評価と試験のために、F91とGP03、その追加兵装。リガンダムとその発展形の武装。これらを建造した後、別の可能性を模索します。できれば、核融合炉ではない動力炉を使用したのぞ」

ラキシスが説明しながら、画像を切り替える。話に出たガンダムの機体のデータが別々に浮かび、やがて別世界の機体が浮かび上がる。

「できれば、太陽炉の機体、エイハブ・リアクターも製造したいですね」

「重力子機関のダウンサイジング、やる?」

イオナの提案に誰もが思案顔になった。

できないことはない、かもしれない。データはある、縮退炉、波動エンジン、モノポールエンジンといったSF作品、あるいはロボット作品に出てきた動力炉は実物と同時にデータが『フロート・テンプル』には収められていた。

やろうと思えば、複数の世界の技術を繋ぎ合わせて、完全なオリジナルの機体を作れるのだが、ラキシス達はそこで手を止めてしまう。

禁止項目だから、神様側でロックをかけていたからではない、それをしたら引き返せないのではないかと、と危惧してしまうから。

もつと深い場所に、戦争のない世界に、戦争の道具を持ち込んだ。そこからさらに技術を発展させたら、『もつと凄惨な戦争を呼び込むような』気がして。

「重力子機関のダウンサイジングを行います」

ラキシスは俯いていた顔をあげて、そう告げる。

「やるの?」

「いいのね?」

リーナと深雪の『覚悟したのか』の問いに、彼女はゆっくりと頷く。

「私たちが躊躇した結果、マスターに被害が及ぶことのほうが怖いから。やれることはすべてやります」

「OK、ならやりましょう」

「データの再確認、行いますね」

リーナが頷いて歩き出し、深雪は端末を持ち上げる。

「一人で背負わない。ここにいる皆で護るのがマスターだから」

イオナはそつとラキシスの背に手を触れて、そのまま歩きだして行つた。

「解っています」

そう呟き、彼女も歩き出した。

なのはちゃんの追及を回避して、なんとか学校が終わった後の放課後です。ただいま、佐藤・浩介、ピンチです。

「おい予定にないぞ」

「仕方ないだろ、見られちゃったんだから」

何故か知らないけど、誘拐されました。隣にいるのはアリサちゃんです。すずかちゃんです。

『ふむ、難儀な宿命よのう』なんて、おじいちゃんは呑気だなあ。

「やるか？」

「そうだな。悪いな、小僧、怨みならその化け物を恨みな」

え、化け物、なにそれ。

「いや、止めて」

え、すずかちゃん顔色が悪いけど、そうだよ。こんな怖いお兄さんたちに捕まって、ロープでぐるぐる巻きにされたら、怖いよね。

「すずかがなんだって言うのよ？」

「知らないのか？ そいつはな」

「止めて！」

うわ、初めて聞いたかも。すずかちゃんってあんなに大きな声が出るんだ。

うんうん、でも大きな声なら悲鳴みたいじゃなくて笑い声のほうがいいって思うの

は、僕がだけかな。

「吸血鬼なんだよ！」

へええええ、ええ？

『なんだ、俺達と同じか。いや、それにしても能力が低いような』。だるそうなお兄さんがそんなことを言っています。吸血鬼って、あれかな、血を吸うって言うのかな。でも、すずかちゃんは普通に食事していたし。

「どうだ、驚いたか？」

「だからなんだっていうのよ!? すずかは私の友達よ！」

お〜〜アリサちゃん、かっこいい。これは男として負けてられない。

『そうだよな、女の子にここまで言わたんだ。やろうぜ』。お兄さんも手を貸してくれるみたいだ、良かった。

「そうかよ、おい、もういいぜ、殺せ」

「ダメえええ!!!」

うん、決めた。すずかちゃんとアリサちゃんを悲しませたんだ。

許してやらないからな!

「レグルム・アウルス」

僕がそう眩くと、眩しい光が周囲を照らしました。

『第四真祖の眷獣は十二体。どいつもこいつも暴れん坊だな。一体だけでも戦争みたいなもんだから、扱いには気をつけろよ。って、おまえさ、暴走状態で出すなよ。』

お兄さんに怒られました。途中でお兄さんが制御してくれたので、被害は僕たちが連れ込まれた『廃工場が吹き飛んだ』くらいです。

あ、でももつと被害が大きくなるかな？

『マスターをよくも』

『へえ〜そつか、そつか、マスターをそんな風にしたんだ？』

『誰の許しを得て、生きているのですか？』

怖い声出したラキシスさんと、リーナさんと、深雪さんがレット・ミラージユを引きつれて暴れているので。

これ、僕の責任になるのかなあ？

炎が出せる刀って寒い時に便利ですよって、違うの？

その日、女神様は浩介を見ていた。

「ああ、ごめんなさい、ごめんなさい」

なんだか壊滅しそうな街並みの中で、色々と慌てている少年の姿に、思わずモニター越しに土下座した。

「女神様、それ」

「いいじゃないですか！ だって私の責任でこの子は苦労しているんですよ?! 見守るくらいいいじゃないですか?!」

「いえ、それって『転生能力付与実行ボタン』ですよね?」

「え?」

そして女神様は、下界に降りたのでした。

「こんにちは！ 佐藤・浩介です！ もうね、もうね、聞いてくださいよ！ 誰でもいいから！」

「ダメでしょうが！ なんで暴れるの?!」

今、お説教中です。お説教って、習ったつけ？ まあ、いいや、たぶんギルさんかだるそうなお兄さんか、白ひげのおじいちゃんからの知識が流入？ しているらしいし。

今はこのピカピカ光っているライオンさんにお説教中。

『いやおまえな、無理だろうが』とかお兄さんが呆れているけど、僕はやる。やる時はやる男なのです。

「ちよつと出てピカつと光つて悪者たちをコテンつて倒せばいいのに、吹き飛んじやつたじゃないの?」

あ、首を傾げてる。うんうん、そうやって騙そうつたつて、僕は許さないからね。

「力加減は大切だつて習いませんでしたか?!」

『無茶言うなよ、お前』とかお兄さんがライオンさんをかばおうとしています、僕は

騙されません。絶対にこのライオンさんは力加減できる子だから。

「解った?!」

「がお」

「よおおし! じゃ、もう一度!」

『おい、止める。本当に止める。第四真祖の眷獣だぞ、戦争そのものって奴らなんだぞ?!』とかお兄さんが絶叫していますが、訓練は繰り返しやるからこそ意味がある? つて、ギルさんも言っていました。

『私の責任だ?!』とかギルさんが叫んでいましたが、気にしません。僕はやる時はやる男なのです。

「行け、レグルム!」

「がおおおお!!」

うん、前足でコテンってできるじゃないですか。ちよつと周りの建物が崩れたらしいけど。

え、崩れたの? だって、コテンって前足で壁だけ倒したじゃないの。かみなりだつて出てないのに、どうして?

「もつと頑張ろうか! よおおおし! 僕もがんばろ!」

「がおおお!!」

きあいが入ります。入るって何がしないとだめかな。後でラキシスさんに聞いてみようつと。

後は、と振り返った僕は固まった。

あ、すずかちゃんとアリサちゃんのこと忘れていた。あゝ二人とも寝ているのかな？

「気絶していますね」

「あ、ラキシスさん。リーナさんと深雪さんはどこいったの？」

「悪者さんたちの背後関係を洗っていますね」

背後かんけいって何？ 背中を洗ってどうするんだろう。

「うん、そっか。それで暴れたことについて、説明を要求します。この壊れた街並みどうするの？」

「.....」

あ、凄い汗をかいて顔を反らした。暑くはないから、なんの汗だろう、病気かな。

「つ.....」

「っ?」

「作っておいて良かった、『カーペンターズ』」

ラキシスさんが小さな声で言った後、空をロボットたちが埋め尽くして、街並みが

戻っていききました。

「カナヤゴだけでも作っておこうって私の判断は間違ってた。『最初に勇者王でしよう!』って言われても曲げなかった私は偉い」

「すつごおおい!! あれロボット!? 違うロボットだあ!!」

「はい、マスター。あれこそ壊れた街も一瞬で再生してくれる、凄いいロボットさん達ですよ」

「何処で売っているの?!」

「え?」

あれ、ラキシスさんが固まった。あれ、僕はあることを言っただけかな?

「ラキシス、どうも厄介な話ってどうしたの?」

「あ、リーナさん、深雪さんもお帰りなさい。あのね、あのね!」

「はいはい、どうしました?」

「あれ欲しい!」

僕がロボットたちを指差すと、二人も固まりました。

え、何で。あ、そっか、あんなに凄いいロボットじゃ、売ってないのか、残念だな。一体くらい、お供にして遊びに行きたかったのに。

「ねえ、ラキシス、言わないの?」

「むしろ、言っていないことに疑問を感じますよ?」

「言つて覚えてくれるかなつて」

「あゝ」

「なるほど」

後ろで何か三人が言っているけど、僕は気にしない。いつか、あんなロボットを持ちたいと強く願います。

壊れた街並みは『カーペンターズ』が直してくれました。ありがとう、ロボットさん達。また何かあつたらお願いしますつて言つたら、キラリと光つて敬礼して戻つていきましました。

かっこいいな、あれが『しごとのできる男』つて奴なんだね。よつし、僕もそういう男を目指そう。

「ラキシス、説明」

リーナさん、どうしたの。

「しないといけないと思いますよ？」

深雪さんまで難しい顔しているね。

「えっと、ですね、マスター」

「はい、どうしたの、ラキシスさん？」

「あれも、マスターのロボットです」

「……」

どうしよう、僕はもうあんなに寒いロボットを持っていました。将来の夢ってこんなに簡単に叶うんだ。

おおさわぎ？ になったから戻ってきたフロート・テンプルで、僕は将来の目標を見失った。

「将来の夢、どうしよう」

「え、あの、マスター」

「世界の支配者とか？」

「次元世界の帝王とかお勧めですよ」

「帝国をつくる？」

なんか、リーナさんと深雪さんと、イオナさんが怖いことを言っている気がします。王様ってなりたくないかな。

『いや、貴様、私の能力を得ておいて王になりたくないとは、何事だ』とかギルさんが言っているけど、僕はギルさんの力を貰っただけで、勝ち取ったわけじゃないので。

『ほう、少しは理解したようだな、雑種』ってギルさんが言っているけど、ざつしゅってなんだろう。あ、雑草のように生きろってことか！

『違いわ、たわけが』ってギルさんは冷たい。『まあ、子供だからな』ってだるそうなお兄さんは言っている。

『俺は暁・古城だ』って、こじようさんって言えばいいのかな。『発音はもう少し後かあ』って泣きそうな顔しているけど、仕方ない。僕はまだまだ小学生ですから。

『うん、よつし。じゃ宿題で将来の夢って出されたんだけど、なんて書こう』

「え、帝王？」

「うん、そうね、帝王」

「帝王と書いてください」

「帝王で決まり」

え、それって何、どういう意味なの。教えてくれないまま、皆に進められて僕は宿題に帝王って書きました。

漢字は教えて貰って頑張って書いたけど、これって王様って意味じゃないかな。
まあ、いいか。

あれでも待った、ラキシスさんがあれもって言った気がする。

「ラキシスさん、ひよつとしてレッド・ミラージュとかーぺんたーず以外にもロボットがあるの？」

「はい、ありますよ」

え、僕ってどのくらいのロボットを持っているんだろう。

「そうですね、最近になって出来上がったのは遺伝子工学と人工細胞による、人間に近いアンドロイドをベースとした」

ラキシスさんの説明が解りません。

「マスター、付いてきてる？」

「リーナさん、助けて」

「ああ、よしよし、普段のラキシスってマスターに合わせて説明しているのに、新しい戦力が増えて興奮しているから、もうちよつと待ってね？」

ありがとう、リーナさん。あれ、向こうで深雪さんにラキシスさんが凍らされているけど、大丈夫かな。

「ファティマの耐久力キヤク補正がなければ、やられていました」

「そうですか、いい能力を持っているのですね？」

「深雪さんが容赦ない」

「マスターを困らせる貴方が悪いんでしょう？」

あ、お説教が始まった。

うん、それもいいんだけど、僕としてはロボットのことを知りたいんだけど。

「ああそれなら」

「こつちにある」

イオナさん、ありがとう。映像で見れるって素晴らしい、と僕は思っていました。でもね、見ない方が良かったかな。

「歩兵戦力」

「あ、凄いかっこいい」

「機動戦力」

「へえ〜」

「強襲戦力」

「あ、うん」

「偵察・潜入戦力」

「はい」

「止めておく？」

「ごめんなさい」

頭がいつぱいです。なにこれ、どうしてこんなにいるの、なんでロボットだらけなの、ロボットってこんなに必要なの。

「ちなみに、人型だけを説明している」

「追い打ちじゃないの、イオナ」

「説明は大切」

リーナさん、イオナさん、僕は悟った。小学生だけど、悟りました。僕が何かすると、世界が壊れそうです。

『では、小僧、使って見せよ』

おじいさんが言います。今日は『ざんばくとう』ってものを使う訓練だそうです。向こうでギルさんとこじようさんが、『え、使うの』って顔をしている気がします。

「りゅうじんしゃつか？」

『流刃若火じゃ』

「りゅうじんしゃつか？」

『小童では難しいのう』

発音、難しいです。漢字だから、僕も言える気がする。漢字で見せてもらったら、行ける気がするのにな。

「りゅうじんしゃつかりゅうじんしゃつかりゅうじんしゃか」

『試験前の学生を思い出すのう』

「よっし！ 流刃若火!!!」

あ、出た。

うわあ〜炎だ、炎の刀だ。凄いな、持っているのに熱くないや。

『ん?』

『ほう?』

『あ・・・』

あれ、三人が何かに気づいたけど、なんだろう。

あ、あれえ〜あそこにいるのって女神様だよ。どうしたんだろう、何かあったのかな？

「すみませんごめんなさいすみませんごめんなさいすみませんごめんなさい」

「あのどうしたんですか？」

「そのですね、あのですね。そう!! 超能力って好きですか?!

「え?」

なんだろう、凄い勢いで立ち上がってくるけど、何があったの？

「超能力です!。そう誰にも真似できない超能力です!。きちんとチュートリアル・

モードは切っておりますから!。脳内に誰がいるってことないですよ!」

え、何、この焦った感じは何があったの。

「凄い能力なんですよ!。もう誰もがうらやむほどの能力ですから!」

「あ、そうなんですか」

「はい!。欲しいですよね?!

「え、もうたくさんもらっているの」

「欲しいですよ?!。ね?!」

「え、あの、その。ええ〜?」

「欲しいって言うてくくださいよお（泣）」

え、泣いているの、綺麗なお姉さんが泣いていると、ちよつと悩むな。

『おい、あれってあれか？』

『それ以外にあるか』

『困った女神じゃのう』

え、何が？ う〜くん、何か嫌な予感？ ってのがするけど、仕方ないか。泣いてい

る女の人は助けてあげなさいって言われたことがあるし。

「解りました。欲しいです!!」

「ありがとうございます！ おまけもつけてきますね！」

おまけって何？

『おい、あの女神、超能力って言うてなかったか？』

『今の我であるならば他世界、あるいは空想の世界の知識もあるが、これは超能力に分類

してもよいものか』

『学園都市ではないのか？』

『学園都市ってあれだろ？ 『とある魔術』って奴。いや、あることはあるけど、違くな

いか？』

『あの駄女神め、超能力を『凄い能力』とっていたな。まさか、これほどとは』

あれ、後ろで色々と会議？ しているけど、僕には関係ないよね。

新しい能力かあ、どんな形で出るんだろ。楽しいような、悲しいような？

翌朝、目が覚めて扉を開けようとしたら、扉が吹き飛びました。

あれ？

「マスター？ これをつけますよね？」

ラキシスさんに言われて、右腕と左腕にブレスレットをしたら、何とかまりました。

「ねえ、あれって宝具みたいなもの？」

「抑制の原点だそうです。所持者の能力の十割以上を封印するらしいですけど」

「封印してあれ？」

「はい」

あ、後ろで深いため息が聞こえた。

「僕の将来の夢は『世界のすべてを支配下において、誰も逆らえないような帝国を作つて、天に届く城を作つて、その上で高笑いする帝王』です！」

「佐藤君、後で職員室でお話しましょう。きっと貴方は疲れているのよ」
先生に心配されました。

あれ？

ピコン!!

第一級女神の権限により、以下の能力が『佐藤・浩介』に付与されました。

『太宰・治』、『櫻田・茜』、『アクセラレータ』、『サイタマ』、『超人ロック』。

佐藤・浩介に付与された能力が個人のランクを超えているため、能力の統合を自動で行います。

今後、能力の付与時には自動にて能力の改編を行います。

そのため、能力の改編時に不足と考える能力については、『能力フォルダ』から自動的に抜き取り、付与することを許可しますか？

第一級女神より許可を得ました。以後、『佐藤・浩介』の能力の付与時における負担、あるいは個人の精神的な浸食は不可とし、能力は彼個人の意思を優先し統合するものとします。

「女神様ああああ!!!」

「ごめんなさい!!!」

「あの女神も最初の頃は優秀じゃったのになあ」

地上最強と史上最強って意味が違うらしいです。あれ、リーナさん、頭を抱えてどうしたの？

皆さん、こんにちは、佐藤・浩介です！

『いやそれはそうじゃないだろ』

『貴様、我に意見するとは。この能力はこちらに形にするのが最適だ』

『ふむ、そうなるはこちらはどうする？』

『待った待った、浩介に扱えるわけないだろ？ なら、こつちを削ってだな』

『たわけ、それでは齟齬が出る。ここはだな』

ギルさんとこじようさんとおじいさんが、僕の能力について頑張って組み立てています。女神様が色々と手を回してくれて、自動で統合されるらしいのですが。

『あ、太宰・治って異能を打ち消す能力だった。あれ、統合されて私の力も消している？ ええ?! 抑止力も無力化されてるの?!』とか泣きながら叫んで、土下座していきま

した。

もう速かったですよ。頭が地面にぶつかって、穴が開いていますから。

これって僕の精神世界？ つてもものらしいけど、いいのかな。穴が開いているけど、起きた時に何かあったりしないかな。

『こんなもんか？』

『今のところ不備はない。これならば私の宝具をつければ、一般人と同列になれるであろうな』

『フム、英雄王の一般人は何時の時代のものであろうな？』

『神話の時代の一般人って、俺達の世界じゃ超人って言わないか？』

『仕方なかろう。こやつの中にある力は、一つの世界でも『超級の英霊』に匹敵するものばかり。ここまで抑え込んで統合させた我らの手腕、見事と褒めるべきではないか？』

『致し方ないな。しかし、流刃若火の威力があがつとるのは？』

『げ?! 眷獣もレベルアップしてるぞ』

『私の宝具はそのままか。いや待て、なんだその射出速度は？ 亜光速を超えてやると

は誰を目指している』

なんだか賑やかです。

賑やかなんですけど、僕にはきつと関係ないと思います。目が覚めたら、学校の用意

をしないと。きつとまたラキシスさんが、『今日こそ送っていきます』って待ち構えているかも。

きつと違うよね、ラキシスさんとリーナさんと、深雪さんにイオナさんが、怖い顔で待っていることもあるけど、今日はないといいな。

ヴィマーナがあるからいいって断つても、ロボットとか飛行機とかで送っていかうとするんだから。

でも、あの胸のライオンの顔がついたロボットはかっこよかったなあ。

『なあ、あれってジエネシツクガオ・・・』

『言うな真祖よ！ 我はもう休むぞ！』

『あちらで建造中のは、神にも悪魔にもなれる皇帝機ではなからうか？』

『黙れ黙れ！ 我はもう休むと言ったはずだ！ 雑種！ さっさと目覚めぬか?!』

あれ、ギルさんが必死だ。必死でいいんだよね。もう頑張つて叫んでいるから、必死だよ。

「は～～い、また夜にね」

元気に手を振ると、なんでか三人が疲れた顔をしていた。
どうしたのかな？

「今日のごはんは豆腐とワカメのみそ汁に、鮭の塩焼き、梅干しとご飯です」
「わーい！」

うん、ご飯だ、ご飯。やっぱり朝はこうだよね。ウインナーとか卵焼きもいいけど、鮭って大好きなんだ。

友達に渋いって言われたけど、何でだろう。

パンより御飯が僕の大好物です。

「ねえ、ラキシス、ちよつといいかしら？」

「ダメです、リーナ。言いたいことは解りますから」

「解っていますか？」

うんうん、ご飯がおいしい、鮭も美味しい。やっぱり僕は日本人なんだって思うよ。

「さあ、食堂よね？」

「だから、言わないでください。はい、そうですよ」
「畳が敷いてあるんだけど、食堂よね？」

梅干し、スッパ！ でも、ご飯が進むよね。うん、おいしい。

「あの天井、見事なシャンデリアですね」

「深雪まで乗らないで」

おみそしる美味しい。やつぱり、豆腐とワカメが最強だよ。もう地上最強だね。習ったばかりだけど、使いたい言葉だよな、最強つて。地上最強なら、誰も勝てないからね。
「あっちの壁とかステンドグラスじゃないの？」

「いえ、あの、元々『フロート・テンプル』の朱塔玉座は、日本じゃなく西洋風の城ですから。まあ、中身は日本的なものもありますけど」

「そうではなく。ラキシス、目をそらさないで」

うん、ご飯、おいしい、鮭も美味しい。ごはん、もう一杯、食べたいな。

「あ、マスター、お代りですか？ ご飯、まだありますよ」

「え、なにそれ？ 電子ジャーじゃないの？」

「おひつつて正気を疑う」

「イオナまで突っ込みしないで！ はい、マスター、たくさん食べてくださいね」

「は〜い」

「……もうダメ、ラキシス！　なんでこんな西洋風の食堂の床に畳を敷いてちゃぶ台出して、全員が正坐してのごはんなのか説明して!？」

「明らかに場違いではないでしょうか？」

「場違いじゃなくミスマツチ」

「だってだってしようがないじゃないですか！　マスターが『落ち着かない』って言うんですよ！　何処かの個室を改造してもいいですけど、それじゃ出来たてが出せないじゃないですか!？」

「だからって畳を敷きますか?!　ラキシス、貴方の頭の中はどうなっているのか不安よ!？」

「畳よりもちゃぶ台に文句いいなさいよ、深雪！　なんでテーブルじゃないの?!？」

「リーナの指摘は明らかに違う。この場合、畳を敷いてテーブルとイスを用意しなかったことを指摘するべき」

「皆さんは好き勝手に言えていいですね?!　あつちに見えるコックたちを前にして、そんなこと言えますか?!？」

「コックついていたんだ。僕がそつちに顔を向けると、何故か見たことある顔がチラホラと。」

「誰あれ?」

「私の姉のアトロポスとクロソーです。後、エストさんと、アレクトーさんです」

「あ、コンゴウ、ヤマトにムサシもいる」

「コックなんですか？」

深雪さんの質問に、ラキシスさんとイオナさんは視線を反らしました。人の話はきちんと目を見てほしいといけないうて、学校の先生は言っていたんだけど、何か答えづらいことでもあったのかな。

「コックです。包丁で重装甲歩兵を刺身にできる、凄腕のコックさんです」

「包丁を持たせたら船体もすっぱり切れる。とても優秀なコック」

ラキシスさんとイオナさんがなんだか悲しそうな顔をしている。あれ、コックさんから何か思念のようなものが飛んでいるけど。

あれ、これが見えるって僕の新しい能力に関係しているのかな。

「ごちそうさまでした！」

「はい。マスター、今日は」

「ヴィマーナで学校に行つてきます！」

「マスター!!」

後ろでラキシスさんが嘆いているけど、僕は普通に学校に行くんだ！ ロボットで行くなんて考えない！ 普通の小学生は、ロボットじゃ学校に行かないんだよ、ラキシ

スさん。

「あの！ ジェネシック・ガオガイガー使っていいですから！」

僕は思わず振り返った。

「え、いいの？」

「はい」

「いいの?!」

「もちろんです」

「やったあああ!!」

あの凄いかっこいいロボット使っていいなんて。ラキシスさんも優しいなあ、よつしあれに乗って学校に行こう。かっこよく校庭に降りて、友達に自慢してやろうっと。

「え、ラキシス正気?」

「冗談ですよね?」

「まさか、本気?」

「あ、え、その」

え、ダメなの、じゃヴィマーナで。

「マスター！ レッド・ミラージユもかっこいいですよね?!」

「うん、カッコイイよ。でも、僕はもつと強そうなロボットが好きです」

「はいこちらをどうぞ！」

ラキシスさんが見せてくれたビデオの中で、レッド・ミラージユが山を砕いていました。

拳で。

「……………かつこいい!!」

「はい、かつこいいですよ！」

「貴方、今度はレッド・ミラージユに何を改造したのよ？」

「フェイズ・シフト装甲を、少しだけ。手だけをそっくりそのまま」

「はい、マスター、こちらもどうぞ」

深雪さんが見せてくれた映像で、ジエネシックが星を砕いていました。

「え、怖い」

「え、そうですか」

なんだろ、深雪さんが落ち込んでいるなあ。あ、遅刻しそう。

「じや行つてきます」

「待つてください！ 待つてくださいマスター！ バルキリーありますよ！」

「艦艇で行くべき、マスター、乗って」

「二人とも落ち着きなさいって！ 深雪、いいから復活して！」

わお、なんか色々と混乱してきた。

でも遅刻しそうだから、僕は颯爽とヴィマーナに飛び乗ったのでした。

あれ、今、部屋の中にいたような。あ、これがテレポートか。うんうん、便利な能力だなあ。

「こーすけ君?! 何処から降ってきたの?!」

「あ、なのはちゃん、やつほー」

「コースケ!! あんたちよつとこつち来なさい!」

「そっだよこーすけ君、あの時のことを説明してよ」

「ありさちゃん、すずかちゃん、世の中にはじんちのおよばないことがあるんだそうですよ」

「はあ?! 馬鹿にしてんじやないわよ!」

「こーすけ君、いいからお話しようよ」

「こーすけ君! なのはが先なの!」

うん、今日も僕のクラスは騒がしい。一番の親友の武藤・健は、小さく手を振って笑顔を向けているよ。

助けてよ、親友。

「いやだよ親友」

ケチ。

高町・なのはにとって、佐藤・浩介は一番の親友、それ以上に恩人。

小さい頃、父親が死にそうで、家族全員がバラバラになりかけて、それで一人で泣いていた時に、目の前に走り込んできたのが浩介だった。

『なのはちゃん！ みっけ！』

素晴らしい笑顔で、汗だくになつて言つた彼に、彼女は泣きだしてそのまま飛びついた。それから、浩介は何処にいても、迷子になつても、必ずなのはを見つけてくれる、そんな安心感を与えてくれるようになった。

アリサ・バニングスと月村・すすかにとって、佐藤・浩介は高町・なのは経由で知り合つた、友達。

そんなに親しい間柄でもないが、なのはと一緒にいることが多いので、よく話をする。何処にいても、絶対に見つけてくれる。なのはが全幅の信頼を寄せる彼は、頼りになるというイメージではなく、落ち着きないガキといったイメージが良く似合う子だ。

勢いがいい、ジツとしていられない。そういったものではなく、何処となく『飛んで行つてしまいそうな』雰囲気を持っていた。

あの事件までは。

一緒に捕まつたはずなのに、気がつけばアリサとすずかは助かつていた。家族に保護されて、誘拐犯の姿は何処にもない。

囚われていた建物もなく、彼の姿もなかった。

自分達の助けてくれたのは、家族ではないことは話の内容から解つた。

では彼が。まさかと思ひながらも、彼のいつもと変わらない姿に絶対に違ふと思つてしまう。でも、と同時に感じてしまう。

佐藤・浩介なら、ひよつとして何故か信じられる、そういう気持ちにさせるのも彼だから。

「ただいま〜」

「だからゲッターです！ 真・ゲッターを作りましょう！」

「何のためにそっち?! マジン・カイザーのほうがいいじゃない！」

「いいえ間違っています！ ここはグランゾンを！ ネオ・グランゾンの建造こそ急務でしょう?!」

「マクロス。マクロス・フロンティアを建造するしかない」

「なんだろ、四人が難しい顔で言いあいしている。きっと会議中だね、それじゃ僕は宿題を終わらせて。」

あれ、携帯電話に着信だ。

「もしもし、あれ恭也兄ちゃん？」

『浩介、ちよつと話があるんだが、時間を貰えるか？』

「いいよ、今から？」

『ああ、すずかちゃんとアリスちゃんと誘拐された件と、なのはが話している件について

74 地上最強と史上最強って意味が違うらしいです。あれ、リーナさん、頭を抱えてどの？

だ
』

あれえくひよつとして恭也兄ちゃん、怒ってない？

説明するしかなかつたんだよ、深雪さん

高町・恭也にとって、佐藤・浩介は恩人だ。

父親が負傷して家族がバラバラになりかけた時、家族を守るべき長男だった自分は、家族のことなんて考えずに鍛錬に打ち込んでしまった。

母のことも、妹のことも、なのはのことも放っておいて。

強くなりたかつた、誰にも負けたくなかつた。父のように、家族を護れるようになりたかつたのに、それが返って家族をバラバラにしかけるなんて、滑稽な話だと笑うしかない。

あの時、帰りの遅くなつたなのはを待つていた時、手を引いて歩いてきた浩介に手を上げかけた。

そこで気づいた。なのはが泣いていること、どうして泣いているのかを、幼い妹の口から聞いた時、衝撃を受けて倒れそうになった。

自分の間違いが、こんな小さな妹を追い詰めたのかと。

失いたくなかった家族を、自分が壊すところだったのを、浩介が止めてくれたこと、感謝しても足りない恩義が彼にはある。

だからこそ、問いかけたい。最近の彼は、何処か人間『以外の気配』を纏っているから。

恭也は達人だ、それも裏の世界においては上位になるくらいに強い。一対一で拳銃にさえ負けない技量を持つ彼から見ると、浩介の気配は尋常じゃなくらいに『怖い』。

まるで巨大な肉食獣の前に置かれたような、そんな気持ちにさせる。

まさか、そんなことはない。そう思い込もうとした矢先に、なのはが妙なことを口にした。

『コーすけ君、御船に乗っていたよ』、『お空から飛んできたの』。末の妹は随分とメルヘンになったな、とちよつとだけ微笑ましく思っていたのだが。

アリサ・バニングスと月村・すずかの誘拐、そこに巻き込まれた浩介が何かしたという話。

間違いない、彼は『何かあった』。

よし、呼び出して揉んでやろう。ついでになのはを悲しませたこと、ちよつとお説教だ。

そんな思いで彼を呼び出した恭也は、道場で静かに待っていた。

恭也兄ちゃんに呼ばれて、やってきました高町家。なんか、士郎さんと桃子さん、今日はお店がお休みらしいです。

「こーすけ君、お話し」

「こーすけ、話をしなさい」

「こーすけ君、話して」

なんでありさちやんとすずかちやんもいるかな。なのはちやんだけなら、どうにかできかな、なんて思っていたのに、これだけと逃げられない。

あ、忍さんもいる。ノエルさんまでいる。

逃げられないかな、逃げたいな。どう説明しても、『病院、行こうね』ってことになりそうだから。

ク、これが苦渋の決断か?! ついに僕も立派な大人になったんだ?!

「こーすけ君が変なこと考えているの」

「ああいうところは変わらないわね」

「うーくん、でもこの心配って、あれ?」

後ろで女の子三人が何か相談しているけど、僕は気にしない。気にしたら負けだってお父さんも言っていたし。

女性の内緒話に入りこむと、男として大切なものを失うって言っていたし。

「僕は今日! 恭也兄ちゃんに呼ばれてきました!」

「はい、恭也は道場だから頑張ってるね」

え? あれ、なんでか桃子さんから死刑宣告を受けました。死刑宣告だよね、完全に死亡フラグじゃないの。恭也さんが待つ道場に行け、なんてもう死ぬ未来しか浮かばない。

ク、昔なら『わーい、道場で遊べるんだ』って考えられたのに、これも三人が頭の中にいるからだ。

『ふむ、道場か。どれ、儂が』とかおじいちゃんが言っているけど、僕の体を使って何

をする気かな。止めてよね、そんなことして恭也兄ちゃんを怒らせたなら、僕はもう翠屋のシュークリームが食べられないじゃないか。

『そこは、なのはって子のこととか考えろよ』、なんてこじょうさんが言っているけど、僕は気づいた。こじょうさんってきつと、ヘタレだ。絶対に女の子の好意に気づかない、鈍感キングだ。

『誰が鈍感だ、誰が』なんて反論しているけど、聞いてあげない。僕は違うよ、きちんと人の好意には気づくもの。

その僕の感が言っている！ なのはちゃんとありさちやんとすずかちゃんは、きつと僕のこと友達として嫌っているって！

「……女の感が言っているの！ こーすけ君！ 大好きだよ！」

「なのはちゃんの嘘つき！ そんなこと言っても騙される男じゃないのだ！」

「あくくあいつってなんでこんなストレートな告白を受けて、そう返せるのかしら？」

「なのはちゃん、挨拶くらいな感覚で毎日のように言っているからじゃないの？」

「うう、今日も連敗なの。もう三千回は超えたの。でもいいの、二十歳までに落とせばいいの」

「めげないわね。本当にあいつの何処がいいのか」

「え、私も好きだよ」

「まさかのライバル出現なの?! でも、すずかちゃんの前からこーすけ君が好きなの知っているから警戒しているの」

「すずか、それって友達としてよね?」

「んんんんどうだろうね」

ク、後ろで僕をからかっている女の子が三人もいる。

女性は魔性だつて図書館の本に書いてあつた。でも、それだとラキシスさん達も魔性の女なのかな。

綺麗だけど、可愛いところもあるけど、魔性なのかな。魔性つてそもそもどんな意味だろ。後で事典で調べようつと。

『なんだか、マスターが私たちに對して誤解しています!』

『ラキシス、ちよつとレッド・ミラージュ貸しなさい!』

『いいえここはジェネシックを出して行きましょう』

『マクロス、もう少いで建造完了』

ム、なんだか電波が飛んでいる。これも転生特典が影響しているのかな。

まあ、言いや。

よし道場についたぞ、さあ、いざ。

気合を入れて扉を開けた僕は、すぐさま閉めました。

なんで恭也兄ちゃん、真剣を持っているかな？

逃げられなかったよ（泣）。

「浩介、久し振りだな」

「はい恭也兄ちゃん！　ところで」

「おまえ、本当に浩介か？」

ええ、く〜なんでそこで疑われているの、僕が何したの、ああ転生特典が何かやらかしたな。まったくもう、女神様はどうしてこう厄介なことばかり、持つてくるかな。

「もちろん！　何処からどう見ても佐藤・浩介ですよ！」

「そうか、ならこれはどうだ？」

あ、恭也兄ちゃんの刀が上からくる。あれえ、僕って何か間違えたかな。そんな変な

ことは言っていないのに、どうして攻撃してくるかな。

あれ、でも遅い。今まで恭也兄ちゃんの攻撃って、動いた終わってたって感じだったのに。手加減してくれるのか、さすが優しい。

顔は怖い顔しているけど。

「遊びなら真剣は危ないと思います！」

「避けたか、ますます浩介か疑わしいな」

「ええ？　だって恭也兄ちゃん、かなり遅くしてくれたじゃないの」

「ほう？」

鋭く、恭也兄ちゃんの瞳が見てくる。あれ、違うの、まさか、そんなことないよね。

「かなり速かったの」

「なのはちゃんありがと！　でも今は知りたくなかったです！」

「貴様、やはり浩介の名を語る妖怪の類か？　それとも浩介に憑依しているのか？」

「本人ですよ！　本当に本人！」

うわ、危ない！　そうやって真剣を振り回さないで！　回避、避けて、あれ避けられる。恭也兄ちゃん、やっぱり手加減してくれてる。

わけじゃないみたいです、顔が怖いですが、避けるたびに表情が鋭くなっています。うん、これって殺気じゃないかな。

「なるほど、かなり高位の妖怪だな」

「違うって！ 本当に本人だから！」

「ぬかせ！」

もう本当に！

「恭也兄ちゃん！ 本気で怒るよ！」

刀には刀だ！ もうやってやる！

「流刃若火!!」

思わず握った刀を引き抜いて、恭也兄ちゃんの小太刀を弾く。二つあるからもう一つは、どうにかなるだろうって左手を突き出す。

パキンって音がして、小太刀が転がりました。根元から折れて。

「.....」

あれえ、僕の体ってこんなに頑丈になったの。あれ、刃物が危ないものじゃないって、どういことだろう。

「浩介じゃないな、おまえ」

「本人だから！ なんで信じてくれないかな?！」

「浩介本人だったら、その刀と拳はなんだ?！」

「だから！ もう解った説明する！ します!!」

もうヤケクソです、こうなったら全部、最初から説明してやる。

「その前に、こーすけ君」

「なのはちゃん何?!」

「その刀、燃えてるの」

「うわああああ?! 止まる止まるの流刃若火!」

慌てて僕は、刀を振って炎を散らしました。あれ、これで散るって便利な刀だね。

『焦らせるでない、小童』。おじいちゃん、ありがとう。

恭也兄ちゃんと忍さん、それに土郎さんと桃子さんも交えて、それに何故かアリサちゃんとすずかちゃんまでいて、なのはちゃんにまで説明することになりました。

でも、信じてくれないので。仕方ないからと、フロート・テンプルまで連れて行くこ

とにしました。

「……………浩介、疑って悪かった」

恭也兄ちゃん、土下座です。

「なるほど、なるほど、転生特典つてものか。いや、浩介君は昔から何処か違っていただけ、こんなものが貰えるなんてね」

士郎さん、それってどういう意味？

説明、人数が多いので朱塔玉座の大広間、借りました。

「いえ、マスターのものですから、そろそろ本当に自覚してください。マスターのものですから」

なんか、ラキシスさんが泣きそうです。でも関係ないね。

なのはちやん達の鋭い目線が痛いから、気にしたくないだけかもしれないけど。

「浮気者」

う、なのはちやんの何時もの悪戯が突き刺さる。なんでありさちやんとすずかちゃんにまで言われなれないといけないかな。

「え、真祖？」

「そう真祖の能力と眷獣もマスターが貰った特典にあるから」

「真祖って吸血鬼の真祖？」

あれ、忍さんが凄く蒼白な顔しているけど、リーナさんはどんな説明をしたんだろう。

「王様の蔵?」

「この世のすべての財宝を集めた王の蔵のことよ」

「へへへ王様ってあいつが?!」

ありさちゃん、なんで驚いた顔しているのさ。深雪さん、どんな説明をしたのかな。

「こーすけ君が王様、ということはないのは将来はお妃さまなの」

「ちよつと待ちなさい、なのは。こいつがそんな王様なんて」

「真祖って私達の上の存在なんだよね」

なんか、三人がヒソヒソ話をしているけど。

「あ、ちなみに太陽系で言えば、『太陽系』を支配しているようなものです」

「ええええ?!」

「ラキシスさん、それって初めて聞いたただけ?」

「あの後、調査したらデルタ・ベルンだけではなく『ジョーカー太陽星団』もすべてありました」

え、なにそれ、どういう規模なのか教えてほしい。

あれえ、これってなんだろ、『ごめんなさい』って書いてある。

「あの駄女神、またやりましたね」

「どうしてこう、終わった後に追加してくるかな」

「どうしようもないですね」

「落胆、溜息ばかり」

ええ〜〜また増えたの、何が増えたの、特典つてもうお腹がいっぱいですよ。僕は普通に小学生したいのに。

「浩介君、ちよつとお願いがあるんだけど、いいかしら？」

忍さん、何かあつたのかな？

「どうか、貴方様のお力により月村家にご加護を。真祖様」

「………え、誰のこと？」

「貴方様のことです」

なんか深々とお辞儀している忍さんに、僕は思わず周りを見たんだけど、誰もが頷いていた。

え、僕のこと、え、僕って真祖だったの。

『だから、第四真祖だつて言つただろうが』つてこじようさんは、もつときちんと説明するべきだと思えます。

「そのお話、待つたといいます」

え、ラキシスさん、僕はまだ話の内容が解つてないんですけど。

「マスターのご加護を受けたいという話、解らなくもないです。先日誘拐を考えれば、月村の家は微妙な位置にある、ということですね？」

「その通りです。決して一枚岩といえる状況ではないので」

「なるほど。その加護を得ることで敵対者をけん制したいと？」

「はい、お願いします」

「なるほど。では、そのために『マスターが危険な場所に行くことになる』と？」

え、本当、そうなの。

「そうならないように」

「そうなるからって話でしょ？」

リーナさん、ちょっと顔が怖いよ。え、危険な場所って何処なんだろ。刃物をパキンできる今の僕が、危険になる場所ってどんなどころだろ。

「いいえ、決してそのような」

「なるからこそ、話をされている、と見えますよ？」

ニッコリ笑顔の深雪さんが、とても怖い気がします。あれが美女の冷笑って奴ですね、僕はまた一つ大人になりました。

なりたくないような、なって良かったような。

「ダメですか？」

「こーすけ君」

う、忍さんとすずかちゃんの涙目、そんなの向けられて断れる男なんて、男じゃないって僕の中の何かが叫んでいる。

気がする！

「が、頑張る！」

「ありがとう！」

「ありがとう、こーすけ君！」

うう、流された気がするけど、これでいいかな。忍さん嬉しそうだし、恭也兄ちゃんも嬉しそうだし。

すずかちゃんが笑顔だから、これでいいや。

「解りました。では、私達もマスターの意思に従って、月村家を護ります」

「ラキシスさん、お願いね。さっすがラキシスさん、頼りになる、ありがとう」
褒めておいてお礼をいうのも、立派な大人ですので。

あれ、ラキシスさんが固まった。

「マスター！ すべてこのラキシスにお任せを！ ではでは増産しますね！ いいえ、

魔獣とか捕まえてきますから！」

「うわあ〜ラキシスが暴走した」

「いい笑顔ですね、羨ましい」

「艦隊の出港準備に入る」

あれ、なんだか騒がしくなったな。まあ、言いや。

「というわけで、こんな色々についてきた僕ですが、これからもよろしく！」

一応、なのはちゃん達に頭を下げておきました。

「うん、こーすけ君、もつとよく考えた方がいいの」

「はあ、こーすけが楽天的でよかったのか悪かったのかって話ね」

「いいんじゃないかな、こーすけ君はこーすけ君だし」

うん、なんだか褒められたような、馬鹿にされたような。

まあいいや。

その日の夜、女神様が夢の中にいました。

「魔獣は勘弁してください。魔獣だけは駄目なんです。魔物でいいじゃないですか、魔物使い、いいですよね？」

「僕が望んだわけじゃない気がします」

「ここは素直に言っておこう。もう僕はお腹一杯だから。」

「ああ、良かった。あ」

「え？」

「なんだか、女神様が固まった。あれ、何かあったのかな。」

「どうも今回も、私の不始末で申し訳ありません」

綺麗な土下座を女神様がしたところで、僕は夢から覚めました。

「マスター！ 魔獣、魔獣が見つかりました！ 探してみるものですね！」

「ちよつとラキシス！ あれ何処から見つけてきたの?!」

「魔獣ってレベルの話じゃないでしょう?!」

「大物、巨大生物、大量」

翌朝の食事前、僕は世界の広さをかみしめました。

うん、ゴジラとかキングギドラとか、ガメラとか、ゼットンとか。そんなの何処から見つけてきたの、ラキシスさん。

ピコン！

第一級女神の権限により、佐藤・浩介の支配地域が拡大されました。

デルタ・ベルンから、ジョーカー太陽星団へと変更されました。

また追加特典の申請を受理、ジョーカー太陽星団内部に『怪獣の惑星』を追加、既存フォルダより怪獣軍団を創造しました。

「女神様、これってティアマトまでいきますよ。ウロボロスって怪獣に入るんですか？」

「もう、私は女神の資格を返上してしまおうかしら？」

「他の仕事は優秀なのに、どうして佐藤・浩介関連はポンコツになるんじやろう？」

転生者いるってイオナさん、どうしますか？

その日も女神様は佐藤・浩介を見ていた。

「怪獣、魔獣、うわあ〜もうごめんなさい」

「女神様、なんか天使が許可をもらいたいつて言ってますよ？」

「え？ 何の許可？」

「俺も転生作業したいつて」

「ダメに決まっているでしょう？ 神の権限がないと難しいし、転生特典も与えられないんだから。『イデオン』？ 何これ？ えっと、検索と」

「おい止めろおまえ！」

「え?!」

「女神様！ あいつやりやがった！」

「ええ〜〜?!」

ポチ！

「……………」

「……女神様？」

「待つて！ 本当に待つて！ イデオンってかなり不味い奴じゃないの?! 本当に待つて！ なんて付随して『L様』がいくの?!」

「誰か、創造神様を呼んできて。さすがに『神様クラス』の特典は駄目だ」

「は〜い」

「お願い止まって！ 本当にダメだから!!」

「それでも、年間の業績はトップで、誰からも信頼が厚い第一級女神様なんだけどなあ」

「こんにちは！ 佐藤・浩介です！」

今日はロボットの格納庫に來ています、珍しいロボットが多いつて話を聞いたので、見て回っています。

珍しい、何処がどう珍しいのかはわからないので、ラキシスさんの説明に頷いておきます。

「あれが、ガンダム系統の機体が格納されている場所です。今のところ、防御を優先していますので、フェイズ・シフトかラミネート・アーマー系が多いですね」

「ふえ〜〜」

「それで、あつちは小型の方ですね。小型といつても五メートルから八メートルくらいです。ASとかエステバリスがあります。AT系は未配備ですが」

うん、ラキシスさんは嬉しそうに説明しているけど、僕には解らない。なんでサイズが違うのかとか、どうして同じ大きさにしないのって聞きたいけど。

「リアル系はこのあたりですね。後はスーパー系があちら、に？」

あれ、ラキシスさんが固まった。

なんだろ、あの赤い大きなロボットを見て固まっているけど、どうしたのかな。見慣れない形、でもないような。

「え、あれ」

「どうしたの？」

「……さあ、ラキシス、ここで問題です、あれはなんででしょう？」

なんで自分で自分の名前を言ったのか、僕には解りません。きっと大人になると、自

分の名前を言いたくなることがあるのだろう、と察してあげます。

僕ではできる男ですから、キラッとかわ付けないといけないかな？

「ラキシスく、怪獣たちの確認できたわよ。本当にあの駄女神は、次から次に問題を」「リーナさん?! 製造ラインを使いましたか?!」

「え、待つて、それつてあんた以外はロックかかつて使えなくしたじゃない。艦艇はイオナ、ロボット系はラキシスでしょ？ 生身の装備品は私と深雪つて分担したじゃない。どうしたの?」

「あれ、何に見えますか?」

そういつて、ラキシスさんが指さしたものを見たリーナさんが、同じように固まりました。

うん、ここつて何かの『ばわく』が出ているのかな?

それとも、停止結界つてのが作動しているとか。僕の能力にないよね、くうかんとうけつ? つてのはできるつて聞いたことあるけど、ギルさんもこじようさんもおじいちゃんも教えてくれないし。

『知る必要ないぞ雑種』、『これ以上、俺達の心労を増やすな』、『やんちゃな小童だのう』とか三人が溜息をついています。

いつか必ず教えてもらおうつと。

「え、あんた、まさか、そこまで？」

「違いますから！」

「マジなの？ え、本気で世界征服を狙っているとか？」

「本当に私じゃないんです、信じてください」

「いやいやいや、あんたの普段の言動を思い出してみなさいよ。私はあれを作ったって
言っても、信じられるわよ？」

「私じゃないんです。第一、無限力『イデ』なんて、どういう原理なのか」

「あゝチート知識と技術で出来るとか？」

「私をなんだと思っているんですか？ チート的な技術システムはありますが、私は
ごく普通のフェアティマです」

「へえ々々次元回廊できる？」

「はい」

「MS一機分の装備変更、何分で出来る？」

「私一人でも三十秒あれば楽勝です！」

「ほら、チート」

「言い返せない」

あ、ラキシスさんが崩れ落ちた。なんだろう、この両手について、膝をついた姿を、ア

ルファベッドで表せるって聞いたことあるけど、僕には解らないんだよね。

「とにかく、あるなら仕方ない。動かさなきゃいいのよ」

「そう、ですよ。じゃあ、気を取り直して。あっちにあるのがデス・ザウラーにバスター・ランチャーとミノフスキードライブを搭載した」

「待った！ 何してんのよ?!」

「え、魔改造です」

ラキシスさん、とてもいい笑顔だね。親指を突き出すって、どういう意味なんだろ。やってやったぜ、って意味だったかな？

「本当にあんたはあ?!」

「え、だって、荷電粒子砲にバスター・ランチャーの攻撃で、小島なら二秒で消します。ミノフスキードライブは機体サイズに準じているので、最高速度は光速に達しますから。地球上のどこにも二分で行けますよ、マスターの敵は五分以内に殲滅です」

「……いいわね、それ」

あれ、なんだか二人してガツシリと手を握ったけど。

なんだろう、僕は今、何か重大なことを聞き逃したような、聞いてない方がいいような。「イオナのマクロス・フロンティアも建造完了したそうよ。同型艦サイズで次々に建造して、上空から降下させて制圧でできるじゃない」

「はい、魔獣も詰め込めば、もう確実に制圧できます。ゾイド部隊もバルキリー部隊も展開させれば、どんな勢力も一瞬で消せますよ」

「いいわね」

危ない話をされている気がします。止めないと地球が危ないって気がします。

うん、でもどう止めても手遅れって気がしてきた。

あれ、となると僕ってラスボスって奴になるのかな？

ヒーローに憧れたことはあっても、ラスボスに憧れたことはないのに、いきなりラスボスになったのかな。

将来の夢、帝王って書いたことだし、ラスボスでもいいのかな。

まあ、いつか！

『こ、こやつ開き直りおったぞ』、『まあ、第四真祖ってラスボスだからな』、『ふむ、儂が現役だったならば、真っ先に抹殺しておっただろうなあ』、なんか三人から呆れられた気がします、気にしたら負けだから。

負けたくないので忘れることにしようっと！

よく晴れた日だった。

昼休みに友達とサッカーをしていた武藤・健は、大きく上がったボールを見て、思わず飛び上がったのオーバーヘッドをしてしまった。

ボールは見事にゴールに突き刺さり、やったと内心で喜んだ彼は後頭部から地面に激突、そのまま保健室へ直行。

「健！ 傷は浅いぞ！」

「もうダメだ、浩介、俺に構わずにボールを追うんだ」

「何を言っているんだ健！ おまえがやるんだ！」

「後は、頼むぞ、ガク」

「健!!」

「じゃ保健室に行ってくるぜ」

「いつてらっしゃい！」

運ばれる前に漫才する浩介と健を見たクラスメートは思う、あいつらってなんであんな

なにバカ騒ぎしているんだろう、と。

保健室に行った健は念のために、病院で見てもらうことになって、病院に行つて検査を受けて、異常がないけど今日は早退することになって、自宅に帰り何事もないまま一日が終わり。

翌朝になつて気づいた。

『あ、俺つて転生者だ』と。

前世の記憶はある、今までの記憶もある。精神が塗りつぶされた、なんてことがあるわけもなく、今までの記憶に前世分の記憶が重なっただけで、特に違和感なく生活を送れることに感謝したという。

ここが『りりかるなのは』のアニメの世界だつてことは、すぐに気付いた。クラスメイトに主人公がいて、まだまだ魔法を使っている気配がないことから原作開始前だと知る。

自分の転生特典は三つ。

一つは、『看破』。相手のステータスが見える、特に妨害されたり隠されていても見えるようになるらしい。

二つ目は、『限界突破』。鍛えれば鍛えるほど能力は上がり、その上限はないとのことだ。最初から強い能力を与えてももらうことも考えたが、突然に貰った能力では訓練が必

要だから、それなら自分で鍛えようと考えた末に貰った能力だ。

三つは、『技術を形にするスキル』。最初から完成されたデバイスを貰ってもいいが、せつかくの第二の人生、自分が好きなデバイスを組んでみたいと思つた結果だ。

よし、今日から新しい人生を送ろう。今の人生はそれなりに気に入っているから、このまま自由気ままに生きてやる。

そんなことを考えていた健は、元氣よく教室に入つて。

すぐに気づいてしまう。

佐藤・浩介、ステータス、測定不能。

思わず吐き出しそうになつた。何をと言われても解らないが、何かを吐きだしそうになつた。

一番の親友で最も気の合う相手が、実はラスボスでしたと思ひ知つた瞬間だつた。

『英雄王ギルガメッシュ』、『第四真祖』、『流刃若火』、最初に浮かんだスキルにおもつきり顔を背けてしまう。

なんだあいつ、どういうことだ、あんなスキルでいいのかと内心で突つ込みつつ、普段通りを装つて自分の席へと向かう。

「あ、健、大丈夫だった？」

「おう、大丈夫だあ」

しかし、ラスボスは向こうからやってくる。

『ジョーカー太陽星団所持者』、『科学技術チート』、『Gジェネ』、『霧の艦隊の所有者』、『魔法科高校の劣等生』、『リーナと深雪』、さらに追い打ちが入る。

なんだそりや、そんなチートがあつていいのか。最初のスキルだけでも厄介なのに、それは反則ではないか。いや、待ったギルガメッシュの能力というが、テンプレで蔵の中は空とかないか。

『黄金律・EX』。そりやないぜ、と健は表に出すことなく項垂れた。いや待った、ジョーカー太陽星団を持つことから、黄金律なんてなくても一つの世界を支配しているに等しい。蔵の中の財宝の数、凄いことになっているだろう。

「あれから病院、行つたつて聞いたよ？」
「大丈夫だつて、俺はほら丈夫だからさ」

平然と、何時も通りに話をしながら、健は自分のスキルを切ろうと思つた。

『怪獣たちの支配者』、『太宰・治』、『櫻田・茜』、後ろ二つは統合・変化して『能力の封印・抹消』、『重力・空間操作』へ変更。

今度は我慢できずに机に突つ伏した。

「健、まだ本調子じゃないの？」

「い、いや大丈夫、ダイジョウブ」

なんだそりや、と内心で叫んだのは悪くない。確かに、太宰の能力は異能を消したはずだが、それが変更されて能力の封印・抹消になるなんて。茜は重力操作だけだったのに、なんで空間操作も加わっているのか。

よし、もう見ないと健は決めたのだが。

『超人ロック』、『サイタマ』。

もう無理だった。なんで不死身の最強エスパーと、一撃男なんだ。どうやったら、そんな転生特典が貰えるのか。

「やっぱり今日も休めば？」

「お、おうそうさせてもらうぜ」

クールに親指を立て、ウイंकとか決めて立ち上がり、教室から出ようとして最後に、浩介を見てしまった。

『イデオン』、『ロード・オブ・ナイトメア』。

「じゃ明日なあ」

気楽に笑って廊下を歩く。歩いていき、昇降口から外へと出て、校庭を通り抜けて、校門から外に出て、必死に耐えて耐えて耐えて耐え抜いて。

やっと辿り着いた公園で、健は両手を地面についた。

「どうしろっていうんだよ?! なんだよあのチートの塊! バグだろうがあんなの?!」

神様は俺のこと嫌いなのか?! なんであんなラスボスが俺の親友なんだよ?!」
絶叫した。

どうしていいか解らずに彼は、一時間ほどそこで叫び続けたという。

翌日。悩みに悩んだ末に、健は決意した。これしかない。

「浩介、俺達、親友だよな?」

「もちろんだよ健!」

「ああ! 俺達はマブダチだよな?!」

「そうだよ!」

がつしりと手を浩介の手を握る健がいた。

秘儀、ラスボスが怖くて倒せないの、親友ポジを確保して生存を確定させるぜ、だつ

た。

「あの天使、降格処分でミジンコからやり直し」

「女神様、もう落ち込まないでくださいよ」

「そうじゃぞ、女神よ」

「うううう、でも考えようによつてはもう何を付与しても問題ないってことよね?!」

「あ、そうですね」

「見事な開き直りじゃな。あれで他の仕事ができなければ、もっと閑散とした部署に回せるんじゃないが」

「あの女神様一人で、他の女神様五十神分の仕事、やってますもんね」

天使と創造神はそこで深々と溜息をついた。

眼を貰いましたよ、リーナさん

今日もよく晴れた日です。

「こーすけ君、なのはね、考えたの」

「うんうん」

お昼時です、お弁当を持って屋上です。小学校って給食ではってラキシスさんが言っていました。何のことだろう？

「浩介、おまえの弁当って豪華だよな？」

「え、そうかな？」

健に言われてお弁当を見ると、卵焼きがずらりと並んでいました。

『どっかの軽空母？』ってイオナさんが言っていたけど、誰のことだろう。けいくうぼって何の意味かな。

「二重かあ。さすが、星団王」

「あれ、健に話したことあったっけ？」

「親友のことだから解るさ」

うわあ〜いい友達を持ったよ、僕。話さなくても解つてくれるなんて、さすが親友だね。

なんだか、汗をかいているけど、暑いのかな？

「こーすけ君！　なのはね！」

「あ、ごめんね、何？」

「朱塔玉座になのはの部屋があつてもいいと思うの！」

「え？」

あの場所にお部屋が欲しいって、なのはちゃんも凄いいこと言うな。あんなに広くて大きくて、よく解らないような場所だよ、絶対に迷うよ。最初の時だつてラキシスさんの案内で歩いていたし。

今は一人でも歩けます！

『雑種があ』とかギルさんが言っているけど、きつとてれ隠しだと思いません。だつて何時もあつちこつちと道案内してくれるから。

『大変だな、英雄王』、『苦勞しておるのう』とかこじようさんとおじいちゃんが言っていますけど、二人だつて案内してくれます。

でも、ギルさんが一番、正確だから。どうも、『目』が特別らしいです。いいなあつて思っている自分がいいます。

『止めろ、貴様、それ以上は止めておけ』、あれギルさんが凄く焦った顔で止めてくる、珍しいなあつて思っている僕の前で、なのはちやんを抑え込むようにすずかちやんが。

「こーすけ君、私も欲しいな」

「ちよつと待ちなさい！ コースケ、私もよ」

なんだか、アリサちゃんまで言ってくるし。

やっぱり女の子だから、お城に住んでみたいんだね。でも、大丈夫かな、ラキシスさんは良いって言ってくれそうだけど。リーナさんはため息かな、深雪さんは無理そうだし、イオナさんもダメって時は駄目って言いそうだから。

「ん、ダメ」

「なんでどうして?!」

理由は言っても納得してくれないかもしれないけど、どうしよう。

『では、これならどうじゃ?』、おじいちゃんがいいアイディアをくれました。

「男女七歳にして同じ屋根の下に暮らさず、です!」

「ふえ?」

「え?」

「なんですって?」

なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん、残念だけど僕には君たちを養う力はないのです。

「ダメだよ、三人とも。血のつながらない男女が同じ屋根の下で暮らすなんてそんなのダメだからね」

と、おじいさんが言っています。

僕の立派な姿に、四人は黙ってくれました、やっぱり年の功って凄いなあって思います。

「いや、お前ね」

あ、健だけ何か言いかけたけど、まあいいや。

「女神様、何をしているんですか？」

「ハッキング」

「ちよつと誰か創造神様を呼んできて！　なんか女神様が壊れたから！」

「貴方、管理者でしょうが！　なに管理者が自分のシステムにハッキング仕掛けてんですか?！」

「離して！　もうどうにかして浩介君の特典を削らないと!!　もう不憫で不憫で仕方ないのー!」

「だからつてやっていいことと悪いことあるでしょうが!」

「私は地獄に落ちてもいいから!」

「貴方が落ちたらうちの仕事が激ヤバなんですよ！　自分がどれだけ大量の仕事を捌いているか解ってるんですか?！」

「離して！　お願いだから離して!」

「どうしたのじゃ?」

「あ！　創造神様！　女神様が!」

ポチ!!

「あ」

「あ……」

「……………お主、どうしてこう浩介関連だとポンコツなんじゃ?」

「『目』は駄目! 本当にダメだから! なんて『虹色』なの?!」

「それはお主の権限では無理じゃろうが。幻想……………ってお主、何をロック解除してやる?」

「待つて待つて! 関連ファイルも待つて!!」

「こ、こやつ、ポンコツでありながらその技量、わしの代わりに創造神やれそうじゃな」
「なに、驚愕しましたって顔してるんですか、いいんですか?」

「まあなんとかなるじやろ。あやつの頭の中には『英雄王』、『第四真祖』、『死神の総隊長』がおるからのう。どうにかしてもらおう」

「うわあ、丸投げだよ、こいつら。職場、変えようかな?」

「今日も神様たちは、平和でした。」

どうも、佐藤・浩介です。

『き、貴様、よりによつて何と言うことを』

ギルさんが震えています。なんだか、とても凄い特典が落ちたらしいのです。落ちたつて何でだろう。

女神さまは何時も通りに土下座しています。なんだか、何時も土下座からはいるから、女神様達の挨拶かなつて思つてしまいます。

きつと違つて信じたいけど。

『なんだか、今度は何があつた？』

『魔眼だ』

『はあ？ どれだよ？』

まがんで何のことだろ？ ギルさんが凄い怖い顔しているから、聞いたたら怒られそうだからやめておこう。

大丈夫、きつと何があつてもギルさんがどうにかしてくれる、そんな気がする。

『直感EXだと?! この駄女神めが！ こやつにスキルを与えおつたな?!』

『え、最初にありましたよ？』

『余計に性質が悪いではないか?!』

あ、ギルさんが何かの武器を取り出した。凄いな、あれってドリルって奴かな、ギルさんが使えるってことは僕も使えるのかな。

『待て！ 待てよ英雄王！』

『止めるな第四真祖よ！ 今ここでこやつを葬らねば！』

『浩介が見てるだろうが！』

『だからなんだ?!』

『それを使えるようになったらどうするんだよ?!』

あ、ギルさんが固まった。あれえ、なんだか『ギギギ』とか音がしているけど、どうしてそんな音して振り返るのかな。

『雑種、貴様は何も見えていない、解ったな?』

「え、でも」

『考えるではないわ!! 貴様は何も見なかった、いいな?』

うん、ギルさんがそう言うなら、見なかったって領いておこう。

『よし。では駄女神よ、貴様がやらかしたことを詳しく話せ』

「は、はい。まず、魔眼は『虹色』からズラリと」

『ズラリと、だど?』

「あ、英雄王の『目』もありまして」

『ほう……殺しておこう』

「だ、大丈夫ですよ！ きちんとオンとオフできますから！」

『そういう問題ではないわ！』

『型月って世界の最上位の魔眼の上に、英雄王の目って奴か』

「こじょうさんが呆れています、ため息でした。あれ、でもそれって僕の実力なのかな。」

「かなり不味いから、創造神様が封印してくれました」

『完全ではないな？』

「はい」

「完全ではない、封印ってなんだろ。あれ、さつきから目がかゆいけど、何か見えそうだな。見ていいのかな、見えてもいいのかなあ。」

『そこまでじゃ小童、それ以上はお主が耐えられぬ』

「あ、おじいちゃんが手で僕の眼を抑えてくれた。あれ、なんだかさつきまで何かを見ようとしていたような、そんなことないような。」

「全部は無理なので、時々はあんな感じで出てしまうようです。特に『直死の魔眼』は封印に耐性があるみたいです」

『よりによって、そいつかよ。あれだろ？ 不死だろうが、真祖だろうが殺せるって魔眼

だよな』

『たわけが、それだけではないわ。あれは死の概念そのもの、耐性がなければ雑種のが持たん』

「え、そうでもないですよ」

『なんだと?!』

『説明せよ』

『いや、わしがいるからじゃろうな。これでも死神、つまり死そのものであるからのう』
あ、おじいちゃんって死神だったんだ。死神って、何する神様なんだろ、あれ視界が戻った。おじいちゃんが手をどかしてくれたんだ、やったと思つた僕でしたが。

ギルさんとこじようさんが、すっごい驚いた顔しています。

『え、じゃあ、どういうことだよ?』

『つまり、こやつは本当にラスボスになった、というわけか』

「え、やった!」

よっし、これで作文の将来の夢に近づいた。よっし、帝王だ、帝王になって、なつて、あれなつてどうすればいいのかな。

「はい! 質問です!」

「浩介君どうぞ!」

女神様が許してくれたので、僕は気になっていたことを聞くことにしました。

「帝王って何する人ですか？」

あれ、誰からも返答がない。どうしたんだろ。

『貴様！ 解らずに書いたのか?!』

「え、とりあえず将来の夢だから、いいかなあつて」

『貴様！ いや待て！ そので目覚めるな！ まだ制御と封印が』

あ、朝だ。

朝が来ました、目が覚めました。目が覚めて、なんだか世界に線が見えます、点があります。

ちよつと何度か首を振つたら消えたけど、何かあつたんだろう、工事中だったのかな。
「マスター、大丈夫ですか？」

「あ、ラキシスさん、おはよう………つてどうしたの？」

なんだかラキシスさんとリーナさんと、深雪さんとイオナさんが、凄い武装しているけど、何かあつたのかな。

あ、でもちよつとロボットみたいで皆がかっこいい。

「それって何？」

「ISをヒントにした個人用戦闘甲冑です。それで、マスター？」

「うん、特に大丈夫だよ。また女神様が失敗したんだって」

「え？」

あ、ラキシスさん達が固まった。うん、そうだよね、こう何回も失敗していると怒りたくなるよね。でも、女神様も大変なんだから、許してあげよう。

「そ、それで、今回は何が？」

「うんとね」

えつと、ギルさん達は何を言っていたのか、あれ、何を言っていたんだろう、思い出せないような、思い出せるような。

「あ、そうだ！ 死神じゃないから死の耐性がないと、どうのこうのつて話と」

「はい、え、それって」

「あと虹色だって！　なんだか、まがんつてのが色々と手に入ったみたいなこと、話をしていたよ」

「ま、魔眼ですかあ?!」

うん、まがんです。

「待つて、ちよつと待つて、ラキシス、虹色つて『魔眼の最高』じゃなかったっけ？」

「た、確か幻想を現実化するか。私もあまり詳しくはないので」

「幻想を現実化？　具体的に調べておきましょう」

「書庫にデータ・バンクがあつた、検索しよう」

なんだか、四人で集まつて相談が始まつたけど、難しい話だからいいかな。

「あ、ギルさんの目も貰つたんだつて！」

「英雄王の目?!　え、え、それつてあれですよね？　この世すべてを見通すつて噂の」

あ、ラキシスさんが固まつた。え、そんな凄い目なの、そうなんだ。さすがギルさん

!

『止めよ、雑種、使うでない』とか止めるつてことは、これが噂で聞くとところの『押すな、押すな、どうして押さない』つて奴だね！

僕は空気が読める人間なので、やりましょう！

『本気で止めるならな雑種!!』とか、焦ったギルさんって初めて見ました。

あ、ギルさんで思い出した。あれって僕も使えるのかな？

あのドリル！

「あ、出てきた。こんな形なんだ」

出てきたドリルを引き抜いて、天井に向けてみた。

『雑種ううう!!』とかギルさんが絶叫しているけど、危ない武器なのかな。『止めろ』とかこじようさんが言うけど、顔色悪いよ、どうしたの。

あ、おじいちゃんが無言で流刃若火を握っている、顔が凄く怖いけど。

「マスター、それって『乖離剣』ですよね?」

「え、良く知っているね、ラキシスさん」

「それはそうですよ。かつて、天地を裂いて原初の地獄を作り出したって、凄く有名な剣ですから」

え、なにそれ、怖い。え、そんなに怖いものなの。回転させてみたかったんだけど、そんなに怖いものなら止めておいたほうがいいかな。

「解った、使わないよ」

仕方ないかと僕が思っていると、誰もが安心したような顔した。うん、僕だって何でも使いたい年頃じゃないから。

「では、朝ごはんを」

「あ、回転した」

「マスター?!」

『何をしている雑種?!』、『ちよつと待ておまえ!』、『正気か小童?!』とか頭の中がうるさいです。

「マスター今すぐに止めてください!」

「ちよつとなによあの宝具?!」

「圧迫感が凄まじいですね」

「世界の終わりを感じた」

うわあ〜なんだか風みたいなものが出てきた。あれ、僕は使うなんて思っていないけど、あれ僕つてもしかして『やりたい』で、道具が使えるスキルでも有るのかな。

あ、回転が上がってきた、風の勢いが増してきた。

これは出すしかないのかな。

「マスター!!」

「うん、じゃテレポート」

「は?」

あ、景色が変わった。本当にできるんだ、テレポート。で、かいりけんつてのはまだ

回転しているから。

『放て雑種！ もう持たんぞ!!』とかギルさんが言うので、僕は振りかぶってから、振り下ろしました。

「えつと、えぬま・えりしゆ？」

『言うでないわたわけがああ!!』とかギルさん絶叫です。

そして、星みたいなものが空を切り裂きました。あれ、ここつて海鳴の空の上かな。

「……あれ、何か降ってきた、かな？」

キラキラ、宝石みたいなのが降ってきたけど、えぬま・えりしゆつてそんな効果があるんだ。

『いや、あれは違うんじゃないか』つてこじょうさんが言うけど、じゃなんだろ。一個くらい持つて帰つて、ラキシスさんに調べてもらおうつと。

「よつし帰ろう」

『本気でやるしかない、もはや、手加減などしている暇などなからう』とかギルさんが真顔です、怖いです。

『おまえが悪い』つてこじょうさんがギルさんに言っています。

『小童、少し修練してやろう』とかおじいちゃんが言っています。

あれ、僕つてこれから特訓が待っているのかな。

「浩介、昨日の夜、何かしたか？」

翌日、恭也さんがそんなことを僕に言ってきました。

「ごめんなさい、ちよつと宝具を間違えて使いました」

僕は正直に謝りました。

「そうか、被害はないが、何の宝具なんだ？」

「英雄王の宝具で、えつと確か、『かつて天地を裂いて原初の地獄を生み出した』って宝具です」

「……二度と使うな」

とても凄味のある真顔で恭也さんに怒られました。

「あ、マスター、あれってジュエル・シードでした」

「そうなんだ」

「はい」

ラキシスさんに調べてもらった宝石は、そんな名前でした。

あれ、僕の頭の中に『ようこそ、ラスボス、原作へ』なんて文字が浮かんだけど、何のことだろうか？

原作開始ですよ、ラキシスさん

こんばんは！ 佐藤・浩介です！

僕は今、ギルさんと一緒に武器を投げてます！

『投げるでないわ雑種！』

「え？ 投げないの？ あれ、投げるんじゃないの？」

『撃ちだすといっておろうが』

撃ちだすってなんだろう？

ゲート・オブ・バビロンっていうらしいけど、ギルさんの説明だと難しくって解らないので、実際にやっています。

『蔵から宝具を出すイメージだ』

「出す」

あ、なんかドゴンって音がして穴が空いた。

『おい、英雄王』

『何もいうな、第四真祖よ。我が浅はかであった。そうか、ステータスが上乘せられるならば、スキルも上乘せられるのか』

なんか、ギルさんが落ち込んでいます。なんだろ、今までギルさんがこんなに落ち込んだところ、見たことないのに。

「ギルさん！ 僕はきつとやり遂げますから！」

『……原因、お前なんだけどな』

「え？ 僕が何かしましたか？」

こじようさん、それはもしかして、せきなんてんかってやつですね。まったくいい大人が、子供にそんなこと言わないでください。

『殴りてえ』

『小童よ、技術ばかりを磨くのではなく技量を磨くのだじや』

おじいちゃんもなんだか、今日はやる気です。なんでだろ、何時も皆はもつとのんびりしているのに、今日は僕に厳しいような。

ハ?! これが噂に名高い、愛のむち!?

『身構えよ』

うん、そうに違いない。きつと三人とも、僕を一人前の男と認めてくれたから、厳し

く教えてくれるんだ。

なら僕は一人の男として頑張らないと！

『なあ、あいつ、何か勘違いしてないか？』

『フ、我は悟ったぞ、第四真祖。あやつは、馬鹿だ』

『いやそれは前から知っているからな』

なんか、あつちで何か言っているけど、今の僕は気にしてられないので。おじいさん、本気でかかってきていませんか。

『一割じゃな』

「え？ 解りました！ じゃ、僕も」

『ほっほっほっほ、あくせられーたを貫通して見せようぞ。『流刃若火』！』

「それなら僕も流刃若火！」

炎には炎を！ 水とか氷とかでもいいのかなって思うけど、ここはおじいちゃんとも真つ正面からぶつかってやる。

『あれ、炎熱最強だったよな？』

『さすが、死神最強よ。見よ、あれが炎熱地獄だ』

『お〜〜い』

炎が足りない、火力が弱い、だったらもつと上げていこうか！

『誰か、誰か助けてください』

『黙れ、雑種』

『今、いいところなんだよ』

『邪魔するでない』

あれ、今、誰かの声がしたんだけど、気のせいかな？

浩介が寝ている間のフロート・テンプルでは。

「歩兵部隊、制作完了つと。パスワードアーマーもよし、ISみたいな形になったけど、戦闘甲冑も準備完了」

データを確認しながら、ラキシスは一息ついた。手にしたマグカップのコーヒーはすでに冷たくなっていたが、疲れ切った脳を活性化させるには十分だった。

「マスターの方は」

別のモニターを見ると、穏やかに寝ている主の姿が。今頃は精神世界で鍛えられているだろうけど、止めたくても止められない。

あの人の能力は、現在において絶対。

小学生が持っていていい能力ではないので、ここで鍛えないと後になってマスター自身が、自分の能力で傷ついてしまう。

「でも、本当に凄いなたちに鍛えられているなあ」

ラキシス、半ば苦笑してしまう。

英雄王に第四真祖、死神の総隊長。一人に師事されただけで、ちよつとした世界でならばトップになれるような人たちが、三人もいて一人を教えているなんて。

知っている人が聞いたら、耳を疑うか気絶するかレベルか。

「ラキシス、歩兵用装備って確認した？」

「はい、リーナさん。深雪さんと一緒に怪獣惑星の確認と調教、お疲れ様でした」

データ・ボードを片手に入ってきたリーナは、手近なイスに腰掛けて小さくため息をついた。

「深雪は残って、最終確認しているけど、本当に危ないわよ？」

「制御できませんか？」

「私たちの命令には、『一応』従っているわね。でも、拒否する怪獣はいたわ。やっぱり、マスターの命令じゃないと駄目ね」

解っていたことだが、まったく厄介だ。

彼らはいくまで佐藤・浩介の転生特典。転生していかないけど、特典として位置づけられているため、同じ転生特典のこちらの命令には『お願い』として渋々と従っている程度。

もし、マスターの身に危険が及んだら、迷わずに転移して蹂躞するだろう。

ゴジラとかガメラとか、モスラとか。

「ドラゴンがちよつと騒いでいたけど、何かあったの？」

「え、特に私には」

マスターは就寝中。部隊を動かしたことはなし、艦艇も動いていない。周りから侵攻された気配もないし、形跡もないから平和そのものなのに。

「乖離剣の一件が原因とか？」

「なら、その直後に騒いでいるでしょうが。もつと別のことらしいけど」

もつと別件。

何かあったかとラキシスとリーナは悩み、原因が思いつかずに首を振った。

「話は変わるけど、『ジュエル・シード』だっけ？ あれのデータ、解析できたの？」

「そつちはまだですね。データ・ベースも検索してみたのですが」

チート技術の塊のフロート・テンプルとはいえ、それは技術系のみ。ロボットや艦艇などに類する技術系のデータはあるのだが、他の情報関連だとまだまだ保存された情報量は少ない。

「技術チートって、情報部門も含まれないわけ？」

「そつちは別になりますよ。技術チートで情報を得たとしても、それは機械を形にするものだけです」

「はあ、地道に探すか、あるいは調べるしかないか」

「データ・ベース、もつと大きなものだったらいんですけど」

「今でも十分よ。あれより大きくなったら、誰か管理者でも作らないと、あつても無駄にしかならないじゃない」

「確かにそうですね」

二人はそこで苦笑した。

現在、ラキシス、リーナ、深雪、イオナの四人プラス、ファティマとメンタルモデル達で色々やっているが、どうしても抜けてしまう部分が出てくる。

製造や戦闘面では不安なんてないが、情報とか索敵、諜報なんて部分はどうしても甘くなってしまう。誰もが経験したことがない、あるいは原作においてもそういった方面

をしてこなかったから、必要になったからやろうなんて言つてできるほど器用ではないし、出来るとも言いきれないのが現状だ。

「あの駄女神、またやらかさないかしら？」

「まつさかあ。やりませんよ。これ以上、何が増えるつて言うんですか？」

「情報関連の無双とか」

リーナが苦笑しながら告げた言葉に、ラキシスは呆れて顔を振つたのでした。

「私、そんなにバカじゃないです」

「女神様、いいから、モニターから離れてください」

「私はそんなに馬鹿じゃないから！」

「だから！ 貴方がそう言った時は必ずやらかしたんですから！」

「私は！ そんなに仕事できない女神じゃないもん！」

「だあああ！ 五千年以上の女神歴を持つ人が『もん』ってなんですか?! 可愛いけど綺麗で可愛いって評判だから似合っていてムカつく！」

「いいもん、いいもん、だ。あ」

ポチ！

「……………女神様」

「辞表の書き方を教えてください」

「いや、あの、ですね。なんで『アカシック・レコードへのアクセス権』なんて特典、与えられるんですか？」

「何ででしょうね？」

「あれ、しかも『某検索サイト』みたいな形になってますけど」

「ダメだ、この女神、仕事が優秀なくせに、失敗も優秀だ。なんで最上級の情報システムを、間違いで上げてるんだよ」

「なんでだろうね?!」

その日、天使は思った。

『あ、泣いてる女神様も可愛い』と。

今日は学校、学校ですよ。今日の登校は、何故かイオナさんが『乗ってくれないと泣く』って言われたので、戦艦に乗って登校ですよ。

うん、僕は非常識になれたのかもしれない。

港に戦艦がいても、凄いかっこいいとしか思わなかった。

まあ、いつか。帰りは別の船が来るって言うていたけど、乗って帰るなんて約束してないし。

『馬鹿者が』ってギルさんがため息をついているけど、僕は気にしないのです。昨日の訓練は、結局はゲート・オブ・なんとかが上手く使えなかったけど、真っ直ぐ前に撃つことはできたので。

『亜光速で飛んで行ったの、見てないのかよ、こいつ』とかこじようさんが言っている

けど、亜光速なんて僕には見えないので。

流刃若火もかなり上手く使えるようになったと思います。炎を出して空が飛べるなんて思わなかったけど。

『小童、お主の想像はわしを超えとるのう』とかおじいさんが嬉しそうに髭を撫でていました。

よっし、今日もがんばろ。

「浩介、おまえさ、何かあったか?」

教室に入ったとたんに、顔面蒼白になった健に止められました。

「え、何もないよ?」

「いやいや、何もないか、そうかそうか、何もないならいいんだ。なんでステータスが計測不能から、『無限大』になっただよ」

なんか、健が俯いて何か言っているけど、小さくてよく聞こえないよ。

「こーすけ君、昨日ね、なのはね」

「うんうん、なのはちゃん、なんでそんなに近づいてくるの?」

健が倒れているから、ちよつと待ってよ。なのはちゃん、健を突き飛ばしたのに、気づいてないよ。気づこうよ。

「フェレットさんを拾ったの!」

「いや、なのはちゃん、あのね」

「でねでね！」

「人の話を聞いて、お願いだから」

「助けてつて声が聞こえたの！」

あれ、それつて昨日の訓練の時に声かな。あれ、なのはちゃんにも聞こえたんだ。

「空耳じゃないのつて言っているのに、聞いてくれないのよ」

アリサちゃん、呆れた顔で言わないでよ。そりや、今のなのはちゃんは猪突猛進だけど。あれ、猪突猛進つて習つたかな？ また知識が流れ込んだのかな。

「私は何か声を聞いたけど、それだけだよ」

すずかちゃん、ちょっと顔色が悪いけど、何かあつたの？

「なんでもないよ」

「察しなさいよ」

「アリサちゃんは知っているの、え、どうしたの？」

「察しなさいつて言ってるのよ」

なんだろ、何故か僕だけ理由を知らないで、除け者みたいだ。女の子同士で何か話しているけど、何だろうな。

聞いてちゃいけないのかな、聞いたらだめなのかな。

「浩介、本当に何もなかったんだよな？」

「うん、何も無いよ」

三人との訓練、内緒にしないとだめらしいから、言えないけど、ごめんね健。

「それでね、こーすけ君！」

「はい、なのはちゃん」

「放課後に一緒に動物病院まで見に行こうよ！」

「え、無理」

「ふえ」

え、泣きそうにならないですよ。僕が悪いの、僕にだって用事くらいあるんだよ。今日は早めに帰ってくださいって、ラキシスさんが言っていたから真つ直ぐに帰らないと。

「ごめんね、なのはちゃん」

「いいの、よき妻は夫の道を信じて付きそうものなの」

「またまた、なのはちゃんの冗談はきついなあ。可愛い女の子だからって、そんなこと言っても普通の男の子は騙せても、立派な大人な僕は騙せないからね」

フ、今までの僕とは違うのです。今の僕は立派で、優秀な先生に教えてもらっている戦士、あれ違うかな、騎士？ まあ、いつか。

とにかく、なのはちゃんの嘘には騙されません。

「なのは、あんたね、それがマイナスになってるんじゃないの」
「ふえ〜そうかなあ？」

「なのはちゃん、そこはグツと押し倒さないとだめだよ」

「すずか、あんたね、小学生でしようが」

「押し倒すの！ 既成事実なの！」

「そうだよなのはちゃん！ 二番手で私も突撃するから！」

「ちよつと待ちなさい！ 二人とも落ち着きなさい！ なんでそんなにコースケを落とすことに命をかけているのよ?！」

「決まってるの！ こーすけ君だからなの！」

「そうだよ！ こーすけ君だからだよ！」

「………しまった！ 私としたことが！ 納得しちゃったじゃないの！」

なんだろう、後ろでなのはちゃんとすずかちゃん、アリサちゃんが騒がしいけど、放つておいた方がいいかな。

女子だけの内緒話つてあるから、突っ込まない方がいいよね。

「強く生きろよ、浩介」

「泣くほどのことがあったの健?！」

「ああ、おまえはいい友だったよ」

あ、うん、そうだね。なんだろう、健の言い方が引つかかるけど、とりあえずは頷いておこう。

そして、僕はまた女神様の土下座をしています。

「すみません、ごめんなさい」

『貴様ああ!! いい加減にせんかこの駄女神がああ!!』

ギルさん、絶叫です、凄いい怒りを感じます。

『で、何だつて?』

『ふむ、どういったことなんじゃ?』

『この駄女神が! アカシツク・レコードへのアクセス権と、それ関連のシステムをぐるっと改良して検索システムとしてフロート・テンプルに設置しおった!』

『はあ?! アカシック・レコードってあれだろ?! この世界すべての情報が集まっているってあの!』

『ふむ、こうなると単体での修練だけではなく、そういった技術系の修練も必要となるか』

なんだろ、今、三人の中でハードルが上がったような。あれ、僕の訓練の内容が増えたような気がします。

「ごめんなさい、浩介君。あの、償いはしますから、何がいいですか?」

「え、お願いを聞いてもらえるんですか?」

「はい!」

笑顔で顔を上げた女神さまはとても綺麗でした。

『止めぬかこの馬鹿女神が!』

「じゃあ、世界が平和であるように?」

「ごめんなさい、そういった願いはちよつと。あ、色々と世界が崩壊してもいいなら」

「それじゃダメです。後は」

何かあるかな。何かがあるかな、ロボットは持っているし、超能力はあるから。

「あ! じゃあ魔法が使いたいです!」

「え? 解りました」

あれ、なんだろう、なんでか皆の目が冷たいような。

魔法って憧れないのかな。だって、魔法つかいは男のロマンだって、健が言っていたよな。

「はいでは、魔法……あ」

「え？」

「はい魔法ですね！ 魔法が入りましたよ！」

なんだろう、慌てた様子で女神様に戻って行ったよ。

『さて貴様！ 待てと我が言っているのだぞ!!』

『あいつ、やりやがったぞ。なんだ、この魔法のスキルは?』

『ふむ、まったく容赦のないものよな』

なんだろう、また色々なことが起きそうな気がする。

「マスター！ マスターああ!! あれ何ですか?！」

「ラキシスさん、どうしたの？」

「フロート・テンプルの中にあつたらまずい検索システムがあるんですけど?！」

「あ、女神様から貰った」

「……あの駄女神があ」

あ、ラキシスさんが中指を立てた。あれって何の意味があるんだろう。

「それで？」

「うん！ お詫びにつてね、魔法が使えるようになりました」

「あ、そうですか」

あれ、ラキシスさんがなんだかホツとしている。みんな、魔法に憧れてないのかな。僕だけなのか、それは残念だな。

そして、原作は動き出した。

予定通り、高町・なのはにレイジング・ハートが渡り。

予定通りに、フェイト・テスタロッサは海鳴に入り。

予定通りに、女神は浩介の特典で失敗したのでした。

「女神様？」

「もういや、いつそのこと、私が傍にいたほうが浩介君の負担にならないんじゃないの？」

「……一理あるのう」

「創造神様、それをやったら天使一同は退職しますからね」

「冗談じゃ」

今日の神様達は平和であり、天使達は心労がたまりました。

ピコン！

佐藤・浩介に新しい特典が追加されました。

魔法・EX、補足項目が多数のため統合されました。効果は、『すべての魔法が使用可能であり、術式の違いによるリスクはなし』。

また、EXの効果により、魔法実行時の『魔力量の減少なし』とします。

頑張って考えたんですよ、リーナさん

こんにちは、佐藤・浩介です。

実は僕は今、魔法の特訓中です。

「ちよつと待とうか、ね、マスター？」

「ええ、リーナさんがやってみようって言ったんじゃないの」

「うん、私が悪かった。悪かったから、その魔法、どっかにやって」

「なんだろう、魔法が使えるようになったから、試しに使ってみようってリーナさんがいい出したのに。」

「深雪さんも、『とりあえず基礎から』って教えてくれたのに、二人して変な笑顔してる。」

「そのまま、そつとそつと」

「深雪さんまで。だってこれ深雪さんの『お兄さん』が、使っていた魔法なんでしょう？」
「いえ、兄のは、もつと」

違うのかな、教えてもらったとおりに術式？ 展開したはずなんだけどなあ。

「深雪、ちよつとあれつてあれよね？」

「あれです、リーナ。もしもの時は、お願いしますね」

「待っていくら私でもあれは無理よ。ヘヴィ・メタル・バースト当てて、どうにかじゃないの。そもそも、あれつて『オリジナル』とまったく違うじゃない」

「ええ、もちろん、ベースはお兄様の『マテリアル・バースト』でしょうけど。ほとんど別物ですね」

うん、なんだかヒソヒソと話をしているけど、何のことかな。あれ、でもこれつてどうすればいいんだろ。

魔法を使つてみたけど、なんだかいつももの能力と違うような、同じような。

よつし、放り投げよう。

「じゃ、ポイつと」

「マスター?!」

「どうしてそうしたんですか?!」

あれ、ダメだったかな。あ、なんだかすごい爆発が宇宙空間で起きたよ。一応、テレ

ポートの応用で宇宙空間に投げ出したけど、ダメだったのかな。

「深雪、説明」

「質量をエネルギーに変換するマテリアル・バーストは、簡単に言えばとても大きな爆発といったところでしょう」

「あ、うん、色々な理屈をすっ飛ばせばそうね」

「ですが、マスターの『マテリアル・バースト』は、質量ではなく空間への圧迫を『五次元空間』からかけた、爆散になります。つまり、質量爆散ではなく空間爆散、つまり空間系魔法ですね」

「……防げるの、それ？」

あれ、リーナさんが蒼白になったよ。なんでだろ、難しい説明を深雪さんがしているようだけど、そんなに難しい理屈じゃなかったような。

「六次元以上の何かあがれば簡単よ」

あ、深雪さんがとてもいい笑顔だ。うんうん、やっぱり美人さんって笑顔が似合うなあ。

「そっかそっか、それって『マテリアル』って言わないでしょ？」

「ええ、そうね。リーナ、この話は終わりにしましょう」

「同感ね。あれ、でも待って、それってバスターランチャーを使って」

「ベクターキャノンも合わせれば可能ね」

あれ、二人とも黙っちゃったけど、どうしたんだろう。

まあ、いいかな。難しい話は任せて、次はこの『熱核魔法』ってのを試しておこうかな。

検索システム？ がフロート・テンプルに出来たから、魔法の検索もできて便利だね。使いたい魔法を考えれば、答えがすぐに来るのも便利だし、何処にいても使えるって便利だね。

カンニングになるのかな、そうなっちゃうのかな。

ラキシスは考える。

どうも最近、使い道がないなあと。

「レッド・ミラーージュ、かつこいいのに」

色々な世界の機体を見て、様々な機体を設計して、色々と創意工夫を重ねて機動部隊を建造中なのだが、どんな機体を見ても一番にかつこいいのはこの機体だと思う。

なのに、マスターが使ってくれない。

強さでもどんな機体にも負けない自信がある。二十メートルクラスの機体なのに、分身可能とか亜光速でも動けるとか、ちよつと他の機体にはないとんでも能力を持っている。

その上に、機体の装甲だつてかなりの強度がある。今は手の指も色々改造して、小山くらいなら割れるくらいの強度まで上げた。

全身の装甲だつて、シミュレーション上はハイ・メガ粒子砲の直撃にだつて耐えた。縮退砲は防げなかったけど、荷電粒子砲の中でも動けたくらいはある。

「縮退砲、防げるようになればいいのかな」

マスターが使ってくれない、こんなにかつこいいのに、使ってくれないのはちよつと悔しい。

「それより、オージエとか作った方がいいのかな」

オージエか、あるいはマシン・メサイアとかのほうがいいのか。あるいは色合いの間

題か、マスターはまだ子供だから白よりもっと派手な色合いが好みではないか。

その時、ラキシスの脳裏にマスターの言葉がよぎった。

ジエネシツク・ガオガイガー、かつこいい。

つまり、金色か。

「作ろう、ナイト・オブ・ゴールド」

グツと拳を握って決意したラキシスは、すぐさま行動を起こした。

まずは金が必要。純金が大量に、その上で装甲の強度も上げないと。金で強度がある、矛盾のような話だが、それができなくてあのマスターに顔向けが出来るわけではない。

「材質から考えて」

ぶつぶつと呟きながら歩くラキシスの背中を、偶然に通りかかったイオナは見つめた後、通信機を取り出した。

「貴方のところの妹が暴走中」

『すぐに止めます』

通信相手、アトロポスは閃光のように駆け付けたという。

「離して！ 作ればマスターが乗ってくれるから!!」

「落ち着きなさい！ そんな無茶苦茶な原子配列でどうするの?!」

「出来るって結果が出てるから！」

「結果が出てくるからで作る人はいわないよ！」

「離してえええ!!」

「ダメだつてばああ!!」

不毛な姉妹のケンカが、フロート・テンプルの一部で行われたのでした。

「専用機かあ」

「女神様、何してんですか？ モニターから離れて」

「だ、大丈夫、ほら操作作用のコンソールは全部、システムに繋いでないから」
「物理的に切断つて、そこまでするか？」

「うん、私のドジっぷりだと、そこまですないとね」

「まあ、それなら大丈夫でしょうけど」

天使たち、今回は何事もないと信じて他の仕事を始める。

女神もモニターを閉じて、仕事を再開しようとして、最後にとモニターを眺めてポツリと呟いた。

「金、純金製のロボットかあ。浩介君の専用機が金つて、趣味が悪いような」

「でも、ギルガメツシュ王つて金色の鎧ですよね」

「第四真祖はパーカーだけどね」

「そんなこと言ったら、死神の総隊長だつて白じゃないですか」

「いっそのこと、金色の鎧に白い頭部とマントとか、カッコイイかな」

「悪趣味ですよ」

それもそうだね、と全員が笑つて仕事しましょうと動き出した時だった。

ポチ！

「め、女神様？」

「私じゃないから！　今回は私じゃないから！」

慌てて両手をあげて違うと示す女神に、天使達は疑いの目を向けていた。

「あ、今回は儂」

「創造神様ああああ?!」

「さて、土下座に行つてこよう」

「待つて！　そこは私の役目ですから！　誰にも譲らないんだから!!」

「あやつ、一目散に駆けていきおつた」

「女神様、ちよつとMに目覚めてないですか？」

「・・・女神の嫁入りか」

「うわあ、この職場、もうしつちやかめつちやか」

そして、フロート・テンプルでは。

「ラキシス、説明」

「私じゃないです、本当に私はやってません」

「金色の機体って、ナイト・オブ・ゴールドーKOGですよね？」

「私じゃないですって！」

「アクティブ・バインダー付いている」

「本当に私じゃありません」

疑いの目を向けられるラキシス、本当に違うと全身で語る彼女の前に女神様が土下座で出現。

「このたびは、創造神様がすみません」

「………こいつの上司もボンコツか」

ラキシス、蔑んだ目で見下ろす。何故か、全身がゾクゾクする女神様。

「まあ、あるものは仕方ないから。で？」

「破壊不可能な金色の装甲と、光と同程度の速度で動くKOGに、同じ装甲で反応速度百倍のアクティブ・バインダーをつけて、空間を織り込んだマントが付いてます」

どうぞと差し出されたスペックに、四人は一斉に思った。

「こいつら、神って言うよりは厄病神じゃないの、と。」

「本当にごめんなさい。でも、浩介君以外には動かせないから、大丈夫です」

「それなら」

ラキシスが安堵している横で、リーナはちよつと疑問を感じた。

「ねえ、そもそもマスターってそういった『スキル』あるの?」

「………あ」

女神様、顔を驚愕に染め上げる。

「え?」

ラキシス、固まって止まった。

「私たちが知っているスキルって、全部が生身のスキルよね? ロボット操作って出来るの?」

「………ラキシスさんも動かせませす!」

女神様、思わず救済措置を実施。

「私のフルコントロールですか?!」

ラキシス、驚愕の余り女神の首を絞めた。

「落ち着いて、神殺しは駄目よ」

「やんわりと止めながらも、深雪は内心で思う。『ここで殺しておいたほうが、後顧の憂いはなくなる』と。」

「確認しよう」

冷静に提案するイオナも内心では、『殺しておいた方がいい』なんて冷たいことを考えていたりする。

「じゃ、なかったら抹殺で」

笑顔でとんでもないことを言うリーナに、誰もが頷いていたという。

結論、浩介にはロボット操作関係のスキルはなかった。当然、艦艇の操艦ってスキルも。

「ギルティ」

「抹殺ね」

「殺しましょう」

「滅ぼす」

四人からの冷たい目を向けられ、女神はにつこり笑顔を浮かべて、再び土下座しました。

「責任をもって、つけさせていただきます」

「よろしい」

それでいいのか、女神様。状況を見ていた天使たちは、そんなことを思ったのです。

「こーすけ君！ 見て見て！ 魔法少女なの！」

「うわぁ」

「一晩で、なのはちゃんがコスプレに目覚めました。」

「こーすけ君、私もできるみたいだよ」

「うわぁ」

「一夜を超えて、すずかちゃんがコスプレしていました。」

「コースケ、私はどう？」

「うわぁ」

「昨日までのアリサちゃんは、いなくなったみたいですよ。コスプレしてません。」

「どうだ、浩介！」

「うわぁ」

「健までもどっかに行ったみたいですよ。コスプレが流行っているのかな？」

「（こ）は僕も！」

というわけで、コスプレすることにしました。

魔法戦士、魔法騎士？

『鎧ならば我のを使わせてやろう』、ギルさん優しい。

『制服でいいんじゃないか？』、こじようさんは解ってない。

『ほっほっほ、どれこれなどどうじゃ？』、おじいさんの羽織はかつこいい。

よっし、これで。

「僕はこれだあああ！」

というわけで、ギルさんの金色の鎧の上からおじいちゃん羽織？を着た僕が爆誕したのです！

あ、後ろの文字がなんか赤い紋章になってるけど、これってなんだろう、何処かで見たことあるけど。

「み、ミラージュ・マークかよ。しかも、それ隊長クラスじゃないと着れない奴じゃんか。ギルガメツシユの鎧の上からそれって、もうなんだよ」

健が何か言っているけど、なんだろう。あれ、倒れたけど、どうしたのかな？

「傷は浅いぞ健！」

「浩介、俺はもう色々詰り込み過ぎだと思ってるんだ」

「何が言いたいか解らないよ健！」

「フ、頼むからラスボスにならないでくれ、俺の最後のお願いだ」

「それ無理」

「ちつきっしょうがああああ!!!」

あ、健がなんか泣きながら走って行った。どうしたんだろ？

「ラスボスって言ったわよ、あいつ」

「ラスボスなんだ、こーすけ君って」

「なのは、ラスボスの奥さんのの」

え、なんでみんなはそんな『待って』って顔しているのさ。ラスボスでいいじゃない。ラスボスって何の意味かは知らないけど。

同じ頃、地球の軌道上。

「あそこが『次元震』のあった場所ね」

「艦長、妙な反応があります」

「そう、調査を開始しましょう」とある組織の船がやってきました。

「あれ、何か来たかな？」

「ラキシスさん、ただいま」

「あ、マスター。そういうえば、ジュエル・シードですけど」

「どうしたの？」

「触れた人の願いを暴走して叶えるので危険みたいですよ」

「そうなんだ。危ないの駄目だと思います」

「あ、じゃあ回収しておきますね」

「はーはーい」

元気に自分の部屋へと向かう浩介の後姿を見つめながら、ラキシスはグツとガツツポーズ。

「よっし、結果オーライ」

「まさかもう回収した後、なんて言えないわよね」

「リーナさん、黙って」

「行動が速いのはいいことだと思いますよ。マスターの許可なく部隊を動かしたのは、
ともかくとして」

「深雪さん、褒めるか怒るかどちらかで」

「優秀な従者、ポンコツあり？」

「イオナさんまで」

崩れ落ちるファティマが一人いたという。

「えつと、これでいいよね？」

「いや女神様、正気ですか？」

「ロボットが使えないと私が怒られるから」

「そりやそうでしょうけど」

天使、軽く引いてしまう。

創造神、あまりに女神の仕事の速さと、あまりのポンコツぶりに悶絶中。

「いいのー！」

佐藤・浩介、操縦技術EX追加。

ラジコンから惑星型艦艇まで、どんなものでも操作できるものならばすべて十全に扱える。

「………あ」

「また何したんですか？」

「ニュータイプとコーディネイターとイノベーターとXラウンダーって同じものよね?!」

「はい？」

「バルキリーとゾイドも乗り物よね?!」

「え、あの」

「ペガサスとかドラゴンも乗り物でいいよね?!」

「何してんですか、女神様」

「つまり！ 惑星も乗り物よね?!」

「あんた正気かああ?!」

「だっただけでええ!!」

今日も神様達の世界は、とても賑やかでした。

ピコン!

第一級女神よりのスキル申請を受諾。

佐藤・浩介の騎乗スキルはEX、直感EXに追加が行われたため、未来予知スキル追加。

身体能力への追加なし、すでに基準値を超えているため。

操縦技能EX、操艦技能EX、あらゆるものを操作可能との指定によりスキルを検索。結果、佐藤・浩介に『カリスマ』スキルと、『支配者』のスキルを付与。

スキルの統合を行った結果、佐藤・浩介は『万物の支配者』、『絶対王者』を獲得。同一存在が太陽系内に存在するため、宇宙の保護システムにより警告あり。

女神の指示を優先するため、同一存在を佐藤・浩介へ融合。意思への侵食も許可されないため、『能力の一部』として養分融合とする。

頑張っている親友のためなんですよ、深雪さん

「こんにちは！ 佐藤・浩介です！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

絶賛！ ギルさんが気絶中です、あ魂が抜けています！

『傷は浅いぞギル！ 頼むから起きてくれ！』

『ふざけるな第四真祖！ 何時から我をギルと呼んでいいと許可した?!』

『いや、もういいかなって』

『貴様、不敬ではないか?! 王のことを』

『同じ苦勞を味わう者として』

『・・・・・・・・・・フ、我も丸くなったものだな。納得してしまった』

『山本のじいさん、なんでそこでお茶を飲んでんだよ』

『ほっほっほ、儂も大人しくなったものじゃと思つてのう』

なんだか縁側があつて、崩れ落ちているギルさんと、疲れた顔のこじょうさんと、お茶を飲んでいるおじいさんがいます。

あれ、今日は訓練しないのかな。じゃ、自主練だ。確か、サツカーしている子が『裏でこつそり自主練して、頑張るのかっこいいだろ』って言っていたから、僕も頑張つて練習しないと。

「まず鎧を着ます!」

『おい、笑つていいぞ。あれは我の鎧だそうだ』

『落ち着けよ、英雄王。大丈夫だ、まだ大丈夫だ』

「そしてマントをつけます!」

『昔の儂なら確実に殴つておつたのう』

『じいさんもつとしっかりしようぜ! 俺一人に突つ込みさせるなよ!』

「そして! レグルスゴー!」

『止めろおまえはああ!!』

なんだろう、こじょうさんが凄い顔で止めてくるけど。金色の鎧を着て白いマントをつけたら、後はライオンを纏つて突撃じゃないのかな。

『なんで第四真祖の眷獣を身に纏っているんだよ?! どっからきたその発想は?!』

「雷はファッシュンらしいです!」

あれ、こじょうさんが崩れ落ちた。なんでだろう、確かそんなことを誰かが言っていたのに。

えっと、魔法をギュツと圧縮して体の中に入れるって、技法？

「め、女神様、何してんですか？」

「えくくと、その。つい」

「本当に何してんですか?! なんで佐藤・浩介のステータス画面を開いてんですか?!」

「いや、だって、ねえ。その、あれよ、ほら」

「なんですか?!」

「ま、魔法を使つて乗り物を操れるって、魔法を『乗りこなす』ことも必要なあつて」

「誰からそんなことを？」

「使命感！」

グッと親指を突き出す女神に、天使一同は深くため息をついた。

佐藤・浩介、『ネギま』の『闇の魔法』を習得す。ただし、内包できるのは魔法だけに限らない。

「女神様」

「ごめんなさい、ちよつと土下座に行つてきます」

神様の世界は今日も残業らしいです。

夜の街を走る。人目のない場所をかけぬけ、目的のものを探しても見つからない。何度も、何回でも諦めずに根気よく。

「フェイト、今日はもう」

「もう少しだけ。まだ見つけられてないから」

「でも、フェイト」

「必ず見つけないと、そうじゃないと母さんが、『アリシア』が」

小さく呟く少女の背中を、女性が悲しそうに見つめていた。

「艦長、この世界って魔法がないんですよね？」

「確かそうよ。どうしたの？」

「いえ、ミッドチルダ式魔法の反応があるんですけど」

「調べてみましょう」

という、夢を見ました！

なんだか複雑そうな夢です、誰もが必死な顔をしていたので、夢とはいえ皆が幸せになればいいなあって考えます。

『こ、こやつ』とかギルさんが凄いい顔しています。どうしたんだろう、僕だって人の幸せを願うことがるのに。

『いや、マジか』とか古城さんが言っています。あ、きちんと発音ができました。よつし、これで僕も素晴らしい大人に近づいた。

『ラスボスじゃな』っておじいさんが言っています。

あ、そういえばラスボスについて調べました。

ラスボス、つまり最後のボスって意味らしいです。

ということは、やはり僕はもつと鍛えないと。今のままだと、中盤のボスで終わりそうですね。

あ、RPGって苦手だった。

「健く〜」

「どうした浩介？」

「RPGでのラスボスってどのくらい強いのか？ 確かゲームしていたよね？」

「ああ、ラスボスカ」

あれ、どうしたんだろう。健の顔が青くなっていくけど、病気かな。

「そうだなあ、誰よりも平和を愛し、自由を尊重して、他者を慈しみ、余計な混乱を起こさない。度量の広い男がラスボスだ」

健が凄い顔で親指を立てています。強さを聞いたのに、そんなことを言ってくるなんて。つまり、ラスボスはそんな存在ってことか。

そっか、そっか。

『でかしたぞ雑種う！』とかギルさんが喜んでいきます。

『よくやった健！』とか、古城さんも喜んでいきます。

『見事じゃ』っておじいさんも絶賛です。

「解ったよ、健。ラスボスが何なのか解った」

「そっか、良かったな。なら、俺は少し寝るぜ」

「体調が悪いなら早退したら？ 今日のはちゃんもすずかちゃんも、アリサちゃんも顔色悪いね」

「ちよつと探し物でな。ふわあ眠い」

眠いって夜更かしてもしたのかな。そんな、夜にきつちり寝ないなんて悪い子たちだ。悪い子？ あれ、なんだろうちよつとだけ憧れるものがあるけど、僕が夜更かすると深雪さんが、『ダメですよ、マスター』って穏やかに怒ってくるから、したくてもできななんだよね。

ちよつとこつそりと出かけようとしたら、『添い寝』とか言いだし。

僕はもう子供じゃないから一人で眠れるのです！

「悪くなったね、健」

「いやどうしてそうなる。いいから寝かせてくれよ、ジュエル・シード探して眠くてさ」「ジュエル・シード？ あの危ない宝石のこと？」

探しているってそれなんだ。

「……ちよつと待て、なんで浩介が知っているんだよ？」

「え？ 知っているから？」

「まさか、おまえ。まさかだよな」

どうしたんだろう、健。なんか震えているけど、本当に体調が悪いのかな。

あ、先生が来た。

放課後、何時も通りにジュエル・シードを探しに行こうとしたのはを健は呼びとめた。

「厄介事になった」

健はそう言つて、すぐかとアリサも連れて何時もの公園に向かう。

「浩介がジュエル・シードを知っていた」

「コーすけ君が？」

なのはにとつて、それはあり得ないこと。浩介の持つているものを考えたら、真つ先に協力してもらうのが一番なのだが、彼女が断固ととして拒否した。

『コーすけ君が関わつたら、もっと厄介なことになりそうなの』。

それにはアリサとすずかも同意して、健も頷いた。唯一、その浩介を知らないユーノ・スクライアだけは首をかしげていたが。

「あいつなら、あり得るわね」

「こーすけ君なら知っていてもおかしくないよ」

アリサも頷き、すずかは微塵も疑っていない。

「ねえ、前から聞こうと思っていたけど、『こーすけ』ってどんな子なの？」

聞こうとしても聞けなかった質問を投げたユーノに、四人は間をおくことなく答えた。

『ラスボス』と。

「悪い意味じゃないよ、ユーノ君。こーすけ君って昔から、『何かあつた時は中心にいる』ことが多いの」

なのは、ちよつと苦笑しながら答える。

「あいつってこう悪運が強いっていうか、問題ごとのど真ん中にいることが多いのよね」
溜息交じりにアリサは告げた。

「本当にどうしてって聞きたいくらいに、何かあつたらこーすけ君に話を聞けば『うん、それね』って答えてくれるよね」

すずかも何処か疲れた顔で思い出していた。

「本当に、マジかかってくらの確率で遭遇するからな。黒幕おまえじゃないかって疑ったこともあるけど、大抵が巻き込まれた結果だったから、笑い話にもならない」

健も凄まじく肩を落としていた。転生者としての記憶を思い出してから、浩介がた

どった事件を思い出すと、『おまえ、本当に今までよく生きてたな』ってツツコミを入れてたくなるくらい、色々なことに巻き込まれたのが浩介だ。

その最終段階が現在の『転生者でもないのに転生特典』とは、健も気づけずいたりする。

「え、待って。でもそうすると、今回の事件って『そのこーすけ』が引き起こした可能性はないの？」

ユーノが思いついたことに、四人はちよつとだけ呆けてしまった。

否定したい、誰もがそんなことはないと言いたいのだが、否定できない前科が彼にはある。

黒幕ではない、すべてを裏側から操っていることもない。けれど、引き金を引いたり、誰かの暗躍した結果だけ『作動させる』ことはしてきたのが、佐藤・浩介だ。

「……あいつの両親の遺産、親族に奪われたよな？」

「あ、それね！ パパにも『どうにかして』って言ったんだけど」

「私もお姉ちゃんにお願いしたよ」

「なのはもお父さんたちに言ったよ」

あの時の事件は三人の中で、暗い思い出として残っていた。

浩介の両親が亡くなった時、その貯金額は浩介が大人になるまで十分に持つだけは

あった。それが一瞬で親族達の取り合いの結果、ゼロになって家も奪われて浩介は路頭の迷うことになったのだが。

「その親族、全員が『破産』してんだよ」

「うわあ」

声を出したのは誰だったのかは解らないが、全員が思ったことだった。

「待って、あいつってそんな『性質』を持ったの?」

「アリサちゃん、性質じゃなくて、『技能』?」

「酷いの、すずかちゃん。私達みたいな魔法のスキルとか?」

「自分に敵対したものを不幸にするスキルって、どんだけだよ。なのはちゃんさ」

「待って、皆、おかしい話になってない? 今はその『こーすけ』がジュエル・シードを知っていたって話だよね?」

話の内容が酷いものになりそうだったので、ユーノは戻すことにした。その先にいったら、何故か『苦しみ』になりそうと思ったからではない。

「……あいつのスキルを考えると、ありえない話じゃない」

「じゃあこーすけ君はもう?」

「こーすけ側だろうな」

健の言葉に、誰もが反論できないでいた。

「あいつがこの事件にかかわっているって……どうしよう、凄く普通に思えてきた」
アリサ、ダウン。もう何時も通りすぎて、どう反応していいか解らない。

「私も違和感ないよ。コーすけ君なら、もう解決した後じゃないかなって疑っているから」

「すずか、妙なところで真実を言い当てる。」

「コーすけ君、奥さんに黙っているなんて許せないの」

「なのは、告白のし過ぎてもうすでに『妻』の気持ちになっただけだ。」

「怖いしその通りかもしれないけど、浩介に話をするしかないか」

「健、一世二代の決意をした。」

「そして、ユーノは四人の姿を見て思う。」

『そのコーすけって本当に人間?』と。

「は?! 何処かで僕が人間じゃない認定された気がする?!」

「え、マスター?」

「そんな気がします、深雪さん!」

「まあ、それは大変ですね」

大変なんです。深雪さん、綺麗な顔で笑っているけど、目が笑っていないような気が。何処の誰でしょうね、私達のマスターを人外扱いた人は? フフフフ

あれ、ちよつと寒い。なんだろう、雪でも振るのかな。ここは朱塔玉座の中なのに、エアコンが壊れたのかな。後でラキシスさんに言っておこう。

「ところでマスター、今日はどうして『宝物庫』に?」

「はい! なんだか健がジュエル・シードを探しているようなので、僕が持っている分を届けようかなって」

「え?」

深雪さん、どうして笑顔のまま固まるのかな?

「だから! マスターに言わないとだめでしょうが!」

うん、リーナさんだ。あれ、怒っているけど、どうしたのかな。

「お、怒られませんか?」

ラキシスさんもいる。

「怒られても報告はしないと」

イオナさん、怒られるって何があつたのかな？

「いいじゃない、言われたからやっておきましたで」

「そ、そうですよね?!」

「報告に『何時』を入れなければいいだけ」

「そうですね！ じゃあ……あ、マスター」

あれえ、三人が僕を見て固まっているけど、何があつたのかな。

「ラキシスさん！」

「はい！」

「ジュエル・シードを友達が探しているので、ください」

「どうぞ！ マスターの命令どおりにすべて集めておきました！」

おっく仕事が速いなあ。さっすがラキシスさん。

よし、これを健に届けよう。

テレポトつと。

「健〜」

「浩介?! どっから出てきた?!」

あれ、ここって公園だ。あ、なのはちゃんとすずかちゃんと、アリサちゃんもいる。あ

れ、その足元にいるのってフェレット？

「はい、どうぞ」

「ああ、どうも。はい？」

「ジュエル・シード、探していたよね。はい」

「……おまえ、ラスボスだな」

「いや〜照れますなあ。それ目指してます〜！」

グツとガツポーズした後、僕は朱塔玉座へ戻りました。

「時空管理局だ！」

あれ、誰かの声でしたけど、誰だったのかな。見られたかな、テレポートする人間って、危ないって思われないかな。

うん、後で健に話を聞こうつと。

『我はこやつが予想できなくなってきた』。

『最初から俺には無理だったぜ』。

『まさにラスボスじゃな』。

あれ、なんでだろう、三人が呆れた顔で見ているけど、どうして？

「そういえば、創造神様、あの子のこと知っていますか？」

「知っているといえば知っておるが、知らないといえば知らないのう」

「え？」

「うむ、若気の至りじゃ。実はの、『トラブル・メーカー』を逆転させたらどうなるかと考えたことがあつての」

「はあ？」

「で、実験していたスキルをつい、ポロリと」

「ポロリと？」

「現世に落としてしまつて、その先にいたのがあやつじゃ」

「………浩介君がこんなことになつて居るのつて原因はあんたか?!」

「これ、女神がなんという言葉を使う。もっとお淑やかにじゃな」

「逆転させたら、トラブルが集まつてくるでしょうが?!」

「見事に、トラブルホイホイになつてるのう」

「浩介君のために、この人を殺した方がいいかな？」

「女神様、その時は天使一同、お供します」

穏やかだった神様の世界に、『最終戦争』が起きそうな心配がしました。

呼び出しがあるってき、イオナさん

こんにちは！ 佐藤・浩介です！

先日、親友の健にジュエル・シードを渡してきました。

困っている友人のために、探しているものを渡すっていいことしたなあって思っていますけど。

「なあ、浩介、これ何処で見つけた？」

なんでだろう、学校に来たら健が怒った顔で言ってくるのです。

「え、ラキシスさんが集めてくれたよ」

「いや何時だよ？」

何時って何時だろう、お願いしてから一日も経っていない気がするけど、集めてくれたってことは、かなり頑張ったんだね。

『誰か、この阿呆に教えてやれ』ってギルさん、何か知っているのかな。あ、そうか『目』を使えばいいのか。

『おい、止めろ。いくらおまえでもまだ耐えられないだろうが』って古城さんは、何を心配しているのかな。大丈夫、僕だって大人になって色々とできるようになったのです。

よっし、使おう。『駄目じゃ』っておじいちゃんが邪魔します、なんでか『目』に関しては僕の意思より、ギルさん達のほうが優先？ されるみたいです。

「浩介、話を聞いてないのか？」

「聞いているよ、健。僕も知らないから、ちよつと『目』を使おうと思ったら、ギルさん達が邪魔するんだもん」

「は？ え、『ギルさん』ってギルガメツシュ?!」

「おお、驚いている健って久しぶり。知っていたんだ、なら素直に話してもいいかなって。」

「うん、ギルさん。僕の頭の中？ あれ、魂の外側？ とにかくね、ギルさんが色々教えてくれるんだ」

「英雄王に師事されているって、おまえって奴は」

え、そんなに驚くこと。なんだか顔色が悪いけど、どういふことなんだろ」

「待った！ おまえ、『達』って言わなかったか？ あれか、まさかおまえの最初の特典の」

「うん、後ね古城さんとおじいちゃんがいる」

「まさかの第四真祖に山本総隊長までかよ」

あれ、健が崩れ落ちた。最近、そのポーズって流行っているのかな。僕は知らないけど。

「他にいないよな？　いないよな?!　まさか、転生特典のキャラすべてとか言わないよな?!」

「うん、他の人はいないよ」

なんで僕は健に首を絞められているのでしょうか？

あれ、親友に殺されるって、どっかの冒険譚の始まりだったような？

「本当だな?!　し様とかいたら怒るからな?!」

「大丈夫だよ、健。そこは女神様が『大丈夫です』って言ったから」

「女神様？」

「うん、なんだかよく土下座に来る女神様」

「……おまえ、本当にチートだな。チーターか？」

初めて聞く単語です、できれば意味を教えてください。

でも、健は教えてくれませんでした。

親友だっと思っていたのに。

後で怒ってやろう。

「は?! 何処かでマスターが怒っている気配が?!」

「はくくくいラキシス、いいから座って」

「ごめんなさい」

場所は変わってフロート・テンプル。四人がイスに座ってデータを眺めていた時、唐突にラキシスが叫んで立ち上がったのでした。

それに冷静に突っ込み（物理的なサイオン弾付き）をするリーナ。

「なんか、最近のラキシスはポンコツ」

イオナ容赦ない一撃、ラキシスにクリティカル・ダメージ。

「最初からポンコツなのでは?」

深雪からのコンボあり、ダブル・ダメージで4Dでも振ってください。

「ポンコツ・ファティマの話はいいから」

「もう止めてください！ 私のライフはゼロですよ?！」

「黙れ、ポンコツ」

グツと何かが突き刺さり、ラキシスは崩れ落ちて灰となりました。

「普段は優秀なのに、どうしてこうマスターが絡むとポンコツになるかな、こいつ」
冷たい目で見下ろすリーナに、深雪は半眼で返した。

「貴方もそうでしよう?」

「深雪も大概」

素早く切り返すイオナに、深雪は凍ったように固まった。

「皆さんは!」

ラキシス復活。立ち上がり、皆を見下ろしながらニヤリと笑う。

「マスターが絡むとポンコツですよね?」

「よく言ったラキシス」

「ケンカを売っていますか?」

「宣戦布告なら受けて立つ」

全員が一齐に立ち上がり、それぞれの武器を持ち上げた瞬間だった。

テーブルの上に女神様が降り立つ。

「フ」

絶世の美貌、この世のあらゆるものよりも美しい、まるで宝石のような顔に微笑を浮かべながら全員を見下ろした彼女は。

「私が一番ポンコツですから！」

空かさず土下座したのでした。

ピシリと空間に亀裂が入ったような、張りつめた空気の中、最初に動けたのはラキシスではなく、リーナだった。

「今度は何をやらかした、この駄女神」

「はい、駄女神です、本当にごめんなさい、もう最下級の女神ではなくミジンコでいいです」

「いいから、何したのよ」

苛立ちを隠そうとせず詰め寄ろうとしたリーナだったが、彼女がいるのがテーブルの上なので止めた。

自分がスカートだから、足を上げたら恥ずかしいなんて思ったのではなく、テーブルの上にかかるのは無作法だから。

「この駄女神」

「はい」

「降りろ、そこテーブルの上」

「はいいゝ」

速やかに床に降りた女神は、土下座続行。この態度に、今回のやらかしは過去最上級だと誰もが察した。

「で、今度は何をしたの？」

「そ、そのですね、今回は転生特典を間違えたのではなく」

「間違えたのではなく？」

「創造神様がやらかしたことを謝罪に」

予想外といえれば予想外の人物が出てきて、誰もが思わず顔を見合わせた。

創造神といえれば、最高位の神。世界のすべてを生み出し、世界のすべてを司るが、それだけ巨大な力を持っているために人の世界に滅多にかかわることはないはずだ。

いや、待ったと誰もが思った。

かかわることがないはずの存在が、ちよくちよくやってきては土下座をしてないだらうか。

認めたくはないが、この何時もいるような土下座馬鹿は女神。それもかなり権限が高いだらう女神様。

浩介が今までに貰った転生特典を考え、この女神がずっとやらかしていたならば、あれだけの特典をつけられたのは、この女神がかなりの権限を持つていたからだろう。

ポンコツで馬鹿で、余計なことをしてくる駄女神であっても。

「いいわ、教えなさい」

気にするだけ馬鹿馬鹿しいとリーナは内心で結論を出した。

「はい、実はトラブル・メーカーを逆転させたものを、浩介君に入れたそうです」

「よし殺そう」

即決。マスターにそんなこととした相手ならば、例え相手が神々の最高位であっても殺しに行くべき。

従者としての決意で動こうとした四人の前に、女神が立ち上がる。

邪魔するののか、と考えていると女神はとても綺麗な笑顔で告げた。

「あ、もうやりました」

とても素晴らしく素敵な笑顔でした。

「もうね、天使達と女神達の全員で頑張つて粉碎です、粉碎。まあ、世界管理システムは創造神様がいなくても、問題なく動くのでいいですし、数年後には復活しますから、その時に改めてね」

頬を染めて語る女神様の頭とお尻に耳と尻尾が見えた四人でした。

「あ、そうなの」

「はい!! なので今回のお詫びに、浩介君に『その創造神の権能』を上げようかなくて」「あんな何してんの?!」

リーナ思わず叫んで魔法発動。ヘヴィ・メタル・バーストだったようだが、女神の権限により効果無効。

「ええ!? ダメですか? それがあれば、死後は私たちと一緒に世界で、楽しく暮らせるなあって」

モジモジと手を動かす女神様、妙齢の女性の姿なのに、子供みたいに見える。

「本当に何を考えているの?!」

ラキシス、鉄拳制裁。女神も権限を貫通、女神様にダメージ入る。

「だつてだつて!」

泣き顔で語る女神に、深雪の凍結炸裂。氷の彫像が出来上がるも、一秒後には砕けて女神様復活。

「本当に何をしているかしら?」

「だつてえだつてえ!!」

泣きながら顔を振る女神へ、イオナのナノマテリアルの剣が突き刺さる。

「自分のしたことをよく理解すること」

「だつてえええ!!」

剣が崩壊して消えた後、女神様はハツと気がついて涙を拭つて再び土下座。

「お願いします!」

深々と土下座した後、顔を挙げて真剣に叫んだ。

「私に佐藤・浩介君をください! 毎日、見ていました! ずっと追いかけていました!

好きになりました!! だからください!!」

「.....」

この日、女神様、現在創造神の代行をしている存在は、史上最悪のストーカーになっていることが判明しました。

「却下!」

「ふええええ!!」

けれど、きちんと保護者達を通すだけ、世の中のストーカーよりマシかなあつと四人は思いましたとさ。

ちなみに、女神様は泣きながら神々の世界へ帰って行きました。

ム!? 何処かで僕関係で何かあった気がする!

『こ、こやつ』とかギルさんが驚愕しているけど、ギルさんと同じ能力を持っているなら、このくらいはできる気がします。

だって、英雄王だから。きっと僕なんて想像もつかないような、立派なことをして世界中の人々が幸せに暮らせる国を作ったんだと思う。

だって英雄王なんて呼ばれているんだから!

アーサー王も勝てないような。

『グ?!』

ヘラクレスとか一撃で倒して!

『ふはー!』

山さえも拳の一撃で割れる人だったんだと思います!

『生きているか、ギル?』

『まさか、この我がこんな小僧に負けるとは。世界は広いな第四真祖よ』

『いや、お前ね。なんでそんなに清々しい顔で倒れてるんだよ? 単なる憧れを向けられただけだろ?』

『時に純粋な想いは、刃のように鋭く抉る。我は真理を忘れていたようだ』

ギルさんが笑顔です、初めて見るくらいにいい笑顔しています。

よつし僕も頑張らないと。

「がんばります!」

まずは右手に流刃若火を出して。

『ほう?』

おじいさんが目が鋭く光ったけど、このくらいは簡単にできます。もう最初の頃の僕じゃないのです。

そう! 今の僕はハイパー! 左手にはレグルスを!

『おい、第四真祖よ。あれを見よ。解るか、貴様には先ほどの私の気持ち解るだろう?』

『なんで子猫サイズで手乗りしてんだよ。なんだよ、あれ』

『フハハハハ!! いいぞ! 実にいいではないか! ともに愉悦の世界に旅立とうで

はないか!』

『逃避だろうが、それ』

『鍛え過ぎたのう』

よつしできた! 次はこれをこうして、あれできない?

流刃若火にレグルスを入れたら、雷と炎の刀にならないかなあつて考えたんだけど、無理でした。

『じいさん?! なんで倒れそうになつてんだよ?!』

『儂の流刃若火は、最高じゃあ』

『山本のじいさん?!』

なんだろう、おじいちゃんが倒れたけど、古城さんがついているからいいか。

むう、かつこいいと思つたんだけど、できないなら仕方ない。

「では! エアを!」

『止めぬか貴様あああ!!!』

「これが風なら炎とも相性がいいはず!」

『貴様の中で『エア』がどういうものか解つたわ! 風ならば騎士王の聖剣であろう?!』

「え? なにそのかつこいい名前! 騎士王の聖剣つてあるの?!」

『貴様、『宝物庫』の中身を確認しておらぬな?』

「確認してません!!」

「ビシッと敬礼を決めて見たら、ギルさんが倒れました。

「あれ、ギルさん、ギルさんってば」

慌てて駆け寄って揺すってみると、なんだか顔面蒼白です。

『私の宝具は、誰もが望んでいたものであったはずなのだが、貴様にとつてはあつたのそれだというのか。世界の財のすべてを収めた蔵だというのに』

「なんだろう、ギルさんがとつてもつらそうです。

「古城さん、何かあつたの?」

『おまえさ、本当にさ、なんでそう強さとかスキルとかに無頓着でいられるんだよ?』

「なんだか呆れた顔?」の古城さんがいました。

「だって僕は僕だから、僕なのです。つて感じかな。」

『いいからそろそろ起きろ。昼休み、終わるぞ』

「はくくいま後でね」

笑顔で手を振ると、何故か三人が溜息をついていました。

「どうしてだろう?」

うん、昼休みを使って色々試したけど、少しもできなかつた。これは帰ってから頑張らなくていいと。

目指せ、理想の最高のラスボスだ！

「なあ、浩介。ちよつと時間があるか？」

「あるように見えるの健！ 僕は帰ってラスボスに磨きをかけないと！」

「かけるなよ！ それ以上は強くなるなつて！ なんて昼休みに寝ていたおまえが、起きたら『もう見ない方がいい』って表示になるんだよ！」

「えええ？ そんなの僕に聞かれても」

あれ、健までため息をついたよ。なんだよ、親友に向かつてため息なんて、何かあつたんじやないかって心配するだろ。

「おまえのそういうところ、変わらないよな」

「僕は僕だからね。それでどうしたのさ？」

「いや、ちょっと会いたいって人がいてさ」

誰だろう？

「時空管理局のリンディ・ハラオウンって人なんだけど」

健の言った人に心当たりはありませんでした。

「ただいま〜〜」

「あ、お帰りなさい、マスター」

「ラキシスさん！ じくうかんりきよく？

ってところのりんでいさんって人から呼び

出しを貰ったから行ってくるね」

「解りま……したあ?! マスター! ちょっと待ってください! マスターあ?!」
「夕食までには帰ります!」

ビシッと敬礼してテレポートした浩介に、ラキシスは手を伸ばしたまま固まって、そして通信機を取り出した。

「非常警報! マスターが時空管理局に呼び出されました!」

「全師団全力稼働! フル装備よ!」

「怪獣達へ通信を行います。『マスターの危機のため応援を願います』」

「全艦艇、リミッター解除。全艦隊起動開始」

「全戦力の全力戦闘をマスターに代わって許可します! さあ!」

バツと手を振ったラキシスの上から、『ミラージュ・マーク』の旗が降りてきた。

「仮称ですが、これがしつくりくるので、『ミラージュ騎士団』総員! 決戦準備を!!」

ラキシスの号令に、フロート・テンプルだけではなく、ジョーカー星団が揺れたのでした。

どうしてそんなことしたのさ、ラキシスさん？

こんにちは！ 佐藤・浩介です！

だんだか健がりんでいって人が呼んでいるって言われて、付いてきたわけなんですけど。

魔法って、こんなに不便なのかな。さつきから術式？ ってのを展開して目標地点？に飛ばうとしているんだけど。

「なあ、浩介。それ切ってくれ」

「それってどれのこと？」

「アクセラレータ」

何それ、加速装置って意味だっけ？ あれ、アクセラレータってあれかな、ベクトル操作って奴だよな。

え、切れるの。

「健！ 大変だ！」

「なんだよ、浩介」

「僕には切り方が解んない！」

あれえ、健が凄い顔しているけど、どうしたのかな。

「え、待った、待てよおまえ、それって転生特典だよな？ おまえが貰った能力だよな？」

「女神様がくれた能力だよ。でも、まだ修行してもらってないから」

うんうん、基本的に僕の能力ってギルさん達が訓練してくれて、使えるようになるからね。

アクセラレータはまだ訓練してないから。

「レポートは？」

「え、何となく」

「じゃ何となくで、出来るんじゃないか？」

「ええ、そんなことないって。健も変なこと言うなあ」

「お・ま・え・が・い・う・な」

あれえ〜〜なんで僕は健に首を絞められてるのかな。そんなに怒るようなこと言っただ覚えないけど。

「ちよつと待て。なんで俺はおまえに触れられるんだよ。アクセラレータがあるなら俺

は触れられないだろう。でも、転位魔法が弾かれるから」

「あ、そっちは能力のキャンセルだと思う」

「ああ、そうかそうか。じゃ切れよ?!」

「え、切るの。転移を妨害しないとイケないんじゃないの?」

「転移しないと相手に会いに行けないだろうが!」

「そうなんだ。でもさ、会いたいっていうなら向こうから来るのが筋じゃないかなって思うんだよね。」

会いたいから来いって、傲慢な考えじゃないかなって思うわけだよ。

『貴様も少しは解ってきたようだな。王への謁見に、『来い』などは』ってギルさんが凄いい笑顔で笑っている。

あれ、来いってことは、あれかな。罨とか張つてるとかじゃないよね。

よっしここは乖離剣を出して、と。

『は?』ってギルさん、どうしたの。

「浩介、何を出しているんだ?」

もう一本は流刃若火を。

「え? 待て待て待て!」

『無双か』っておじいちゃん、そんなに危ないことしないよ。

「健、僕は思うんだけどさ。会いたいなら、向こうから来るべきじゃないかな？」

「い、いや、ほらあつちは組織の人だし。待った、そうだよな」

「だから完全装備で！」

鎧展開、マント着用。よっし、『王の財宝』は訓練したから使えるし、眷獣もレグルスならすぐに出てきてくれるから。他は呼び出せば、暴れてくれるだろうし。

『おまえ、そんな危ない考えでいたのかよ』って古城さんが、なんか引いているけど、レグルス以外は訓練してないので使えるか解らないから。

『次は俺も本気で鍛えよう』って古城さんが気合を入れてる。次の訓練が楽しみだなあ。

「準備できたよ健！」

さあ、いざだ！

「俺、やり方を間違えたかもしれない」

どうしたのさ、健。さあ、行こう。

リンデイ・ハラオウンは、冷や汗を流していた。

「囲まれています！ 転位できません！」

「動力炉を抑え込まれました！」

「ハッキングです！ 艦の制御を奪われました！」

次々に上がってくる報告に、小さく息を吐いて気持ちを整える。

「艦長」

後ろからの声に小さく視線を向ければ、息子のクロノが決意した顔で立っていた。

「僕が出ます、その間に」

「無理よ。転送ポートは抑え込まれている。ハッチさえ開かないのよ」

「魔法なら」

「そうね、魔法が使えるなら」

拳を握りしめ、声を絞り出す。

魔法が使えたなら、こんなに追い込まれることはないかもしれない。けれど、今の自分達には魔法が使えない。

デバイスを開始しようにも、デバイスのコアが封じられている。インテリジェンス・デバイスなら、人格があるから抑え込まれても仕方がないかもしれないが、あらゆるデバイスが制御不能となって使用できずにいる。

艦の制御、デバイスの制御、機械関係のすべてを抑え込まれた現在、こちらからうてる手段はほとんどない。

「お話をうかがってもいいかしら？」

『私達の要求は一つです。とてもシンプルなものです』

画面に映る栗色の髪の女性は、リンデイを見下すように見つめていた。

『貴方達の地球からの撤退。以後の干渉しないことを』

「それだけでいいの？」

『ええ、時空管理局にそれ以上は望みません』

こちらの所属を知っている。相手は管理外世界なのに。まさか、こちらの世界の誰かが流れついて、時空管理局についての情報を流したのか、それとも子孫か何かで対応を計画していたか。

いずれにしても、数年単位で出来ることではない。

「艦長、相手の総数、十万を超えました」

報告を受けてリンデイの中で、疑いだったものが確信に変わる。

相手は確実に時空管理局へ対抗しようとしている。魔法技術はもちろん、それ以外の何かも。

艦の周囲を映した画像には、見知らぬ生物の姿もある。科学以外にもこんな生物を飼いなすなんて、相手の技術力の高さに寒気がしてきた。

解りました、と答えるしかない。

彼女が決意して口を開こうとした瞬間。

「ほらできたよ」

「なんでおまえはそれが普通にできるんだよ!? あれか!? それもどつから持ってきたやつだ?!」

「え、テレポート」

「魔法でさえないってことかよ?!」

いきなり背後がうるさくなって振り返ると、ジュエル・シードを持っていた少年がいた。

そしてもう一人。見ただけで寒気が来るような気配、身に纏う鎧の神秘に『ロストロギア』以上の何かだと推察できる。

けれど、見た目は何処にでもいる普通の少年。

「貴方は?」

「初めまして！ 佐藤・浩介です！ 健から呼ばれているって言われてきました！」

元氣よく片手をあげて挨拶する仕草は、普通の小学生のもの。何処からどう見てもそうなのに、纏っている気配が人間じゃないような。

『マスター?!』

「あれ、ラキシスさん、どうしてここに？ あれえ、僕はきちんと言つて言つたよ」

『そ、それは、ですね』

毅然とした態度でいた相手が崩れた。チャンスか、とリンディは考えて口を開きかけた時、事態は予想外の方向へ飛んで行った。

「……は?! これがラスボスなんだね?!」

「浩介！ 落ち着け！ そんなことしなくていいからな！」

『マスター、速やかに退避を。彼女達は時空管理局と言つて』

「大丈夫だから！ 浩介には触れさせないから大丈夫だからさ！」

『え、あの、いくらマスターの友人の言葉とはいえ、それを信じられるほど』

「お願いしますから！ 穩便に行きましょうよ！」

何故だろう、必死に頭を下げる小学生と、それに困惑して周囲を見回す、先ほどまで冷徹な顔をした女性、それらを交互に見つめた後、浩介と名乗った少年は軽く手を打つ

た。

「あ！ ラキシスさん、ジュエル・シードってどうやって集めたのか、健に教えてあげて。それでリンデイさんに教えれば解決だよね」

『えっと、その・・・あのですね！』

チャンスか。リンデイがそう考えて、動こうとして時間が止まった。

あれ、どうしたのかな、皆、固まったけど。

「このたびはどうも」

「どうもです」

あ、女神様が土下座して登場した。

「どうしたんですか？」

「え、あの、ですね」

女神様、なんだか慌てているような、どうしたのかな。ひよつとして僕が危ないようだったから、助けに来てくれたのかな。

まつさかあ。

「その通りです！ 浩介君、私が出来たから大船に乗ったつもりでいてくださいね！ 女神ですから、誰がどんなこととしてきても、何とかしますから」

「ありがとうございます！ でも僕も立派な男として！ 自分の危機は自分で何とかしますから！」

「ええ?! そんな、せっかく、浩介君の前でかっこよく決めて好きになつてもらおう計画が」

なんだろう、女神様が何か言つたけど、よく聞こえなかつた。あ、もしかしてでも心配だからって意味かな。

「大丈夫です女神様！ 解つてますから！」

「解つてる?! そ、そんな、私の気持ちに気づいてたんですね」

「はいもちろんです！」

心配してくれるなんて、優しい女神様だな。でも、ここで甘えてしまつたら、僕は立

派な大人になれないから。

「で、では！」

「でも今は駄目です！ 僕はもつと立派な男にならないといけないので！」

ジョーカー星団なんてものを貰ったからには、もつと凄い人物にならないとだめだと思ふ。ギルさん達に教えてもらったから、色々な特典を貰ったから、その特典を持っていた人たちのことを考えたら、僕はまだまだ弱くて小さいから。

だからもつと頑張つて、もつと努力して。

立派なラスボスにならないと！

「だから女神様！ ここは退いてください。後で必ず行きますから！」

立派な僕になってどうですか？ 示すために！

「行きます?! そ、それはお嫁にしてくれるっていう。そうですか、そうなんですか。解りました浩介君！ 待ってますから！」

「はい！」

「お願いしますね！」

そして女神様は帰りました。

あれ、なんだろう、勘違いされているような気がするけど、大丈夫だよ。

よっし、じゃあ時間停止解除、つと。

「フンフンフンフウン」

「ご機嫌ですね、女神様」

「ええ！ 浩介君がお嫁にしてくれるって」

「………え？」

「ああもう！ こんなにうれしいことなんですネ！」

「あの女神様、知らないってことないですよネ？」

「はい？」

「いや人間と女神って結婚できませんよ」

「え？」

「いやだって存在自体が違うじゃないですか。普通の恋愛とかならいいですけど、結

婚って無理でしょう」

「な、何とかかなりますよね?!」

「いや女神様、戸籍ないでしょう？ どうするんですか？」

「.....」

「女神様?! 誰か医療系の女神様を呼んできて?!」

「そんな単純なことも気づかないなんて、本当に浩介君関連だとポンコツだなあ」

「.....その浩介君なんだけど、『時間操作能力』持っているんだけど。転生特典じゃなく女神様と同じ能力の」

「本当にうちの女神様、ポンコツだなあ」

神様の世界は、今日はほのぼのと溜息に満ちていました。

というわけです。

「ジュエル・シールドは私たちが危ないので集めたので」

場所はアースラ？　ってリンデイさんの御船の中の艦長室に移りました。

それで、ラキシスさんが説明中です。

「ありがとうございます。おかげで世界が救われました」

「いいえ。ここは私達の世界なので」

キリっとしたラキシスさん、かつこいいいなあ。大人ってこういうのを言うんだろうな。

「マスター」

あれふにやつてなった。うん、何時ものラキシスさんだ。

「ところで、そちらの浩介君が貴方達の？」

「はい、私達の主です」

「そう。ねえ、貴方、時空管理局に」

「ごめんなさい」

それは無理だなあ。

「即答だったわね。どうしてか教えてもらっていいかしら？」

「僕が一組織に所属すると、世界の調和などが崩れるか、その組織の上層部が勘違いして権力闘争が起きますので」

危ないからダメって、ギルさん達に止められているし。

所属することになったら、暴れてでも逃げろとも言われているからね。

『いや、貴様が組織に所属したら、その組織を乗っ取りそうだな』とかギルさん、失礼な。僕はそんなに節操なしじゃないです。

『おまえ、今までの自分を振り返ってもそんなことがいえるか』なんて、古城さんは失礼じゃないですか。ところで、節操ってなんだろう？

『ほっほっほ、一件落着．．．としておこうかの』っておじいさんは気楽だなあ。

「貴方は子供なのに、そこまで考えているのね、偉いわ」
「ラスボスを目指しているのぞ！」

あれ、リンディさんは固まった。あのクロノ？　って人も固まっている。健まで呆れた顔で頭を抱えているし。

そっか、今の僕じゃ『身の丈に合わない』って奴だね。よおおし、今日からギルさん達に頼んで、訓練をもっときつくしてもらおうと。

頑張る。

『フ、その意気だけは認めてやろう』、『ほどほどにな』、『よかろう』ってギルさん、古

城さん、おじいさんは言ってくれました。

右手に『エア』、左手に『流刃若火』、レグルスを纏って姿が出来るようにならないと！

あれ、ギルさん達が崩れ落ちたよ、どうして？

その後、リンデイさん達とは『基本的に不干涉、でも危ない時は相談しようね』ってことになりました。

「じゃ戻りますねえ〜」

よっし、テレポート。あれ、なんだか引つ張られるような、そっちに行かないといけないような。

「え？」

「な?!」

「あ、どうもこんにちは！ 僕は佐藤・浩介です！」

そんなわけでテレポートしてみたら、目の前に金髪の女の子と女の人がありました。
あ、尻尾ある。

佐藤・浩介、『目』の作用によりテレポート先を変更。
フェイト・テスタロッサとアルフへの遭遇。
エンカウント。

困っている子は放っておけないよ、リーナさん

皆さん大変です、佐藤・浩介です。

「フエイト逃げるよ！」

「うん！」

なんだか、引つ張られてレポートしたら女の子と女の人から、攻撃されました。あれえ〜最近ではレポートして敵の前に立って、『ふっふっふ、何処を見ている』が主流なのでは？

『貴様あああ!!』とかギルさんが怒っています、どうしたのか解りません。だってなんだか、『こつち行け』って天啓があったのですから。

『こいつ、自然と『目』を使いやがったぞ』とか、古城さんは何を言っているのやら。何時までも三人にお世話になっている僕ではないのだ！

「時空管理局の魔導師風情が！」

「あ、そこは僕とは関係ないので」

ラキシスさんが色々とお話していたけど、関係ない気がします。

お互いに不干渉なら関係ないであっている、かな。

「じゃあなんだい?! フェイト行こう！」

「うん、ごめんささい」

あ、魔法だ。これが魔法、魔法？

あれなんだろ、僕の中の魔法と違っているような、あっているような。

「通じてない？」

「フェイトの攻撃だよ?! なんて硬い防御なんだい！」

「それなら」

また魔法の攻撃が来しました。でも、あの杖いいな。なんだか音声で答えているみたいだけど、僕は英語ができないので解りません。

『……………』ギルさん、なんで白目をむいているのかな。

『いやマジかおまえ、本当にマジか』って古城さん、失礼な。

『むう』っておじいさんまで。僕は英語なんて話せないよ。

「フォトン・ランサー、ファランクス・シフト」

あ、女の子の魔力が高まった。これは来るってことかな。

よし彼女も本気なら僕も本気でやろう。

まずは鎧を。

「ちよつと、人のマスターに何してるのよ？」

あ、リーナさんだ。

「見過ごせませんね」

深雪さんまで来てくれた。あれ、でもこれっていじめにならないかな。

「二人とも！ 僕のターンだからやめて！」

三人で二人を囲むなんていじめだと思います！

だから僕に任せて。

「いやマスターが出たら、不味いから」

「ええ、確実にいじめになりますね」

「どういうこと?! 一対二だからいじめにならないと思います！」

あれ、なんでか二人が『え』って顔しているよ。

『貴様はいいかげん、自分のことを理解せよ』ってギルさん、復活してくれたんだね。

じゃあ、武器をブツパで行こうかな。

『止めぬか貴様あ！』って叫んでも、遅いのです。

「ちよ?!」

「マスター」

あれえ、なんでか武器が外れたけど。きちんと狙ったのに、僕はまだまだギルさんの宝物庫みたいにできないようです。

『よくやった! よくやったギル!』つて古城さん、何を喜んでいるのさ。『見事じゃ、さすが英雄王』つておじいさんまで。

『亜光速ではなく光速だとお』つてギルさん、凄く消耗している。何があつたのかな。『あゝゝゝねえ、そつちの二人、マスターと戦うのと私たちに捕まるの、どつちがいい?』脅迫したいなら素直にそう言いな!」

「ですよねゝゝ」

ム、リーナさん、なんで呆れているのかな。深雪さんも、その納得の仕方はちよつと怒りたい。

「仕方ないよ、アルフ。ここで何かがあつたら、母さんが悲しむから」

「フェイトお」

「投降します」

両手を上げたフェイトちゃんに、僕は両腕を組んで答えて見た。

「ウム!! 我が城へ招待しよう!」

よつし決まった。

「ま、マスターが」

あれ、リーナさん、どうしたの？

「あのマスターが」

深雪さん、なんで泣きそうな顔しているのさ。

「初めて『朱塔玉座』を我が城って言った！」

「え？」

あれ、なんだろう、なんだかすごく感動しているけど、そんなに言いこと言ったかな。

その城はまさに白亜。

巨大な島の上に立つ巨大な純白の城。

並び立つ騎士たちは、機械なのに魔力を感じて、巨大な生命を持つ怪獣たちがゆつくりと頭を垂れる。

機械の騎士と巨大な兵士、屈強な戦士たち、天かける戦船、数多の異形が護る道の真ん中をフェイトの前を歩く少年が進んで行った。

「ただいまラキシスさん！」

「お帰りなさいませ、我がマスター。ミラーージュ騎士団一同、心よりお待ち申し上げていました」

白きドレスを纏う女性が、恭しく頭を下げた。

フェイトから見ても実力はかなり高い、自分なんて足元にも及ばない力を持ちながらも、彼女は迷いなく目の前の少年に忠誠を示す。

怖いと初めて思った。勝てない相手は何度も見てきた、負けると思ったこともかなりあったのに。

『死ぬ』と思った相手は初めてだから。

ゆつくりと彼が振り返る、年相応な顔に笑顔を浮かべた彼は両手を大きく広げた。

「ようこそ！ 僕の朱塔玉座へ！」

彼、佐藤・浩介と名乗った『王』は嬉しそうに告げたのだが、フェイトにはまったく

別の姿に見えた。

闇のようにすべてを飲み込み、輝きのように人を魅了し屈服させる、そんな巨大な『何か』に。

フェイトちゃんとアルフさんをお城へご招待。

「ううう、長かった長かったです」

初めてのお客様です。

なのはちゃん達は、なんか突発的に招いたから、例外としておこう。

「本当に長かった、この日が来るのを待っていたのよ」

それに家族みたいなものだからね。あれ、でもアリサちゃんとすずかちゃん家は家族みたいなもの、じゃないような。

まあ、いつか。

「苦節と言つてもおかしくないほど、長かった時間が終わりました」

それにしても、なんで泣いているのかな。

「私は嬉しい。本当に喜んでる」

あれ、なんで四人とも泣いているのかな。

「マスター！　ここは何処ですか!?!」

「何を言っているのさ、ラキシスさん。朱塔玉座でしょ?」

「はい！　そしてここは誰の城ですか?!」

「え、僕じゃないの。だってラキシスさんがそう言っているから」

なんだろう、何かあったのかな。

ハ?!　まさか、本当の持ち主が帰ってきたから、返せつて言うのかな。うん、そうならあの家だけでも貰いたいな。

「はいありがとうございます！　私達はこれからもマスターについていきますから!」

「あ、うん、ありがとう」

怖かった、なんだか泣きながら掴みかかっていたラキシスさんが、とても怖かったで

す。

「それで！」

あ、ラキシスさんがフェイトちゃん達に顔を向けたら、なんだか怯えた顔になったんだだけ。

「お二人は何か探していたんですか？ どういった要件でこうなったのか。あるいは望みがあれば言ってください。マスターに『我が城』って認めさせた御二人ですから、ご要望は叶えますよ？」

「え、あの、その」

「さあ!!」

ラキシスさん、顔が怖い。なんだか二人に迫る雰囲気がとても怖いです。

あれが噂に名高い『鬼気迫る』って顔なんだ。

「わ、私達はジュエル・シードを探して」

「フェイト、言うしかないよ。もう全部、言うしかないって」

「うん、ごめん母さん。それで」

ジュエル・シード。それって健に上げた奴じゃないかな。そっか、フェイトちゃん達もそれを探していたんだ。

あ、ラキシスさんが無言で振り返った。

「マスター、ちょっと時空管理局を滅ぼしてきますね」

「え？」

「リーナさん、深雪さん、イオナさん。準備してください。殲滅戦です」

待って、ラキシスさん、なんでそんな真顔で冗談を言うかな。

「そうね、仕方ないわね」

「この功績に見合うのはこれくらいでしょうから」

「当然の話」

あれ、なんだろう、なんで四人ともやる気なのかな。

「作戦目標はジュエル・シード。他はすべて灰燼とします」

「ちよつと待とうかラキシスさん！」

「止めないでください、マスター。今はジュエル・シードが必要なんです」

「いやだってあれは健に上げたものだから」

「ですから奪還します」

「いや暴力反対です！」

「ちよつと行って組織をぶつ壊すだけですから！」

「危ないこと禁止だと思えます！ 戦争反対！」

『いやおまえが言うな』ってギルさん、今はそんな冗談に構っている暇ないので！

『おまえほどじゃない』って古城さんまでのらないで！

『まずは殴る、それからじゃな』っておじいさん、それは最後の手段だと御思います。

あれ、三人がとても呆れた目で見ているけど、僕はそんなに単細胞じゃないから。

ム！ 何処かで誰かが言っている気がする。

『しゅにまじわれればあかくなる』？ なにそれ。

「え、なにこれ、どうしたのこれ？」

「女神様、何かありましたか？」

「浩介君のところの四人がおかしいのだけけれど」

「……あれ、創造神様が何かしたんじゃないですか？」

「もう復活したのあのじい！ でも、こんなこととして喜ぶ神じゃないでしょう。どう

したのかな」

「いや女神様、元々『浩介』がこんな感じじゃないですか」

「ああ！ 違うわよ、浩介君はもつと穩便に」

ポチ！

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・女神様？」

「ちよつと土下座に行つてきます」

「いやなにしたの、あんた」

ちよつと嬉しそうにスキップしながら歩きだした女神に、天使はため息交じりに告げたのでした。

「皆さん！」

あ、女神様だ。

「このたびは本当に申し訳ありませんでした！」

「今度は何をした駄女神」

「いきなりのアイアンクローはないでしょうラキシスさん！」

「おまえに『さん付け』を許した覚えはない」

あゝ容赦ないなあ、ラキシスさん。

「で、何したのよ」

リーナさんが、ラキシスさんを蹴とばした。うん、酷いって思えない僕って冷たい奴なのかな。

「はい、今回は、その『投影』を」

「普通ね。でも、普通じゃないんですよ」

「はい、実は『エミヤ』の投影魔術を応用発展進化させたもので」

「で？」

「はつきりいってコピーです」

あ、リーナさんが女神様を蹴とばした。

「つぶしなさいリーナ！ 私が許します！」

「私もやりたい」

「あんたって駄女神はあ！ コピーって何よコピーって！」

「ごめんなさい！ あ、正確には完全コピーの無制限つてものですから」

「余計に悪いじゃないの！」

「それと、後はその派生で『因果改編』が」

なんだろう、空気が固まった気がするけど。

「……あんたそれ、神様じゃないの？」

「げ、限定的ですから」

「あんたまさか、こつそり創造神の力をマスターに入れてないでしょうね？」

リーナさんが怖い顔で女神様に詰め寄ると。

「てへ」

あ、可愛い。

「あんたを殺して神様を滅ぼしてやるわよ！」

「私もやりますから！」

ラキシスさん、参戦つと。

あつちの乱闘騒ぎはこのままでいいかな。

「それでフェイトちゃん、ジュエル・シードを使って何をするの？」

「え、あの、あつちはいいの？」

「いいの！ 何がしたいの？」

放っておこう、僕の第六感がそう叫んでいる気がする。

そう思いました！

「アリシアを助けてほしいの」

ちよつと泣きそうな顔のフェイトちゃんに、僕は。

「初めまして、浩介です」

「へ？」

「あ、母さん、浩介がね」

「え？」

「はい、これでアリシアは大丈夫」

「ありがとうございます！」

「ついでにお母さんの病気も治しておくね」

「母さん、病気だったの」

「え、あ、え？」

「じゃあねえ〜」

そう告げて姿を消した浩介に、手を振るフェイトと、なんだか疲れた顔で座り込むアルフ。

「ねえ、リニス、私は夢を見ているのかしら？」

「間違いなく現実ですよ、プレシア」

「そうね」

いきなりの展開に呆けてしまうプレシアと、その姿を見て冷静になれたりニスだった。

テスタロツサ家の問題はこれで解決、めでたしめでたし。

「よくない!!」

病気が治って回復したアリシアは、開口一番に叫んでいた。

「私は裸だったのに!!」

その瞬間、母親の殺気が膨れ上がったという。

「浩介君！ 女の子の裸を見たら責任をとるべきなの!!」

「なのはちゃんの意地悪!! 僕がお風呂に入っているとところに突撃してくる君の言うことなんて聞いてやらない!」

「なのはなにしてんのよ?!」

「なのはちゃん!!」

「なんでアリサちゃんとすずかちゃんまで突撃してくるの?!」

その日、浩介は思う。

今後、高町家にお泊りするのには止めようと。

「恭也さん！ 土郎さん！ お宅の娘さんのじょうそうきよういく？ はしつかりしたほうがいいと思います!」

「どうした浩介、いいや義弟」

「何かあったかい、浩介君。いや義理の我が息子よ」

「なんで言いなおしたか解りません! 今日帰ります!」

お泊りに来ればなんて誘いに乗った自分の愚かさを、浩介は嘸みしめながらレッド・ミラーージュで朱塔玉座に戻る、浩介でした。

言ってる意味が解らなかつたんだよ、深雪さん

魔王とは、何時から魔王なのか。

そもそも魔王とは何者か。魔王軍を率いるから魔王なのか、それとも魔族の頂点だから魔王なのか。

いや違う、魔法を使い絶対的な強さを示すから魔王と呼ばれる。

別世界で彼女は『管理局の白い魔王』って呼ばれていた、かもしれない。悪魔かもしれない。きつと悪魔だ、いや待った。あの容赦ない攻撃で悪魔なんて優しい呼ばれ方しない。

結論、高町・なのはという少女は『白い魔王』って呼ばれるようだ。

きつと、そうだろう。

どうも、佐藤・浩介です。

「いたわね!!」

学校が終わって帰ろうとしたら、なんでかプレシアさんに捕まりました。

「あれくくどうしたんですか?」

「どうしたんですか、じゃないわよ! 貴方、解っていてやったのね?」

「え?」

何の話だろう、意味が解りません。解っていてやったなんて、そんなことないと思い

たいけど。

僕はそんなにひどい人間じゃない！

『ギル！ ギルガメツシユ！ 戻って来い！ おまえが死んだら！』とか、古城さんがうるさいな。

ギルさんもなんで魂が抜けたような顔しているんだろう。魂だけ、それって楽しいのかな、王様流のお遊戯だったりして。

「いいから来なさい！」

あれ、プレシアさんに手を引つ張られて、連れて行かれます。

「こーすけ君！ その人は誰なの?!」

「なのはちゃん、プレシアさんだよ」

「誰なの?! アリサちゃん、すずかちゃん、非常事態なの！」

あれ、なのはちゃんが携帯で連絡しているけど。

「な、なんでプレシアが？ あれ、ジュエル・シードの時にフェイトがいなかったような」「健うくくちよつと行ってくるね」

「待て！ おまえ何した?!」

ええ、健まで僕が何かしたって思っているなんて。そんなことないよ、僕が何かしたなんてそんなこと。

というわけで、プレシアさんに引つ張られて公園に連れ込まれました。

「あの、プレシアさん」

え、なんでか睨まれた。僕は何かしたのかな、フェイトちゃんに何かした覚えはないし。

あれ、ギルさん達が固まっている。なんでだろう、僕的には何もしてないのに、どうして『信じられない』って顔して固まっているのかな。

「まずは私の病気を治してくれてありがとう、お礼を言うわ」

「はいお礼を貰いました」

「それとアリシアのこともありがとう。なんてお礼したらいいか」

「大丈夫です、家族仲良く過ごしてくれたら十分です」

うん、本当に家族なら仲良く過ごしてほしいな。フェイトちゃんの家はお父さんがいないみたいだけど、お母さんのプレシアさんはいるからさ。

僕の家みたいに両親が亡くなって、子供一人で生きていくなんて。

あれ、でも僕はラキシスさん達がいるから、一人で生きていくわけじゃないよね。あれ、ひよつとして僕はかなり幸運なのかな。

たぶんそうだよね。

天国のお父さん、お母さん、浩介は幸せに生きています。

「でもね」

あ、プレシアさんが怒っている。え、ここから何かあったの、もしかして時空管理局が何かしたとか、アリシアの病気が治りきらなかったとか。

おかしいな、きちんと『目』で見て病気だけ『殺した』はずなんだけどなあ。使ったことない能力だから、上手く出来なかったとか。

「見たでしよ？」

「え？」

「だから!! 娘の裸を見たでしよ?!」

え、誰の裸、なのはちちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんなら、この前にお風呂に突撃されて見たことあるけど、あれはふかこうりよく? って奴なので大丈夫だって言われたから。

ラキシスさん達に!

「娘のよ!! アリシアの!!」

「.....ああ!」

「思い出したようね! 貴方は!」

「培養液と光の加減で見えませんでした!」

「.....へ?」

「だから大丈夫だと思えます！ きちんと『目』を使って内臓しか見てないから！」

あれ、プレシアさんが固まった。

どうしたのかな？

「離して！ 離してえええ!!」

「何してんですか女神様！ どうして服を脱ごうとしているんですか?!」

「浩介君が！ 浩介君が汚されるの！ 黙って見てられないじゃない！」

「だからってあんたが服を脱いでどうするんだよ?!」

「私の素晴らしい裸体で浩介君を浄化しないと！」

「浄化ってなんだよ浄化って！ そんなことしたら人間の世界が、ハルマゲドンでしようが！」

「え!? わ、私の裸ってそんなに危険物扱いなの?」

「いやそうじゃなくてですね、女神様」

「私ってそんなに醜いの?」

女神様、ガチ泣き入りました。

「はいはい、綺麗で素晴らしい黄金比率ですよ」

「うう、本当?」

「はいはい、でも女神様」

「ふえ?」

「貴方達の服って抑制装置も兼ねているから、それを脱いで人間の世界にいったら、一瞬で文明が滅びるって忘れてません?」

「あ」

天使の呆れた顔に、女神様は固まった。

セーフ！ 最終戦争回避！

「こーすけ君？」

「ヒ?!」

あれ、なのはちゃんだ。アリサちゃんとすずかちゃんもいる。あれ、なんでバリア・ジャケツト装備？

プレシアさんも、変な声出して僕の後ろに隠れるし。

「今のお話、何かなあ？」

「お話？ プレシアさんの娘さんを助けたって話？」

「そこじゃなくてよ！」

どうして、アリサちゃんは怒っているのかな。手に持った剣で、今にも僕を刺しそうになっっているんだけど。

『おい、眷獣が反応してるぞ、抑えろ』って古城さんが言うけど、これってアリサちゃんに反応しているんじゃないような。

「フフフフ」

なんか、すずかちゃんが真つ黒な影を背負っています。はつきり言つて、なのはちやんとアリサちゃんより、今のすずかちゃんのほうが怖いです。

『聖杯の泥か。最近の雑種は、それが標準装備なのか?』なんて、ギルさんが頭を抑えています。なんだろう、背中が微妙にすすけているような気がします。

すすけているって解らないけど。

「コーすけ君!　なのはというものがあいながら他の女の子の裸を見たって、どういふことなの?」

「え、そんなことないよ」

「嘘つかないで!　さつきのお話を聞いていたの!」

さつきのお話つて、プレシアさんの娘さんの裸がどうのこうのうつてお話だよ。あれつて勘違いで終わっているはずなんだけど。

「勘違いだよ」

「勘違いでお母さんが怒らないの!」

「そうよ!　コースケ!　あんた私達の裸を見たのにどういふこと?」

「浮気は駄目だよコーすけ君!」

アリサちゃん、裸を見たつて。あれは見せたつて言うんじゃないかな。

「すずかちゃんも、浮気って何にさ。」

「誤解です!」

でも怒っているみたいだから、先に誤解って言っておかないと。

「五階も六階もないの!」

「なのはちゃん! 階のことじゃないから! 間違いつて意味だよ!」

「そんなのは知っているの?!」

「知っているならなんでそう返したの?!」

「こーすけ君が意地悪だからなの!」

「なんで僕が意地悪なのさ?!」

意味が解らないよ、なんでなのはちゃん達に怒られているのさ、僕が何をしたつてい
うんだ。

「何時も何時もなのはが言っているのに聞いてくれないし!」

「聞いているよちゃんと!」

「聞いていないの! 私は何度も言っているのに!」

「だから何を?!」

まったくなのはちゃんは、何を何度も言っているって言うんだらう。

同じことを繰り返すことなんて、なのはちゃんはしてない気がするけど。

「もういいの！　こーすけ君！　大好きです愛してます！」

「なのはちゃん嘘つき!!　そんなこと言っても騙されないからね！」

またそんなバカなこと言つて！

僕の純情を裏切るつもりなんだ、何時だつてなのはちゃんはそんなことを言うけど、そんな態度なんてしたことないじゃないか。

幼馴染をその気にさせて、『勘違いしないで』なんていうつもりなんでしようけど、僕には通じないからね。

「本気なの！　こーすけ君が好きなの！　愛してるの！」

「絶対に騙されないよ！　なのはちゃんは自分が可愛いからって、男にそう言えば解つたつて言うと思つているんだから」

まったくそんなことは絶対ないから。

あれ、なのはちゃんが蹲つているけど、何かあつたかな。

「コースケあんた」

アリサちゃん、その顔は何さ。

「こーすけ君、私だつてこーすけ君のこと好きだからね」

「すずかちゃんまでなのはちゃんと同じことで、男を騙そうとするんだね。でも、ダメだからね。すずかちゃんみたいな可愛い子が僕のことを好きなんて、そんなこと絶対にな

いからね」

あれ、今度はすずかちゃんが蹲った。

「コースケ!! ちよつとこつち来なさい!」

なんでだろう、アリサちゃんが剣を振り回して、炎が出たよ。

「危ないじゃないか! 肌が綺麗なんだからそんなやけどすることしないの! 自分が

可愛い自覚があるのアリサちゃん?!」

「ク、これは凄まじい威力ね」

なにそれ、まだ何もしてないんだけど。

「貴方、その年でスケコマ師なのね」

「プレシアさん、何を言っているか解らないけど、僕を馬鹿にしているのは解りました」

まったく、女の人は魔性だって本当だね。

場所は変わって、フロート・テンプル。

「そういうえば、マスターってなんであんなに異性からの感情に鈍感なの？」

騎士団の再編成中のリーナは、ふと思いついたようにラキシスに訪ねた。

「そうですね、原因は」

ラキシス、映像端末を操作してモニターを起動させる。そこに映っていたのは三歳か四歳くらいの子と、高町・なのは。

『こーすけ君、大好き。愛しているの』

『え、そうなんだ』

『うん！』

笑顔全開で告白するのはと、ちよつと照れてそうな浩介。初々しい映像が流れた後、リーナは口を開く。

「へえ〜こんな時代があったんだ。あれ、でもあの二人って付き合っていないわよね？」

「はい」

何故か、ラキシスはちよつと顔色が悪い。

「昔のマスターの映像ですか？」

「何かあった？」

そこへ深雪とイオナが合流し、映像は次々に流れる。

最初は微笑ましく見ていた全員だったが、次第に呆れた顔になり、やがて誰もが俯いてしまう。

「何の映像ですか、これ？」

深雪が絞り出すように告げると、ラキシスが盛大に溜息をついた。

「好きって言葉を知っている子供だけど、付き合うってことを解つてない子供だったから、挨拶のように『好き』を重ねるのがいいって思ったんでしょね」

苦笑しているラキシスの隣、リーナは盛大に溜息をついた。

「それにしても、限度があるでしょうが」

会うたびに、すれ違うたびに、高町・なのはが佐藤・浩介に好きと伝え続けていた。

恥ずかしそうに、毎回毎回、とても初々しい様子で伝える愛の言葉は、幼い子供ながらに真剣なものだったかもしれない。

最初は冷やかしていた友達も、次第にその回数が増なっていくと赤面したり、ちよつと困った顔になって。

小学校に入った時にはすでに周りが、『おまえ大丈夫か』というほどになってしまつて

いた。

「ああ、だからマスターはなのはの告白にああ返すのね」

「不可解だったけど、理解した。マスター、不憫」

リーナが納得したように溜息をこぼし、イオナはそつとハンカチを取り出すも、涙は流れない。ポーズのみとか器用なことをする。

つまり、佐藤・浩介が異性の好意に鈍感なのは、幼い頃からずっとそんな教育を、本人は意図していなくともずっと続けていた彼女が原因。

つまり、『高町・なのはが悪い』ということか。

「あれ待って。それって振られているのよね？」

リーナが思いついたことを口にして。

「どっちがどちらを、ということになりますか、そうではないですか？」

深雪も同じことを思いついて、リーナに追従した。

「……高町・なのはの中では『好きと告白した、通ったのに』ってことになって
いるようです」

ラキリス、とても苦い顔で答えた。

「はあ?!」

「え、そうなんですか？」

「あり得ない」

リーナ、深雪、イオナ驚愕。

あんなに拒絶されていても、まだ諦めていないのは、彼女がそうだと思ってるから。思い込んだら一直線、絶対に振り返らない、諦めるなんて言葉は彼女の中に存在しない。不屈の魂を持った魔法少女は、相手に拒絶されても止まることなくずっと挨拶のように『好き』を繰り返していた。

それが却って相手にマイナス・イメージを与えていると気づかず。

「ま、周りは教えないの?」

信じられないとリーナが顔に張りつかせて映像を指差す。そこにはさすがとアリサが映っていた。

「今日も愛の告白一直線だなあって」

「見護るものではないでしょうに」

ラキシスの嘆息の答えに、深雪も呆れたように告げた。

「それってドツボ?」

「はい」

イオナが首を傾げながら思いついたことに、ラキシスは頷いた。

何度も繰り返されたことに、何度も返している間に、浩介の異性の好意に鈍感な深み

と厚みを増していき。

結果、こうなつてしまった、と。

つまり、やはり『高町・なのは』が悪い。

「あれ、でもそんなマスターってひよつとして直球の直球に弱いんじゃないの？」
リーナが思いついたように告げると、誰もが疑問を浮かべていた。

「例えば」

彼女が口にしたことは、全員が否定したのですけれど。

世の中って何があるか解らないから、楽しいって言いませんかね。

もうなのはちゃんは！

昔っからそうやって人を騙そうとするのに、本気だよとか言うから。

「もうきかないからね！」

「こーすけ君！」

まったく、今日はそんなことに付き合ってもらえないから。

「プレシアさん、もういいですか？」

「ええ、そうね。ごめんなさいね」

「大丈夫です」

よっし、帰って今日は。

「サトー・コースケ!!」

あれ、誰か転移してきた。一人はフェイトちゃんだけど、もう一人は。

え？

「私の裸を見たなら責任を取って！」

「はい？」

あれ、アリシアちゃんだ。なにそれ、そのフワフワの白いドレスってどうしたの？

『いやあれはウエディング・ドレスじゃないか』、古城さん物知りだ。

あれ、それって。

「お嫁さんにしてもらうからね！」

「え？」

いきなりそんなこと言ってきたアリシアちゃんが、僕に突撃してきて。
チユ。

「……………あああああああ!!!」

「えええええ?!」

「ふえええええ?!」

「何してるのアリシア?!」

「ちよつとアリシア!!」

あれえ〜なんだろ、何か柔らかかないものが触れたような、触れなかったような。アリシアちゃんが、突撃してきて。で、僕の目の前にいて真っ赤な顔していて。

「ふつつかものですが、よろしくしてあげるからね」

ウインクしているアリシアちゃんに、僕は。

『雑種！ 意識を失うではないわ!』。

『待て待ておまえ！ 気絶するな！ 逃げるな!』。

『最近の娘っ子は過激じゃのう。』。

あ、キスされたのか、そっか。

「間に合わなかつたあああ!!」

健の声がする、じゃあ後は任せて大丈夫だ!

止めないでイオナさん、王様が教えてくれたから

現世が色々と大混乱の中、天界も色々と大混乱中でした。

「離してええええ!!」

「天使は全員総動員! 他の女神も呼んで来い!」

「落ち着いてください! 本当に何しようとしてんですか?!」

「あの女狐に天罰を!」

「だからって最終戦争発動ってなんですかそれ?!」

「ご乱心! 第一級女神がご乱心です!」

「誰でもいいから何とかして!」

もう阿鼻叫喚の大騒ぎ、ひよっとしてここが地獄じゃないかと、誰もが疑うような光

景が広がっていました。

「フオフオツフオツフオ」

「創造神様?!」

「復活したのじじい!」

「口が悪くなつたのう、女神よ。さて、面白いことになつとるのう」

「まさか?! 貴方がまた浩介君に何かしたの?!」

「フ」

ニヤリと笑う創造神、その笑みはまさに魔王のようで。

誰もが『やったなこいつ』と思つていると。

創造神、両手両膝をついて倒れたのでした。

「ううううう、まさかのう。本当にまさかじゃった」

「え? え?」

「まさか嚴重に封印しておつたあれを持つて行かれるとは」

「はい?」

「しかしじゃ! 見てみたい気持ちもある! リアル・ハーレム主人公を見てみたい気

持ちもあるのじゃ!」

「……誰か、こいつ殺していいわよ」

「いやですよ、女神様」

「くううう!! 小学生にしてハーレム王! しかし妬ましい! 見ていて嫉妬の炎が燃えそうなのじゃ!」

そんなことを大声で叫びながら泣く創造神に、誰もがゴミ虫を見るような眼を向けるのでした。

「さすがじゃ浩介! この創造神を嫉妬の炎に包むとは!」

驚愕と称賛を向ける馬鹿がここにいましたとき。

天界は今日もやっぱり平和でしたとき。

フワフワって漂っています。あれ、僕はどうしたのかな。

こんにちは、佐藤・浩介です。

なんで僕はここに居るのか、何かあったような、なかったような。思い出せないの、気にしたら負けって気持ちになりました。

『雑種よ、起きるがよい』

「ギルさんが居るってことは、ここは夢の中なんだね?!」

『貴様、今までの夢だと思っていたのか?!』

「え? 違うの?」

寝ると来れるから、夢なのかなあって思っていたら、ギルさんから違うって言われてしまった。

違うんだったら、ここは何処なんだろう?

『ここは精神と時空の狭間じゃ。貴様の中に溢れる能力が作りだした、一種の異空間と云ったところじゃな』

おじいさんが言っていることが、僕にはよく解りません。でもきつと、おじいさんが言ってくれるなら、覚えろってことなんだと思います。

大人って、こんなことをも覚ええないといけないって大変です。

『いや大人になっても覚える奴はいないからな』

「古城さん! なら僕をここに連れて来てどうするんですか!?!」

『やけに俺に対してあたりが強くないか?!』

そんなことないです!

『戯言はそこまですておくがよい、雑種。いや、浩介よ。今より王からの助言を授けよう』

「じよげん?」

それってなんだろう? あれ、習ったのかな。習ってないよね。意味が解らないので、ギルさんの前で腕組みしてみた。

ギルさんが何時もやっているからかっこいいので真似してみます。

「解りません!」

『.....』

『ギル! 頑張れギル! おまえならやれる! 英雄王だろう!!』

『儂と第四真祖では出来ん、英雄王たる貴様になら可能なことじや』

なんだろう、なんでかギルさんが凄く落ち込んでいるんだけど、どうしたのかな。

あれ、僕の中の知識? 経験? が英雄王の前で腕組みしたら殺されるって言うんですけど、僕は何ともないから。

きつとギルさんが優しい王様だからだ!

「ギルさん、かっこいい!」

『いや待て。何故、そんなことを言った?』

「え、優しい王様ってかっこいいなあって」

『我はこいつの思考がどうなっているか、読めぬ時がある』

真顔で考えるギルさんもかっこいいな、きつと立派な大人ってこういう人のことなんだ。よし、将来は僕はラスボスになるけど、ラスボスの時はギルさんみたいな顔を目指そう。

『いや英雄王みたいなラスボスって』

『ふむ、容赦の欠片もなく勇者を粉砕しそうじやの』

『待て貴様ら! 我のことをどう見ている?! いや今は浩介のことだ。落ち着くのだギルガメッシュ、おまえは王の中の王。この程度のことでは動揺しては』

「立派なラスボス英雄王になればいいんだ!!」

『いや待て』

「よおおおし! なら今からギルさんの宝物庫を訓練しないと」

『待てと言っている!!』

「まずは正確に狙って当てることから!」

『待てと言っているのだぞ浩介えええ!!!』

あれ、後ろでギルさんの絶叫がしたけど、どうしたんだろ。

止めないでギルさん、僕はラスボス系英雄王になるために頑張るんだから！ ギルさんの能力を貰ったんだから、最初から目指していて当然だと思う。

きつとそうだ！

『第四真祖は、ラスボスじゃないな』

『死神もラスボスではないな』

『貴様ら！ 何を他人ごとみたいに楽観している?! このままでは』

『いや、俺達はギルに任せただけだから』

『大義である』

『ク……いや待て、そうかそうか。ならば我に任せただけで後悔することなきようにな』
あれ、ギルさんの笑顔が何時もと違うような。あれって確か、怪しい笑顔だ。うん、前に呼んだ本に悪役がする笑顔って書いてあったから、間違いない。

きつとあれがラスボスの笑顔なんだ！

『そうだ。浩介よ、よく聞くがいい』

『はいギルさん！』

『ラスボスとはすべてを司る存在。多くの民を従えることなく導き、多くの苦難を乗り越える者のことを言う』

なるほど、難しいことをだけど、ギルさんが真顔で言ってくれるから、きつと本当の

ことなんだ。

『前に、健が言っていたこともあったが、あれがすべてではない。世界を見よ、浩介。嘆く人たちがいるな？ 悲しむ人たちがいるな？』

「はい！」

『では、そのすべてを救い支え、敬い。そして』

「はい！」

『そのすべてを手に入れるがいい！』

「はい！ え？」

あれ、なんだろう、話がまったく違ってきたような。

『ラスボスとはすべてを束ね支配し手に入れる者！ 云わば王のことよ！』

「え？」

『世界中の財を集め！ 世界中の楽しみを手に入れ！ 世界中の悲しみを前に笑う！』

つまり支配せよ！』

「……おおお！」

『待てギル！ おまえ何を教えてるんだよ?!』

『英雄王！ 貴様！』

『フハハハハ！ 貴様らが我に任せた結果よ！ よいな浩介！ 世界中の王の話を読み

！ そのすべてを手に入れるがいい！』

「解りました！」

『では貴様がまず最初にするべきことは……』

ギルさんがニヤリって笑いました。

あれ、僕の第六感が『やるな』って言っている気がするけど、ギルさんが今まで言ったことで間違いはないから。

僕はラスボスのためにギルさんの言うことに従う！

これが正解なんだ！

『まずは美女を集めるがいい！ ハーレムとはラスボスの必須能力よ！』

「何それ?!」

『現実に戻った時、最初にアリシアに告げるがいい。『解った、俺についてこい』と』

「………あ」

思い出した！ アリシアちゃんにキスされたんだ！ そっかそっか、僕はそれで気が失って。

え、戻ってついてこいって言えばいいの。

『ギル待て！ おまえ待て！』

『貴様、世界をどうするつもりじゃ？』

『どうもこうも』

ニヤリと笑ったギルさんが、なんだか悲しい顔で古城さんとおじいちやんに言いました。

『こいつを止めるストッパーがないと、本当に世界が詰む』

『……女か、そうだよな、男は女に逆らえないよな』

『さすが英雄王、そこまで見通しているとは』

『悲しいが、もはやそれしか思いつかん。我も耄碌したということか』

なんだろ、何故かギルさんの背中が霞んでいるような。

あれ、意識が。

『ではな、浩介よ。貴様が見事、『王』になるところ、この英雄王が見ていてやろう』

『はいギルさん！ ラスボス王になります！』

『……しまった！』

あ、最後にギルさんが手を伸ばしたような。

あれえ、僕の言っていること違うのかな？

そして現実に戻った浩介は、目の前にいる怒った顔で赤い顔のアリシアに対して。

「解った！ 俺のついてこい！」

「……はう！」

男らしく言つてのけたのでした。

「……浩介君！ なのはもなのはもいるの！」

「なのはちゃんは嘘つきだからダメ！」

「でもでも!!」

「そうやって僕の気を引いて」

フンと怒った顔で告げる浩介に、なのはがちよつと悲しい顔になって、その後顔を挙げて決意を込めたのですが。

「ダメだからね！」

「……ふええええええ！」

頑として拒否する浩介に、彼女はガチで泣きだしましたとき。

「え？」

「浩介君！ 本気なの！ 本気で好きなの！ ウソじゃないの！ 違うの！」

「え？」

「大好きなの！ 最初に会った時から大好きなの！ 一人でいた時に探してくれたのが嬉しかったから！ 何処にいても見つけてくれるから！」

大泣きしながらも自分の恋心を語る彼女に、浩介は固まってしまふ。今まで嘘だと思っていた、冗談だと。気を引いて、振り向いたら笑うような、そういった類の話だと。彼は思っていたことが、まったく違うことに気がついて。

「はあ、まったくもう！ ほら旦那様！」

「ええ？ アリシアちゃん、それって何?! なんで背中を叩いたの?!」

戸惑って振り返る浩介に、アリシアはピシッと指をさした。

「女の子が本気で告白しているんだから！ 男ならピシッと決めなさい！」

「え、はい」

キスされて早速、尻に敷かれる浩介。将来の夢はラスボスな少年は、戸惑いながらもゆっくりとなのはに近づいていき。

「本当に？」

「うん、大好きだよ。本当に」

「そっか、そうなんだ」

浩介は泣いているのはから目を反らし、空を見上げた。

何処までも高い青空に、何故か親指を立てて笑顔を浮かべるギルガメッシュの幻影が

浮かんだとか。

『待て貴様！ 我はそんなことは！』とか、浩介の中のギルガメツシュが言っているが、彼は聞いてないし見てない。

「解った、なのはちゃん!!」

「は、はい!!」

泣いている彼女の両肩に手を置く浩介。

いきなり肩を掴まれ、びっくりして涙が止まるのは。

二人は少しの間、見つめ合った後。

「俺のついてこい、なのは!!」

「………はい！ 一生、付いていくの！」

男らしい浩介の一言に、笑顔で答えるのはだった。

「待って浩介君！ 私も！」

「ずか、いきなり割り込む。」

昔ならば浩介はここで嘘だとか、冗談だつて断ったかもしれない、しかし今の彼の中にはギルガメツシュの言葉がある。

『待てと言っている！』とか、ギルガメツシュが叫んでいるが浩介には届かない。

「解った！ ずかも俺についてこい！」

「はい！」

「ちよつと待ちなさい！」

そんな甘つたるい空間に、アリサの一喝が入る。

どう考えてもおかしい、小学生が告白して、それが結婚するように聞こえるのはおかしくないか。

「一夫多妻なんて日本じゃおかしいわよ！」

「アリサも俺についてくる？」

「………あんたたちだけだと、何かしそうだから仕方ないわね」

言い訳を口にするツンデレがそこにいた。

こうして彼は無自覚にハーレムを作ったのでした。

こうして、中にいる英雄王、第四真祖、死神の総隊長はもちろん、世界を巻き込んだ、ラスボス系無自覚主人公の物語の幕開けでした。

『はあ』

『ギル、今日は飲もうぜ。存分に飲もう』

『特別な酒を出そう』

『ああ、苦勞を分かち合う、これが友だな。エルキドウよ、我は新しい友を得たぞ』

そして彼の、巻き込まれ系ラスボスになっちゃった主人公は、ここから始まったのでした。